
ポケモン不思議のダンジョン 新伝説 闇の司

鏡花水月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモン不思議のダンジョン 新伝説 闇の司

【Nコード】

N5673S

【作者名】

鏡花水月

【あらすじ】

時の歯車事件から1年が経った。探検隊チーム“ブライト”は世界を救った英雄である。だが、彼等が救った世界をまた、闇が包み込もうとしていた。存在してはいけない者となり、自分の命の意味をもう一度考える二人。今、守りたいものの為に何が出来るか。時空を超えて、物語は動き出す。

プロローグ（前書き）

続編の始まりです

プロローグ

暗く闇の息づく地底の底。無限大に広がる悪意が満ち渡っていた。
「……おのれ……この恨み……どう晴らしてくれよう……!!」
漆黒の塊は怒りと怨恨をその碧眼に燈し、報復を誓ったのであった。少年と少女に。

少年、シアン。ロビンソンはリオルの姿をしている。だが彼は本来リオルではない。人間なのだ。とある事故からリオルになってしまっていたのだ。戸惑うところに、少女が申し出をしてきた。彼女の名はハーブ。フローラ。優しい感性を持ったチコリータである。シアンはハーブの申し出を受けた。

申し出の内容は共に探検隊を組んで歩んでいくこと。

決して楽しいことばかりではなかった筈だが、彼はその要求を受け入れた。そして、探検隊として歩み始めた。

シアンは本当は未来からきた者だった。彼が住んでいた未来世界は暗黒の世界で、シアンは暗黒の未来世界を変える為、この過去の世界にやってきた。そして、暗黒の未来世界を無かったものにしようとした。

結果的に彼の試みは成功を修めた。タイムパドックスにより消える運命にあったとしても、臆せず立ち向かっていった。そして、時を経てハーブの悲しみをディアルガの慈悲により復活することができた。

時の歯車騒動から現在約一年が経過している。トレジャータウンは活気を取り戻し、隣接するプクリンギルドはますます栄えていた。そのプクリンギルドの一室で、シアン。ロビンソンとハーブ。フローラは目を覚ました。

01話 卒業試験（前書き）

続編が、本格的に開始致しました！

シアン

「この作者の文章のグダグダさ、何時になったら治るのでしょうか？」

し、失礼な。

01話 卒業試験

「卒業試験……ですか？」

プクリンギルドの早朝。その親方であるプクリンの口から発せられたのは約一年間修行を続けたギルドへの別れだった。

「ヘイ！ 何でオイラ達より後に入門したのにもう卒業なんだよ！」
シアンとハーブの先輩であるヘイガニが不満げな声をあげる。

「何を言ってるんだい。世界を救う程の探検隊だぞ。御前達とは実績が違うんだ」

プクリンの一番弟子で、自称情報屋のペラップがその抗議をあっさり切り捨てる。

「本来ならもつと早くに卒業させても良かったんだけど、なかなかその機会がなかったからな」

「でもそれは、卒業試験に合格すればの話ですよ」

冷静な態度で返すのはシアン。青い体に黒い目の縁。典型的なりオルの姿をしている。首に巻いたマリンプールのリボンが彼のクールさや智的な部分を際立たせている。

「何をすればいいの？」

高い声の主はハーブ。若草色の体に頭についた葉っぱ。大きくりくりした赤い瞳を不安げに揺らしている彼女の種族はチコリータである。普通のチコリータより小柄で少し幼く見えるところが彼女の持つ優しさを表しているかのようだ。

「そうだ。明日、卒業試験を受けてもらう。だからブライトの二人は明日に向け準備をしておくんだ。試験の内容は、神秘の森の奥地の、光の湖に隠されたお宝をとってくることだ」

『光の湖？』

ハーブはその名前に何と無く聞き覚えがあった。彼女はその場所に行ったことがあるのだが、覚えていないようだ。

「そうだ。それに成功すれば御前達は晴れて卒業の身だ」

「でも、気をつけてね。光の泉には悪の大魔王が住んでいる、という噂があるんだ」

「ええっ!？」

ハーブは素っ頓狂な声をあげた。

「……ドゴームさん、確か何年か前に卒業試験を受けた、と仰っていましたね」

シアンは冷静なまま、ギルドの弟子の一人、ドゴームに話を振る。だがドゴームは

「あ？ ああ。だが卒業試験の内容はばらしちゃいけない、というのがギルドの仕来たりなんだ」

そう言っただけで黙ってしまった。

「そうですか……」

「それでは、チーム：ブライトの二人は明日の試験の為にトレジャータウンで入念な準備をしておくこと。他の皆は仕事にかかるよ」
「おっ！」

こうして、いつもの関の声と共に今日という日が始まった。

トレジャータウンはプクリンギルドから徒歩で約一分のところに
ある街だ。

時の歯車騒動以降、世界を救った探検隊がいる街として盛んになり、景気も上昇してきている。

「……悪の大魔王って何なのかしら……」

ハーブがカクレオンの店で購入した復活の種をトレジャーバッグに入れながら呟く。

「恐れることは無いだろう。僕達は神とも呼ばれたポケモンを倒したんだ」

シアンが楽観的な言葉で返す。

「でもその私達でも勝ったことのない相手がいるじゃない」

「親方様のことか？ そもそも勝負すらしたことがないから、どち

らが強いかなんて分からないだろう。それに、もう一度言う。僕達はディアルガを倒した英雄なんだ。今更そんなお伽話程度でビクビクしてどうする」

今日の彼はやけに強気である。卒業試験を受けるという喜びがそうさせるのだろう。シアンは冷静な面持ちで、ハープは心配そうな面持ちで、トレジャータウンの片隅の『パッチールのカフェ』に入っていた。

「卒業試験を受けるんですか？」

そう尋ねたのはチップ・ジュリアス。パッチールのカフェの常連のパチリスである。一時期、ブライトの一員として活躍していた。今は脱退しているが、最近は一緒に探検に行くなど、また加入の兆候を見せている。

「頑張ってるね」

そう言ったのはレイナ・コンスタンス。ツンとした雰囲気の特徴の♀のイーブイである。彼女もまた、シアンと同じく記憶がなく、人間からポケモンとなった者だった。その正体は未来世界から星の停止を変える為にやってきた少女である。シアンがタイム・パラドックスで消滅した際に彼女も消滅した筈なのだが、シアンがこの世に戻ってきた日にまた彼女も戻ってきている。現在PPO捜査課の課長を務めている。

「有難う。ところで、悪の大魔王って知ってるかな？」

「んー何でえ。その面白そうな奴はよお」

シアンが訊ねた時、隣のテーブルから軽薄な口調が響いた。ローブを被った大柄な体躯。ゼアン・ロビンソンである。その正体は人間で、シアンの祖先である。人間は本来この大陸の北のはずれに住んでいて、ポケモンとの交流は一切ない筈だが、彼は何故かここにいる。本人は特別な方法を使って来たらしい。

「えっとね……」

ハーブは卒業試験の全様について説明した。

「それで、光の泉の宝をとって来ないと行けないんだけど……そこには悪の大魔王が住んでいるらしいのよ」

そう説明するハーブは表情が強張っており、ビビっているのが丸分かりである。

「ふーん。そりゃてーへんだな。ま、なんとかなんじゃねーの？」

ゼアンはそう言っただけで空っぽのグラスを店主のパッチールのところへ持って行った。最初の方こそ彼の奇怪な容貌にビビりまくっていたパッチールだが、今はもう慣れたらしい。笑顔のまま彼に渡されたグラスをかたづけている。因みにゼアンの正体を知っているのはシアン、ハーブ、チップ、レイナ、さらにトレジャータウンの一部の住民位である。

「もうこんな時間か。僕は帰るよ」

シアンはそう言っただけで立ち上がった。ハーブもそれに釣られて帰る用意を始める。

「試験、頑張ってください」

「受かりなさいよ」

「有難う」

シアンは軽く微笑んだ。チップは会釈をし、レイナは顔をほのかに赤くしてそっぽを向く。

「あれ？」

パッチールのカフェの出口はギルド前の十字路にある。そこは水飲み場もあり、プクリンギルドも側にある為に意外と人通りも多かったりするのだが……

「み、皆どうしたの？」

カフェを出たシアンとハーブが見たのは、ギルドメンバー全員だった。

「あ、ああ。いや、ちょっとな。ハハ……」

ペラップが気まずそうに言葉を濁す。

「さ、さあ皆帰ろう」

そう言ってそそくさとギルドの中に入っていった。

「きよ、今日も頑張りましたわ」

「早く晩御飯を食べたいでゲス」

他の皆も挙動不審なまま立ち去っていった。

「……………そういうことが」

シアンが苦笑い気味に呟く

「え？ な、何？ なんなの？」

「いや、今の態度を見ていたらアレしかないだろう」

「あ、アレって何よアレって」

ハープはシアンの言葉の意味が分からず、おろおろするばかりであつた。

翌日。ペラップは出発前のシアン達にあるものを渡した。

「……………これは何なの？」

ハープは不思議そうな顔でそれを見つめた。直径一センチの小さなバツジである。

「受験票だ。それを他人が見て一番目立つ場所につけておいてくれ」

「は、はあ……………」

言われるがままに、シアンは自分の胸元、ハープは首の蕾と蕾の間につけた。

「それでは二人共、頑張っておいで」

『はい！』

チーム：ブライトの二人は勇ましくギルドを出た。それを先回りしようとしてきた影があることに気付いていない。

01話 卒業試験（後書き）

神秘の森に行ったシアン達。そこは、強敵揃いのダンジョンだった。

シアン

「行くぞ！」

しかし、彼等はダンジョンの奥深くへ、何処までへも潜る。

ハーブ

「シアン、絶対合格しようね」

果たして、彼等は無事に試練を乗り越えられるのか！

次回「02話 神秘の森」乞うご期待！

シアン

「何、そのアニメ的な後書き（汗）」

02話 神秘の森（前書き）

後半ggggggです♪

シアン

「つつか更新遅い」

へい、すみません。このところ他小説に時間を割いてるんで（汗）

シアン

「何故今更」

いや、前作の終わりの頃とか他小説をほっというてそればかり手をつけてたからさあwww

シアン

「ほっとかなくても良いんですよ。こんな駄作」

酷いな（涙）

02話 神秘の森

「あれ、ヒメグマにリングマ。どうしたの？」

彼等がギルドを出ると、すぐ一組のペアと出くわした。ヒメグマとリングマ。共にこのトレジャータウンの住人である。

「今から光の泉に行くのよ」

「ええっ!？」

そのヒメグマの答にハーブは心底驚いた。それに対してシアンは眉一つ動かさない。悪の大魔王の正体を御存知な為だ。

「そ、そんなところに行って大丈夫なの!？ そこは悪の大魔王がいるのよ!？」

「？ 悪の大魔王？ なんだそのメルヘンチックな奴は」

リングマが不思議なものを見るような目で首をかしげる。

ハーブは

「え……嘘、でもプクリンは悪の大魔王……」

視線を泳がせて焦っている。シアンはフツと鼻で笑い、リングマ達に問いかけた。

「二人とも、光の泉には行ったことがあるんですか？」

「あ？ ああ。結構行ったな」

リングマは慣れている為かシアンの大きな態度は気にしない。

「とにかく、私達はそんな物騒なのは見たことないわ。何かの間違いじゃないかしら」

「そうだな。じゃ、早く行くぞ」

ヒメグマ達はそう言う神秘の森の方角へ歩き出した。

「……どうということかしら」

「さあね。真相は光の泉に辿りついてからの楽しみだろう」

シアンはそこで腰を下ろすとトレジャーバッグの中身を確認する。

「オレンの実が四つ、穴抜けの珠を一つ……うん、準備は万端だな」
シアンはリングマが完全に見えなくなったのを確認して立ち上が

った。理由は簡単。折角の卒業試験なのだから他人の手など借りたくは無い。それに彼等を巻き込むわけにはいかないからだ。

「シアン、準備は出来た？」

隣を見ると今まで引き攣った表情のハーブが、彼を見て自信満々の笑みを浮かべている。

—— 変わったな……

他人見よがしでもそう思う。彼女は僅か一年前まで敵ポケモンに異常なまでの恐怖を抱いていたのだ。

「準備は万端さ。行こう。僕達の正念場に」

反対に、シアンはキリツと顔を引き締めた。

この世界には鉄道という概念がある。それは人間の世界と同じようなものだ。切符を買って、到着した車両に乗り込む。そして車両は線路伝いに走り出す——

乗車から数十分後。シアンとハーブは神秘の森の入り口に立っていた。

「シアン……いよいよだね」

「ああ。この試験をパスすれば僕達はもうギルドの規則や習わしに縛られることもない。頑張ろう」

神をも倒した彼等は悪の大魔王など恐れない。ギルドの卒業は確信していた。卒業など高い絶壁にも等しいと恐れられるブクリンギルド。その卒業を。

「ドダァー！」

「……つつあ……」

やはり卒業試験場には選ばれるとあってか、ダンジョンのポケモンのレベルも並ではなかった。二人はドダイトスの放った地震をジャンプすることでかわすと、ハーブはソーラービームを放つ為、頭の

葉っぱに光を吸収し始めた。そこまでのタイムラグを埋めるためにシアンはハーブとドダイトスの間に立ちふさがり、黒いオーラを纏った銀の針、暗黒星雲で正確にドダイトスの葉っぱカッターを弾いていく。

「シアン、良いわよ！」

ハーブの合図と共にシアンは跳び退る。一瞬の後には極太の光の束が彼女の葉から放たれていた。それはドダイトスに突き刺さり、彼を5m程後へ押しやる。

「グ……ウ、オオオオオオオ！」

だが、ドダイトスは止まらなかった。それどころか怒り狂って咆哮をあげる。更にベイリーフが襲いかかってきた。

「ちっ……」

シアンはドダイトスの攻撃を反射的にかわし、ベイリーフに毒突きを喰らわせた。ベイリーフはなんとか持ちこたえたが、毒状態に陥っていたのだろう。すぐに倒れてしまった。シアンは毒突きを喰らわせた後、何も考えずにドダイトスとの戦闘に戻っていた。

「はっけい！」

彼はドダイトスの背中に登り、頭にはっけいを打ちこんだ。

「グオ!？」

ドダイトスがよろめく。さっきのベイリーフが襲って来たのは幸いだった。ベイリーフが来なかったら恐らくこのような不意打ち行動は出来なかったであろう。ドダイトスのはっけいの影響で麻痺状態に陥っている。

「マジカルリーフッ！」

ハーブが虹色の葉っぱで止めを刺す。

「だいぶ奥まで来たよな……」

三十分後。彼等はロゼリアを倒し、光の泉まであと一步のところになっていた。

「あ、あれは！」

突然、ハーブが明るい声を出し、駆けだす。

「ちよっ、ハー……」

シアンは止めようとして、彼女が見ているのが何なのか気付いた。大きい影と小さなシルエット。リングマとヒメグマである。

「ヒメグマ！ リングマ！」

その声に二人は振り向いた。

「あら、貴方達。悪の大魔王は見つかった？」

「いや、何もいなかったよ……」

「そうだろ？ 何かのガセ情報だつて」

ハーブの言葉をリングマは笑い飛ばす。

「じゃあ、私達この奥に用があるから」

彼等はその言葉を残して進んでいった。

「シアン！ 私達も行こう！」

「ああ……」

シアンは釈然としないまま頷いた。

「……感じるな」

「え？」

「いや、何でもないよ」

ハーブが見咎めたのをシアンは適当に誤魔化した。本当に何でも無いこともなく、見張られているという感覚を大いに感じていたのだが、そこはスルーした。どうせ自称：悪の大魔王の手下だろう。

「さ、行こう」

「うん」

チーム：ブライトの二人はリングマ達の後を追いかけていった。卒業という、大きな関門に向かって。独立した一流の探検隊となる為に。

その夢の塊が、フツと姿を消した。より正確に言えば、落とし穴に落ちた。

02話 神秘の森（後書き）

光の泉に辿りついたシアン達。そこで待っていたのは、驚くべき相手だった。

????

「ボクは、悪の大魔王」

襲いかかる敵達に、彼等はどう対応するのか。

????

「そして子分九卿だ」

卒業試験の結果やいかに！

次回「03話 卒業試験開始」乞うご期待！

03話 卒業試験開始（前書き）

えー、後半グツダグダです。

シアン

「……それ、いつもでしょう」

いや、今回はいつも以上にグダグダなんだよ

シアン

「……まだ墮ちる余地があつたのか……」

03話 卒業試験開始

「きゃあああっ!？」

ハーブが金切り声をあげる。シアンは声を失っていた。

まさか、こう来るとは――!!

ここで罾があるとは想定していなかった。彼等はてっきり光の泉で待ち伏せていると思っていたのだ。完全に、彼の失策であった。ハーブは何が起こっているか分からなかった。ただ頭の中で色んなことが渦巻き、思考がカオス状態になっていた。

「あうっ!」

「痛ててて……」

受け身を取りながら地面に落ちる。しかし慣れていないことをしたのか、あまりうまくいまい結果とは言えなかった。二人共痛む場所をさすりながら起き上る。周りは暗く、頭上の穴からかるうじて光が見えているが、周囲は全く見えない。

「くそ……落とし穴か……」

大量の葉っぱと枝でうまくカモフラージュしていたのだ。それ故に気付かなかったが、完全にしてやられた。

「あ、穴が塞がれていくわ!」

ゴゴゴゴゴ、と音が響き穴の中が真っ暗になる。

「ちょ……」

真っ暗だ。すぐ隣にいるパートナーすらいないのではないかと心配になる。

「シアン、大丈夫?」

「あ、ああ。しかし……完全に失策だな……」

彼の口調はいつも通りのものであったが、そこに心細さや悔しさが滲み出ている。

「フッフッフ」

「っ!?!? 誰っ!?!」

突然響いた不吉な声。シアンはその声に聞き覚えがあるし、それがどんな意図によるものかなんてたかがしれている。だが彼より洞察力に欠ける上にパニック状態に陥っているハーブはその声の主が誰かなんて分からない。

「……遊んでないで、さつさと姿を現したらどうですか」

シアンの口調は、暗闇の中で戦うことに対する恐れと、自分の愚かさに対する苛立ちから低く刺々しくなっている。

「……ボクは悪の大魔王」

「あ……」

ハーブは恐れを抱く。今まで抱いていた絶望への嫌悪が最大まで膨らんでいく。

「そして大魔王の子分九卿だ」

また別の声が聞こえる。シアンは声質から誰であるかを判断した。「フツフツ。君達、ここに来たからには生きては帰さないよ」

悪の大魔王が言いかけたその瞬間だった。

ドサッ

シアンが腹に据えかねたのか、一つの不思議珠を取り出して後に放り投げる。

「!？」

地面に落ちた珠は瞬間、眩い閃光を辺りにばらまく。

「……いつまでも遊んでないで、さつさと白黒つけましょう……親方様」

「え……」

先程シアンが使用したのは光珠。その効果により、穴の中は外と同じように明るく、悪の大魔王も、子分九卿の正体も丸分かりである。

「プ、プクリン!? それにギルドの皆も! これってどういうことなの!」

そう。その正体はプクリン、ペラップ。そしてギルドの先輩達であった。

「う……」

全てを見透かされてしまったペラップが口ごもる

「……君はいつまでも知能レベルが変わらないんだね……」

シアンは溜息と共に皮肉を言う、種明かしを始める。

「昨日、貴方達は全員揃ってギルドに帰ってきていた。普段見張り番でギルドにいる必要があるデイグダさんやドゴームさんまで外に出る理由。それは光の泉で準備をする為。更にリングマさんとヒメグマさんは悪の大魔王などいないと仰った。これが何を意味するかは誰でも分かりますよね？」

プクリン以外のギルドメンバーが苦い顔をする。

「こんな暗闇の中でも普通に戦えると思ったのは……これの為ですね」

シアンはそう言っ胸元につけていたバッジ——もとい受験票を掲げて見せる。

「これはある種の発光体。暗い場所で光を発する物質です。これを目印にするつもりだったのではないですか？ 親方様」

その場にいる全員の目がプクリンに向く。

「お……親方様ってだあれ？」

その口から出た答はそれだった。

「え……ちよっ」

「ワ、ワタクシも知りませんわ！ キマワリなんて！」

キマワリに似た九卿の一人が否定する。

「……キマワリ、まだ私は何も言っていないよ」

「しょうがないな。ハーブ、準備は良いか」

「じゅ、準備って……」

ハーブが一抔の戦慄を覚える。それは瞬く間に広がり、不安がこみ上げてきた。

「親方様、何があっても試験は続行するのですね……」

急にシアンが目を伏せ、声のトーンを落とす。プクリン以外のギルドメンバーをドキッとさせるほどの妖艶さだった。そして、畏怖

の念を感じさせるオーラだった。

「皆！ 悪の大魔王の名にかけて、侵入者を追い払うよーっ！」
プクリンの叫びと共に卒業試験^{たかい}が始まった。

開始六秒。始めに倒されたのは当たり前というか当然というか、ビッパだった。ギルド最弱で、しかもシアンが格闘タイプであったからそれは否めないだろう。ノーマルタイプの彼には最強の天敵だった。

「水平斬り！」

そのシアンは水平斬りを使ってキマワリ、グレッグル、ドゴームに斬りつけた。ドゴームとグレッグルには直撃して彼等は目を白黒させていたが、キマワリは咄嗟にガードの体勢をとっていた為にダメージは少なかった。

「マジカルリーフ！」

ハーブは虹色の葉でデイグダを倒した。なるべく消耗せずに敵を倒していく。敵に囲まれた時のベターな戦い方だ。

「デイグダ！」

倒れた息子を見たダグトリオが声を張り上げたが、ハーブが蔓の鞭を構えていた。

「いくらデイグダが心配でも、今は自分の身を守るべきじゃない？」

「っ！ 地震！」

切羽詰まったダグトリオは地面タイプの大技を繰り出す。

「しまった！」

シアンが叫ぶ。かくいう彼も地震の波に吞まれてしまった。だが

……

「ゲエ！？」

「ヘイ、ダグトリオ！ 何するんだ——」

それでダメージを被るのはシアン達だけではない。地震は敵味方関係無く襲うのだ。

「……僕達が倒されないだけでも、マシというべきかな……」

シアンは今回の地震の犠牲者：ドゴームに追悼の念を送りながらキマワリに足払いをかける。転ばされたにも関わらずキヤーと歓喜の声をあげるマゾ向日葵の葉っぱを片方掴むと背負い投げの要領で彼の後方に投げる。そこに居たのは――

「グヘッ!？」

背後からシアンに攻撃を仕掛けようとしたグレッグル。彼はシアンが自分に気付いていないと思っていたが、大間違いであった。シアンはちゃんと背後の邪念グレッグルの存在に気付いていた。

「キヤー――!！」

「グヘエ!？ やってくれんじゃねえか。グヘヘヘ」

キマワリとグレッグルが思い切り交差する。グレッグルは意識があるが、キマワリは頭でも打ったのか、ピク、ピクと痙攣している。「気味悪い声を出している場合じゃないですよ」

シアンは冷淡な口調で言うとはっけいをグレッグルの体に飛び込ませた。毒タイプを持っているグレッグルにはその威力は低いが、シアンが重要視しているのは威力ではない。

「グヘエエ!？ 体が……」

刹那、グレッグルの体に鋭い痛みが走った。はっけいの追加効果の麻痺である。これにより、グレッグルは行動できない。

シアンは水平斬りでグレッグルに斬りつける。

「グヘ……」

ダメージが溜まっていたのだろう。グレッグルは麻痺でガードもとれずにシアンの攻撃を受け、倒れた。今日のシアンは少し容赦がないかもしれない。

「くう……」

ハープはチリーンとダグトリオのコンビネーションに手こずっていた。ダグトリオがハープの苦手タイプの飛行技、燕返しを使用してくるのだ。チリーンの回復技もあって、厳しい戦いとなっている。

「燕返し！」

「蔓の鞭……っ」

ダグトリオの燕返しに対し、ハーブは蔓の鞭を当てて応戦するこ
としか出来ない。燕返しは必中技だ。かわすのはほぼ不可能に近い。
——このままじゃ倒されるだけ……っ！

ダグトリオは攻撃力が高い種族だ。放射までに時間のかかるソー
ラービームでは確実に燕返しを喰らってやられてしまうだろう。そ
こまで考えて

「あ」

要はダグトリオが燕返しを使えなくなれば良いのか、と気付いた。
「念力！」

チリーンの念動波をハーブは屈んでかわす。

「こつちにも必中技はあるのよ！ マジカルリーフ！」

ハーブはそう叫ぶと虹色の葉を幾枚も飛ばす。

「きゃあああ！？」

「ぐうつ！？」

マジカルリーフはチリーンとダグトリオを襲う。

「ぐ……お……だ、大地の力！」

ダグトリオが苦しげに叫ぶと地面から木の根が突きでた。それは
幾重にも絡まり、彼等とハーブを阻む壁となる。

「くっ……ちょこまかと五月蠅いわね……」

ハーブが呟いた瞬間、大地の力のダムが決壊した。

「ハイパーボイス！」

「！ エナジーボール！」

チリーンの攻撃にハーブはいささか不意を打たれたようだが、エ
ナジーボールで相殺する。その瞬間違和感も感じた。

——ダグトリオがいない！

体全体から冷や汗が吹き出す。それと彼女の腹部に激痛が走るの
はほぼ同じだった。

「穴を掘る」

ハーブの視界から隠れている間、彼等は穴を掘るで不意打ちを狙っていたのだ。

「つ、蔓の鞭！」

「燕返し！」

彼女の渾身の一撃はまたしても弾かれてしまう。

「念力！」

チリーンの放った力は紙一重でハーブにかわされる。

「燕返し！」

「蔓の鞭！」

二つの音がまたぶつかり合う。ハーブもダグトリオも徐々に疲弊していく。

「癒しの鈴——」

チリーンの体が光り出す。ハーブはそれを阻止しようとエナジーボールの塊を作った。ダグトリオが完全に無防備のハーブに爪を向ける。

「やらせるか！ 燕返し！」

だがその力は発動しない。

「な……」

「エナジーボール！」

深緑の珠がチリーンとぶつかって小さな爆発を起こす。チリーンは地面に落ちた。

「PPって言われて分からない？ ダグトリオは技を出し過ぎたのよ」

「——！！」

ダグトリオが目を見張る。ポケモン達が使う技にはPP、というものがある。これは技の使用制限回数のことである。先程燕返しを出し過ぎたダグトリオはもうその技を使えないのだ。

「これで終わりよ」

ハーブの頭の葉っぱが淡く光り出した。ソーラービーム。切り札の前兆だ。それを前に、ダグトリオは為す術がない。他の技は相性

の悪い彼女に対しては不意打ち用にしか備えていない。

轟音と共に、光の束が放たれる。勝者は、チコリータの少女だった。

――親方様……

シアンは横目でチラリとプクリン――自称悪の大魔王を見る。プクリンはいつもの笑顔のまま、戦場を眉ひとつ動かさずに見ている。

――ギルドの弟子たちが……いや、九卿が次々に倒されていつているというのに手を出さない？ 自分の力はタイムン一対一の時にでもとっておくと言うつもりか？

シアンは一瞬そちらに思考を向けたが、すぐまた目の前の状況に引き戻される。体から一瞬、力が抜けた。

――何だ、これは――！！

どうやら先程の戦闘でさうとう体力を減らしていたようだ。

「う……ま、負けませんわ……」

先程投げ飛ばしたキマワリが起き上っている。だが頭を打ったらしく、足元がおぼつかず、顔色も少し青い。シアンは自責の念に囚われた。彼女を投げたのは自分なのだから。

――脳震盪とか起こしてないよなあ……

心配しながらもシアンは拳を構える。キマワリがふらついていて、技を出すのを躊躇われる。やがて彼女はか細い声で最後の力を出した。

「は……花卉の舞」

シアンは言葉を失った。あれだけボロボロになって、まだそんな大技を出せるのか？ 沈黙の空白に、シアン目の前に危険が迫っているのも気付かない。花卉の舞は彼に大きなダメージを与えた。

「ぐあああああああああ……」

体全体に痛みが走る。関節がギシギシと鳴り、立っているのも辛

いかもしれない。でも、

「負けられない……ここで、勝つんだ！」

シアンは立ち上がる。絶対に負けたくない、という意志があるから。勝利に対する、強い執着心で。

「そん、な……で、すわ……」

キマワリは花卉の舞の影響で混乱状態に陥っている。止めを刺すのにはかっこの状態だった。

「はっけい！！！」

花卉の舞のダメージは思ったほど大きくなかったようで、まだ十分の威力があった。

「……悪の大魔王様、貴方の子分九卿のうち八人は倒してしまいました」

シアンは優しく笑いかけながら悪の大魔王とその側近らしいペラッブに語りかけた。

「……あとは、貴方達を倒せばいいのね？」

ハープが目を爛々と輝かせる。二人の卒業は、すぐそこまで迫っている。

03話 卒業試験開始（後書き）

シアン

「く……はは、やっぱりギルドの先輩たちは強いんだな……」

君も改めて分かっただろうね。

それから今回最後まで私の駄文を読んで下さった方、有難う御座います。そしてお疲れ様です（汗）

04話 悪の大魔王への挑戦（前書き）

えー、事情があり、昨日は更新できませんでした。

シアン

「何があつたし」

うん、色々あった。理由は言えないけど。

ハーブ

「私達はどうなるのかしらね」

今回、決着が付きます。ではどうぞ

04話 悪の大魔王への挑戦

シアンはプクリンのハイパーボイスを辛うじて回避した。

後ろの壁からバキィッ！ と轟音が聞こえる。それと同時に、地面が振動しているのも感じられた。

「気合い珠あっ！！」

シアンの掌からだいたい色の闘魂が放たれる。しかし、それはプクリンの手に止められた。

—— なっ……

シアンは恐れを感じたが、同時にプクリンの顔が少し歪んでいるのにも気付いた。

しかしその瞬間、

「私もいるのだぞ！ エアカッター！」

ペラップが翼を振った。シアンは動けなかったが、ハーブが代わりにマジカルリーフでその技を相殺する。

その粉塵で場は一瞬靄に包まれる。

「真空斬り！」

シアンは掌を向かい合わせる。その間から無数の刃が飛び出した。プクリンは往復ビンタを使って打ち消すが、ペラップは耐え忍ぶしか術がない。また、プクリンも真空斬りの全てを防ぎきれてはいない。だが、二人共その余裕さを崩すことは無い。

「自然の恵み！」

だからといってシアン達も苦戦することはない。目の前の敵に攻撃を当てていく。それだけだ。

現在ハーブが所持しているのはキーの実。自然の恵みは電気タイプとなる。

「ぐうっ！」

ペラップは翼でその攻撃を打ち消したが、彼は飛行タイプである。幾分かダメージは残った。

「やあ！」

シアンがその隙をついて裏拳を繰り出す。その拳は見事ペラップの頭に収まった。だがペラップが直撃したすぐ後にハイパーボイスを繰り出した。裏拳の直後でバランスも整っていないシアンに避けられる筈が無かった。

「うわあっ！！」

「きゃあ！！」

シアンは吹き飛ばされ、ハーブにぶつかる。

明滅する視界の中、ハーブが見たのはギガインパクトを放つ前触れのプクリンだった。

「いやあああーっ！！！」

ハーブは叫びながら蔓の鞭をプクリンに放つ。

「ひっ……」

蔓の鞭がシアンの頭上スレスレを駆け抜けていったことは気にしない。因みに彼は今尻もちを吐いた状態である。

「ギガインパクト！」

「蔓の鞭！」

二つの技はぶつかった。だが、ギガインパクトと蔓の鞭では規模が違いすぎる。ハーブは圧され、あっという間にプクリンはシアンとハーブの目の前まで迫ってきている。ギガインパクトが直撃しようという瞬間、

「気合い珠！」

プクリンは後方十mまで飛ばされた。蔓の鞭とギガインパクトのセッターアップ膠着時間はシアンの気合い珠の準備に十分だった。

「とりあえず、状況を打破しようか。ダイクネビュラ暗黒星雲！」

シアンは銀の針を何本か構え、シャドークローの力を加える。両手から、暗黒星雲を放ち、それらはプクリンとペラップから、シアンとハーブを見えなくする壁となる。ブラインドが――

『ハイパーボイス！』

突如、紫色の煙の奥から音波が二つ、飛び出してきた。プクリン

「!？」

ハープはプクリンの腕に蔓の鞭を絡ませた。そのまま跳び箱の要領でプクリンを後に押し出し、その上を飛び越え、彼の背後に跳び下りた。そこにいたのは――

「しまった――!!」

「原始の力!」

ペラップだった。ハープは一息で、容赦なく彼の苦手とする岩タ
イプの大技を放つ。

「ペラップ!!」

プクリンの悲痛な声。かつてペラップがシアン達を庇って怪我を
負ったときに彼に呼びかけた時の声に似ていた。

少し顔を顰めたが、シアンは後ろを向いたプクリンに呼びかける。
「倒れている敵に、背中を向けていていいのですか？」

「なっ……」

プクリンはまた前に向き直り、衝撃的な光景を直視する。さっき
ペラップが倒した筈のシアンが、飄々とした顔で、構えた気合い珠
を放っていた。

プクリンは、防御態勢も取れずに気合い珠を受ける。

「僕が相手の攻撃をそのまま喰らうと思いました?」

シアンは楽しそうな悪魔の笑みを浮かべる。彼はペラップのエア
カタターなど喰らってはいなかった。胸に手を構えてガードしてい
た。喰らって倒れたふりをし、チャンスを見計らっていたのだ。自
身の切り札である。気合い珠を確実にプクリンに当てるためのチャ
ンスを。

――もう良いかな。ボクが君達に教えることは無いよ。こ
れからも頑張ってね

プクリンは、チーム：ブライトに合格の判断を下した。今まで自
分を慕ってきた弟子を手放す、というのはとても寂しく、辛いもの
であったが受け入れざるを得ない。

「た、大変だ。逃げろっ！」

プクリンはそう叫ぶと右手に珠を掲げた。そこから光が漏れる。

「！」

シアンとハーブは身構えたが、その必要は無かった。彼が取り出したのは穴抜けの珠。光が晴れた時、穴の中にはシアンとハーブの二人しかいなかった。

04話 悪の大魔王への挑戦（後書き）

シアン

「僕達勝ったんですね」

ハーブ

「シアンの倒れたふり……リアルだったわよ」

グロいねそれ（汗）

05話 試験合格。そして・・・（前書き）

ちよつと更新遅れたかな？w w w

シアン

「笑いながら言わないで下さい」↑気合い珠を構える

うん、分かったからそんな危険球を放つのはやめて。マジやめて（涙）

05話 試験合格。そして・・・

「よつと……」

シアンは（何故か）持ってきていた鍵縄をロープで地上に引っかけた。

「じゃあ、脱出するか」

シアンはそう言ってヒョイ、と飛び上がり、地上に着いた。ハーブもシアンに遅れて地面に足を着けた。

地面が崩れないかと心配したが、どうやら杞憂だったようだ。

ほんの数十分地下にいたのに、日の光を久しく見てないような感情になった。

「光の泉はこの先ね。早く行こう」

ハーブは意気揚々と光の泉へと歩き出した。シアンも、自分の体に着いた傷を調べ、大したものではないと確認するとハーブのあとに続いていく。

暫く歩いていくと光の泉に辿りついた。見た目は普通の泉である。中心から眩い光を放っていないければ。

「……？」

ハーブはこの場所にデジャブを感じていた。前に来たような気がする……だが、どうしても思い出せない。

「御前達遅かったな。何かあったのか？」

ブライトの到着が遅いのを訝しんだリングマが尋ねる。シアンはそれを

「ちよつと達の悪い悪戯に引っかかったんですよ」

と受け流しておいた。リングマとヒメグマは互いにその疑問顔を見合わせた。

「まあいいや。とりあえずちよつと困ってることがあってよ」

「困ってること？」

リングマの呟きにハーブは咄嗟に反応する。

「ああ、あれ見ろ」

リングマは光の泉の方に指をさした。そこに一つ宝箱が置いてあるのが確認できた。

「何ですか、これ？」

「ああ、俺にもよく分からねえんだ」

「普通に開けても良いんだけど、何かの罠だったりしたら怖いじゃない？」

ヒメグマの言葉に、シアンもハーブもああ、と分かったように頷く。

「多分それは卒業試験用の宝じゃないかしら」

「宝？」

「うん。私達、それをとってこいって言われてるんだよ」

「そうか……」

ハーブの言葉にリングマは納得した。その間にシアンは宝箱に触っていた。

——
ヴヴン

シアンは物体に触った時、たまにその物体に関する過去や未来の事象を見ることが出来る。

——
ヴヴン

人はそれを『時空の叫び』と呼ぶ。今も、その時空の叫びは発動している。

——
キュウウウ……

今も、シアンに目眩が襲っている。目の前で閃光が走り、閃光から一つの光景が溢れだす。

——僕が今見ている影。おそらくあれは親方様のものだろう。今、宝箱を置いていった。……つまり、この宝箱は卒業試験用のものとみて間違いないな。

そこで映像は途切れた。シアンは後を向いてハープに言う。

「ハープ、これで間違いないみたいだ」

「ホント!？」

ハープは明るい表情で答えた。

「ああ、時空の叫びではこれは親方様が持ってきたものみたいだ……ところで、貴方達は何故ここに？」

シアンはリングマ達に話を振った。

「ああ、忘れるところだったな。ほらヒメグマ、さっさと行きな」
リングマはそう言うヒメグマの方をポンと叩いた。

「うん」

ヒメグマはそう言う光の泉の中心地——眩い光が迸る魔方阵の中に入ってしまった。彼女が体ごと振り向いたとき、何処からか、声が響いた。

『目醒める者達よ。ここは光の泉。汝は進化を求めるか?』

「!？」

突如として響くその声にシアンもハープも身構えたが、誰かが襲ってくるという事は無かった。

「うん、お願い」

その間にヒメグマは答えていた。『うん、お願い』とは進化を促す意志があるという意味なのだろうが、どういことなのか、シアンにはよく分からなかった。(シアンはポケモンが進化するということを知っている)

ハープはやつとこの場所がなんなのか思い出した。5年ほど前に

姉と来たことがある。あの時、この場所に来ていなければ彼女も探検隊になってもう一度この場所に立つなんてことは無かっただろう。『汝、進化に宝具は必要か？』

「要らないわ」

ヒメグマが答える。その瞬間、ヒメグマの周りで光の渦が巻き、彼女の姿が見えなくなった。

バハアツツ！！

光の筈が内から弾け、そこに立っていたのはリングマだった

「え？」

シアンはほけつとした顔で、泉の中央に立つリングマと自分の傍に立つリングマを何度も見比べた。

「い、今は……これが進化ですか？」

「ええ。ポケモンはある条件を満たすと進化して、自分の姿かたちが変わったりするのよ。それだけじゃなくて、強さも変わったりするの。技の多様性が小さくなってしまっからちよつと問題があるんだけどね」

いまいち状況が掴めないシアンにヒメグマだったリングマが説明する。シアンは首を傾げたままだったが、ハープは目を輝かせると、

「じゃ、じゃあ私達も進化出来るのかな！？」

そう言つて光の泉の中心地に躍り出た。その場に居た全員の視線が彼女に集まる。その瞬間、またあの声が響き渡る。

『……ここは光の泉』

重く低い、遠雷のような声。

『汝、進化を求めるか？』

その声はハープに尋ねかけた。

「うん！ 進化したいよ」

ハープはその声の雰囲気合わない快活な口調で返事をした。だが声は苦にもならないような声質のままだ。

『汝、進化に宝具は必要か？』

「……宝具？ なんのことが分かんないけどいいや。要らないよ」

ハーブがそこまで答えると泉から溢れ出る光の量が増した。

『目醒める者達よ。では始めるぞ……』

ハーブは光に包まれた。その光は途中で弾け、中から出てきたのは――姿かたち変わらぬままのハーブだった。

「……え、何で！？ どうして進化出来ないの！？」

ハーブは進化が失敗したという格好悪さと進化出来ないというコンプレックスから少し焦っていた。

『汝は進化できない』

声が低い声で、物騒な一単語を口にした

『空間の歪みの影響で。汝の後に居る者もまた然りだ』

05話 試験合格。そして・・・（後書き）

シアン

「よく考えれば、容姿も分からないのに“口にする”なんて表現は拙いんじゃない？」

私もそう思ったけど他にしっくりくる表現が無かったんでそれにした。

シアン

「ようするに文章及び語彙力皆無ということですね」

黙っとな（汗）

06話 Good - Bye！（前書き）

ようやく完成した♪

シアン

「遅いですよ。最近なんかありました？」

高校の勉強がハード化してきたぜ♪

ハーブ

「バカの作者には耐えがたい苦痛ね」

君には言われたくない（きつぱり） それと活報でちよつと言つたことなのですが、この更新が終わった後一週間半程消えようと思ひます。ご了承お願い致します。

シアン

「戻ってきたらシメてやる戻ってきたらシメてやる戻ってきたらシメてやる戻ってきたらシメてやる戻ってきたらシメてやる（ry）」

怖いっ！（涙） ま、まあ感想の返信くらいはしようと思ひますんで（汗）んでは最新話どうぞ

06話 Good - Bye !

「合格、おめでと〜う！」

シアンとハーブが帰ってきたときの、ギルドメンバーの第一声はこれだった。

だがシアンもハーブも妙に釈然とした態度を見せない。

「あ、ああ。有難う御座います」

「何だか大したことをしてない気がするけど」
そう生返事になる。

無理も無い。光の泉で、物騒極まりないことを言われたのだ。

『汝は、時空の歪みにより、進化できない』

光の泉にて、ハーブはいきなりそう言われた。

「え、ええ！？ 何、時空の歪みって！？」

声は、ハーブの間に答えずに説明を続けた。

『汝の存在が空間に影響をもたらしている。それ故汝は進化出来ない。汝の後の者もまた然りだ』

泉の言葉はシアンを指していた。急に話を振られ、シアンはすこし戸惑う。

『ここは光の泉。進化したい者はまた来るが良い』

そう言って声は消えた。気が付くと、泉に差していた光も無くなっている。

「じ……時空の歪みってなんだろう……」

ハーブが心細げに呟く。シアンは宝箱を拾い上げた。因みに中身はセカイイチである。帰りながら見た時は、親方様らしいな、とシアンは感嘆もした。

「ちよつと……心配だな……」

シアンの表情は重苦しい。前に時によって消滅すらしたので、

時にニュアンスの似た時空がまた面倒事が起こると踏んでいるのだ。
「まあ、大変なことが起こっても、うるたえずに日常を生きていく
それだけだ」

強がりのようにそう言うと、元来た道を引き返し始めた。

シアン達の回想はそこで途切れ、気が付けばペラップが二人の肩
を上機嫌な様子で叩いていた

「そんなことないよ！　なんたって、御前達は悪の大魔王を倒した
んじゃないか！」

「何故それを知っているんです？　出会わずにそのまま宝を持ち帰
ったってこともあるじゃないですか」

シアンが言うとペラップが『うつ』と声を詰まらせる。

「それに」

シアンはキマワリの頬を指さした。

「その痣はどうしました？　実は光の泉で悪の大魔王の子分とか名
乗ってるキマワリの頬を殴ったんですね」

「キャ！？　べ、べべ別に、これは探検中に敵にやられただけです
わ！　子分とか九卿とか、ワタクシ全く存じませんわ！」

シアンが問い詰めるとキマワリは頬を抑えて慌てふためきながら
弁解した。だが、自分が致命的な一単語を言ったことに気付かない
「……キマワリ、どうして九卿なんて言葉を知ってるの？」

「というかキマワリさんだけじゃなくて皆どこかしらに怪我を追っ
てるみたいなんですけど」

シアンとハーブが訝しむのを、ペラップが

「とととにかくっ！　お前達はこれでギルドを卒業だ。これから
はギルドの厳しい仕来たりに縛られず、探検隊の活動ができるんだ
よ」

と遮った。途端にハーブが顔を輝かせた。

「ホント！？　じゃあ依頼の報酬も十割全部貰えるの！？」

プクリンギルドの仕来たりとして、弟子は報酬の僅か一割しか貰えない。残りは全て親方であるプクリンの収入としてギルドの運営にあてられる。ギルドの仕来たりに縛られないというのはそれすらも無い、ということだ。シアンもハーブもそれは嬉しかった。収入が今までの十倍になる、ということだから――

「残念だが、報酬の件は従来そのままとさせてもらう」

そこに割って入ったペラップの言葉。

「はっ!？」

「ええっ!？」

その理不尽な扱いに、二人は叫び声をあげた。続いてあげられることが想定される文句を抑えるかの如く、ペラップは翼を前に突き出して二人を抑制すると、彼の頭程もある大きな袋を置いた。相当の数のコインが入っているのだろっ、ジャラ、という音が重い。

「親方様あつてこそそのチーム：ブライトだからな。まあその代わりといつてはなんだが、探検隊経営の為に寄付金を渡す」

シアンは目を見開き、紐を緩め袋を開いて中を確認する。一瞬間
まり、顔をあげると素っ頓狂な声をあげる。

「い、10000ポケ!？」

その額はチーム：ブライトの所持金の約八割である。

「そ、そんな大金、貰っていいの!？」

ハーブも驚いて慌てて訊く。

「勿論、全然オッケー」寧ろその為に用意したんだし」

「あ、有難う御座います……っ」

シアンは袋を持ち上げようとしたが、できなかった。重さが重さだ。あまり力が強くないリオルという種族で、しかも普通のリオルよりも華奢な体躯である。持ち上げるのは諦め、プクリンの話を聞くことにした。見れば既に卒業式の雰囲気。祝福のような儼かな雰囲気
困気が漂っている。

「おめでとう、ブライト。君達はギルドをめでたく卒業したんだよ。これから辛いことがあると思うけど、頑張っ
てね」

「ギルドを卒業できるなんて凄いでゲス！ これからも頑張るでゲスよ！」

「お二人とも、力を合わせて幸せになつて欲しいですわー！」

「おめえさん達が卒業しちまうのは寂しいけどよオ。まアたまには道具のトレードにも来てくれよなア。グヘヘ」

優しく、力強くかけられる、激励の言葉。プクリンだけでなく、ギルドの皆も激励の言葉や、祝詞を送ってくれた。住み慣れたギルドを後にするというのに寂しくはなかったのは、その言葉があったからであろつ。

「皆さん……有難う御座います」

「有難う。私達これから頑張るよ！」

シアンとハーブは仲間達に頭を下げ、仲間、という言葉の大切さを噛みしめるのであつた。

シアンとハーブはこれから何処に住むか話しあつていた。卒業したのでギルドではもう寝泊まりできない。色々と考えた挙句、結局サメハダ岩で寝泊まりすることにした。

雨風は防げないし、天然の洞窟なのでセキュリティシステムすらも無い。

「仕方ないけど、今日からここで寝泊まりしようか」

「寧ろ僕達の探検隊活動が終わるまでここに厄介になると思つけどね」

シアンが苦笑い気味に嫌味を言つた。数少ないサメハダ岩のメリツトは、広々として、大人数を収容できることだろうか。尤も、シアンは隊員を集めるつもりはさらさらない。

「せっかく卒業したんだ。さつさと探検隊活動を始めよう」

シアンの声は素っ気ない。だが、卒業できたことが嬉しくてたまらないのは感じ取れた。

06話 Good・Bye！（後書き）

シアン

「僕達卒業したんだね」

ハーブ

「実感湧かないわ……」

ダメじゃないか。君達は一流の探検隊として羽ばたいていけないぞ。

シアン

「そういう作者もこの前中学校卒業しましたよね」

ハーブ

「ちゃんとした高校生活おくれるの？」

うっ……ん、ま、まあ……（汗）

シアン

「アホ（汗）」

07話 際立つ氷塊（前書き）

はぁ……疲れた。

シアン

「なんか大変ですね」

とりあえず書くところまで書いてみたよ

07話 際立つ氷塊

「……とりあえず、この依頼を選んでみようか」

シアンは伸びをしながら一枚の依頼書を掴み、ハーブに手渡す。

「う……」

ハーブが見たのはお尋ね者の依頼。しかも今までで最高位のレベルのお尋ね者だった

「シ、シアン。違うの選ぼうよ」

ハーブは青ざめた顔で依頼書突き返す。だが、シアンは首を振った。

「逃げるつもりかい？ 神と呼ばれたポケモンを倒し、あまつさえ名門ギルドを卒業した僕達が」

そう彼が言くとハーブはグツと声を詰まらせた。

「……嫌なら辞めようか」

シアンの顔に一瞬恐怖が走る。彼も少し怖いのだろうか。だが、強気な態度をとった以上は退けない。ハーブとしても、嘲った相手を見返すのに絶好のチャンスだ。

「良いわよ。場所は……“風の霊峰”ね」

チーム“ブライト”の二人は依頼場所の風の霊峰へと向かった。つた。

そこは、強い風と神々しい風景がマッチしていた。まさに“風の霊峰”と呼ばれるに相応しい雰囲気であった。

「今回は、ここに居座っているオニゴーリを捕まえてくればいいのよね」

ハーブが依頼内容をボソリと呟く。それに対してシアンは交戦的な笑みを浮かべる。

「相手は氷タイプだ。殺されないように注意しなよ」

ハープはムツとしたが、影ながら彼女自身のことを心配しているのがみてとれたので黙っておくことにした。

「行こうか」

シアンがそう言いながら歩きだす。チーム“ブライト”の初めての独立探検隊としての活動が始まった。

開始五分。シアンは即座に選ぶべき依頼を間違えたと悟った。

「っ、シャドークロー！」

「マジカルリーフッ！」

二人の技がピジョットに炸裂する。だが、マジカルリーフで止めを刺しきれなかったのか、ピジョットはまた起き上ってきた。

それもその筈、ピジョットは飛行タイプを持つ。草タイプ技のマジカルリーフはピジョットにはあまり通らない。

「失敗したな……」

彼が悟った失策は、相性の問題だった。風の霊峰は飛行タイプのポケモンが多く生息している。格闘、草タイプで構成されているチーム“ブライト”にとっては苦しいダンジョンだった。

それでも、彼等は進んでいく。

ダークネビュラ

「暗黒星雲！」

「原始の力！」

紫色の閃光が襲って来たフワライドを貫いた。ハープが原始の力を当て、フワライドは倒される。

「依頼書によると、オニゴーリはこの辺なんだけど……」

シアンが依頼書を取り出し、周りの風景と依頼書とを交互に見た。「飛行タイプばかりの場所に氷タイプのオニゴーリがいたら目立つわよね……」

ハープがぼやいた。だが、シアンは

「それはない」

と、キッパリ否定した。勿論、根拠があつてのことである。

「何で？」

「オニゴーリも地面から浮いているだろう。かえって見過ごす可能性の方が高いと思う」

シアンがそう言うのと、ハーブは『成る程』と言いたげな顔を見せた。気が付けば、頭脳戦はほぼ彼に任せきっているハーブである。

「でも……どうしよう……」

「探し回るしかないだろうさ」

シアンは少し苦笑いを浮かべた。

しかし、オニゴーリを探しだすのにそこまで苦労は要らなかった。貴方ですね。お尋ね者、オニゴーリ」探していた相手は岩肌が黒い場所にいた。オニゴーリという種族は氷により、白色をしているので黒い所にいると流石に目立つだろう。

「お、御前ら、探検隊か」

オニゴーリが鋭い眼光で二人を睨む。

「そうよ。悪いけど大人しくしてもらおうわ」

今度はハーブが前に出て、ニツと好戦的な笑みを浮かべる。

（……まずいな……とりあえず、相性の良いチコリータの小娘からぶっ殺すか）

オニゴーリは逃げようとしているフリをしながら、勝算を見繕っていた。

（逃げる気か？ いや、それにしても身が退いていない……逃げようとしているフリをしているな）

だが、シアンの方が一枚上手であった。

それに対し、ハーブはオニゴーリがなんらかの攻撃を仕掛けてくると自身に予告していた。奇しくも、その計算は当たっていた。

「冷凍ビーム！」

オニゴーリは、ハーブに焦点を当て、技を放つ。だが、その前にハーブが動いていた。

足に力を籠め、大きく跳躍すると同時に蔓の鞭で地面を叩く。

「押し掛かり！」

「ぐあっ！」

オニゴーリはいきなりの衝撃に断末魔をあげる。ハーブが飛びのいた。

「何？」

オニゴーリは違和感を覚えた。このまま自分を拘束しておくかと思ったら、すぐに飛びのく。このチコリータの少女の為すことが理解できない。そう思った瞬間、

「気合い珠あつ！」

橙色の珠が飛んできた。ハーブが飛びのいたのは、これによる被弾を防ぐためだったのだ。

後にもっと大きな一撃が飛んでくる。だが、時すでに遅し。オニゴーリは苦手技を喰らって気絶していた。

お尋ね者のオニゴーリをジバコイル保安官に引き渡し、賞金を受け取った後、ハーブは先にサメハダ岩に帰っていった。

一方、シアンは暫くトレジャータウンで買い物をしていた。

「……あれ？」

シアンは首をかしげた。

「何だかいつもより人通りが少ないな……」

帰りにパッチールのカフェを訪れてみたところ、こんなものを見た。

『パッチールのカフェにて大ニュース！ 詳しくは当店へお越し下さい』

「……なるほどな」

トレジャータウンのポケモンがやけに少なかったのはカフェに来ていたからか、とシアンは判断した。

07話 際立つ氷塊（後書き）

シアン

「いや、なんか特に最後がグダグダ（汗）」

とりあえず疲れた……。

シアン

「いつまで言ってるのだろう……」

08話 世界一の高山（前書き）

ふふふ、空ダンをプレイしてる人は分かりますよ。

シアン

「最高峰の頂上へ、ですか」

イエス。今回私が一番書きたかった話の一つです。

シアン

「そうですか。んじゃまあどうぞ」

08話 世界一の高山

パッチールのカフェは、いつも以上に賑わっていた。重大情報発表というのは、トレジャータウンの皆の興味を惹いているようで、いつもは見えないような者さえいた。

「何があるんですか？」

シアンはカフェに入りざま、近くにいたチーム“かまいたち”の隊員、サンドパンに呟いた。

「さあ？ 重大情報らしいぜ」

サンドパンも特段何かを聞かされているというわけではないらしい。首を横に振った。

因みに、かまいたちの他にチーム“はっぴーず”と“マックロー”が来ていた。

「えゝ皆さんお集まり頂き有難う御座いますう」

カフェの中が時間をかけ鎮まっていく。やがて皆話さなくなったのを見ると、パッチールは話を始めた。

「今回、プロジェクトPにて新発見がありました！」

プロジェクトPというのはパッチールが遂行中の計画である。探検隊が不要な道具を店員のソーナノ達に渡し、ソーナノ達はその道具を未開拓地の開拓の資金としていく。そして開拓によって発見された宝が探検隊達の元に還ってくる、というシステムのものだ。

そのプランで一大発見があったらしい。シアンを除く全員が好奇心の目を寄せている。シアンはあまり内心の興味を表に出すことはない。

「皆さんは空の頂きというダンジョンを御存知でしょうか？」

言った瞬間、聴衆が表情に見てとれる疑問を浮かべる。その中で、カフェの常連の一人であるバリヤードが手を挙げた。

「あ、それ知ってる。東の方角にある世界で一番高い山のことだね？」

「はい、バリヤードさん良くご存じです。その通りです。お話にあった通り、空の頂きというのはダンジョンの一つで、同時に世界一の高さを誇っております」

「……」

「かつてはその登山道もなく、秘密に覆われた地でしたが、今回その登山道の開拓に成功しました」

シアンは段々聞く気を失ってきた。恐らくこの話の流れからすると、次に展開されるのは“皆で登山に行こう！”というものだろう。彼としては、重い荷物を背負ってゴツゴツした道を行くより見返りも望めるいつもの依頼をこなすほうが良いのだ。

だが、彼の望みに反して周囲からは歓声や拍手が沸き起こり、登山ムードとなっている。

「それだけでなく、山の麓に小さな隠れ里まで発見しました」

「隠れ里？」

「はい。なんでもシェイミというとても可愛らしいポケモンが住んでいるそうです」

パッチールのこの発言は更に周囲の興味を惹いた。もうこうなるとシアンとしてはカフェを出て、何も無かったことにするしかない。「さあ、皆さん！ 新発見盛り沢山の登山へ！ 出発しましょうー！」

幸い、この手の話に興味を示しそうなハープはいない。今カフェから逃げ出して、サメハダ岩まで逃げ帰れば――

「シアン、どうしたの？ 面白そうな話があつて最中に出ようとするなんて」

聞き慣れた高い声が聞こえてきた。

「……………」

シアンの顎から冷や汗が滴り落ちる。数秒間、黙りこくった後、苦笑いを含んだ声で呟く。

「……い、いつからそこに？」

「始めから」

「何でいるの？ サメハダ岩に帰ってた筈だよね？」

「シアンが遅いから迎えにきたのよ」

「……登山、行きたい？」

「今からでも」

パッチールが『パンフレットをお配りします』と言っているのが遙か遠くに聞こえる。おそらく、パッチールが配っている紙キレの一枚を彼女は持っているだろう。

「……仕方、無いな……」

シアンは明日の分の収入を生贄に捧げる覚悟をした。

当然のこと、今日中に空の頂きに向かおうとする者は一人とていなかった。時刻は午後六時である。今からいけば電車を使ったとしても真夜中だろう。

「出発は明日の六時とするか……」

「早起きしないといけないわね」

「僕はいつも同じくらいに起きているんだけど」

シアンはすっぱりと切り返すと、不思議な地図を広げ、パッチールに教えてもらった空の頂きの正確な位置を確認した。

「トレジャータウンから、東北東の位置……地図上では約10cmだから実際の距離は……50kmか。電車を使った方が良いかね」

シアンは、傍らで明日の準備をしているハーブをチラリと見た。視線が合いそうになって、慌てて地図に目を戻す。すると、パッチールが配っていたパンフレットが視界に入ってきた。拾い上げて、内容を確認する。

『空の頂き…全十合。出現ポケモンは、フワライド、ピジョット。さらにフシギソウ、ウツドンなどの飛行タイプや草タイプが多い。頂上には秘宝が眠っているとのこと！？』

“秘宝”という単語を目にした瞬間、シアンの顔色が変わった。

「秘宝……ね」

シアンは少し目を細めて、サメハダ岩から見える、夜の海の景色

を見つめる。隣では、準備を終えたらしいハーブがすやすやと寝息をたてていた。

08話 世界一の高山（後書き）

シアン

「だるい……行きたくない……作者ああ」

怖いよ（汗）

シアン

「何であの場にハーブを連れて来たんですか!？」

ハーブ

「私達が行かなかったら話が始まらないと思うけど」

09話 シエイミ達（前書き）

今回、シアンが中心となります。ハーブの影は、前作の遠征帰還後のチップ並みに薄くなりますwww

09話 シエイミ達

「ここがシェイミの里のようだね」

バクフーン鉄道の駅を降りて十五分ほど歩いたところにシェイミの里はあった。長閑な草原が広がり、気持ちを落ち着かせてくれる。「ほのぼのした所ね」

ハーブが胸いっぱい息を吸い込む。そこへ、チップが走り寄ってきた。

「あ、シアンさん、ハーブさん。来られたんですね」

チップは、大人びたシアンと違い、どこか子供っぽさを感じさせる。あるポケモン（二十五歳）がチップに恋心を抱き、“シヨ。コン”と呼ばれたことさえある。（本人は意識していない）

「こつちですよ」

チップは朗らかな表情でシアン達を案内していった。その際、シアンは一人のポケモンを目が合った。

「む、シアンかの？」

老翁のような言葉使いとは裏腹に、澄みきった高い声。その声の主は一人のキルリアであった。

「あれ、由祈？ 来てたんだね」

キルリアの名前は相原由祈^{あいはら ゆき}。整った顔立ちで、トレジャータウンの中で人気があるが、彼女の心の中には既に一人のライチュウの少年が宿っている。だが、そのライチュウの少年は一年ほど前から行方不明である。

「面白そうじゃったからの。登山などしょっちゅう参加するわけでもあるまいし。そうそう、ゼアンも来ておったぞ」

由祈は笑顔でペラペラ話すと、すぐに登山道に入っていた。チップも、ブライトの二人から離れ、別の探検家と談笑を始めた。

「ゼアンも来てるんだ……って、よく見れば結構来てるね」

ハーブの言うとおり、そこには五十弱ほどのポケモン達がいた。

そして、その半分ほどは緑色の小さな四足歩行のポケモン達だった。小さな顔や、顔の横に咲いている花が可愛い。

そう思いながら辺りを見渡していると、不意に一人のポケモンと目が合った。どう見ても、ここの住人ではない。黒い体に刀を思わせる鍵爪。ニユーラ、というポケモンである。ニユーラはシアンを見るなり、高圧的な姿勢を取り、顔に嘲笑を張り付けた。

「へっ、宝を採るのはこの俺だ。御前らみたいな低能の探検隊は黙って雑用でもしている」

「……」

シアンは、表情すら変えなかった。だが、ニユーラが最後の『ろ』を言い終えた瞬間に彼の額に太い青筋が浮いた。

「……君、挑発をしているつもりかな？」

「へっ、聞くまでもないだろうが。ってか、聞かないと分からないのかよ」

「君の言動が幼稚過ぎて、阿呆の戯言にしか聞こえないんだ」

「なっ……」

ニユーラが咄嗟に顔を真っ赤にし、宝は渡さないからな、とだけ言っただけその場を立ち去った。

因みに、ハーブは探検隊マックローと談笑していたためこのことは知らない。

「あの一、探検隊の方達ですか？」

シアン達の後から、声が聞こえた。振り返ると、そこにはそこかしこにいる緑色のポケモンと同じポケモンが落ち着いた物腰を構えていた。

「そうだけど……君が、伝説のポケモンと言われるシェイミ？」

シアンは訝しげに訊ねた。伝説、というからにはディアルガやグラードンのようなデカブツを想像していた。だが、セレビィやユクシーなどの例を思い出し、訝しげな表情はすぐに消した。

「はい。私はシェイミです」

シェイミはそう微笑んだ後、ここにいるのは皆シェイミなんですけどね、と付け加えた。

「シェイミって……。仲間と区別して呼び合っていたりしないの？」
ハーブがうるたえる。シェイミは苦笑い気味にこう答えた。

「勿論、個人の名前はありますよ。私の名前はラン。ラン＝ミラーノイズです」

ランと名乗ったシェイミはペコリ、と頭を下げた。

「良い名前だね」

シアンは優しげに唇の端を持ち上げる。そして一步前に進み出て、
「僕はシアン。探検隊“ブライト”の一員だ。よろしくね」

と、名乗った。後に戻る。

「……………」

シアンは視線を横に流して、黙ったままにいるハーブを肘で突いた。

「えっ、あ、ああえーと、私はハーブ。私もチーム“ブライト”の一員よ。よろしくね」

ハーブの自己紹介はシアンに比べて幾分ぎこちない。だが、ランがそれを言及することはなかった。

「よろしく願います。……しかし、驚きました。いきなりこんなに沢山のポケモンがやってくるんですから」

シアンは、ふと心の中に疑問を抱いた。世界一高い山であるというのに、何故ポケモンが来なかったのだろうか？ 知名度も、昨日の時点ではバリヤード一人が知っていたという程度。すこし違和感を感じる。

「いきなり……。今までは来なかったのか？」

「はい。昔は登山の為にここに来たポケモン達の案内役をしていたのですが……。地震により、ここまで来る為の道が塞がれてしまったんです」

ランが目を伏せ、悲しげに語るのを聞いてシアンは納得がいった。

PPOは何をやっていたのか、と疑問が首をもたげはしたが、気にしないことにした。

その時、シアンの世界にニューラの姿が映った。ガルラ像での準備を終え、今すぐにでも登山に突入できる状態である。だが、一向に突入しようとしなない。

（……何のつもりだ）

シアンは苛立ちから、ニューラを睨めつけた。その瞬間、こちらに向かって嘲笑を浮かべたニューラの顔がフラッシュバックし、シアンの悔しさは絶頂に達した。

（……落ち着け落ち着け。まずは、正確な情報を手に入れよう……）
シアンは、ハーブの楽しげに話しているランに訊いた。

「ねえ、この山には秘宝が眠っている、と聞いたんだ。別に、君達が困るのであれば教えてくれなくてもいいけど……最低ラインまでは知りたい。教えてくれないか？」

すると、ランは意味あり気な含み笑いを見せた。

「ふふ、それはどうでしょう。この山を登る主役は貴方達。私達はそれを支える衝立ついたてでしかありません」

「なら、本当のことはこの山に登れば分かる、と言ったね？」

「面白そう。シアン、私達も登ろうよ」

ハーブが邪気の無い瞳で見上げてくる。ここに来た理由は元々この山に登ることではなかったのだろうか。

「そうするか……」

シアンが憂いを帯びたような顔で頷く。すると、ランが嬉しそうな顔で進み出た。

「では、私が貴方がたの案内役をかってでてよろしいでしょうか？」
別に、異論の理由などは無い。

「勿論よ！ よろしくね、ラン」

「はい。こちらこそよろしく願います」

09話 シエイミ達（後書き）

シアン

「ニューラむかつく……」

たまにはいるさ。そういう奴も

ハーブ

「そういや、作者の学校は来週文化祭なんだよね」

シアン

「そうだった。確か一週間後のリアルタイムですよね？」

その時には爆睡中だろうね

10話 恋し始めの案内役（前書き）

すみません、一週間以上も間を開けてしまって……；

今回、ggdggdです。更に読者様が納得できない箇所があるかと思
います。書いていたらこうなってしまいました；

10話 恋し始めの案内役

シェイミ達はかつて空の頂に訪れた旅人に案内役をしていた。

旅人達は、彼らの案内のお陰で山の中でも遭難することもなく無事にダンジョンの探索を終え、シェイミの里は旅人によって潤った。だが、そんな日々が無常に続くはずもなかった。

ある年、大地震が里を襲った。地震は大量の犠牲をだし、里へ続く道路は閉ざされ、空の頂を訪れる者はいなくなった。——そう、まことしやかに伝えられている。

しかし、シアン、ハーブの二人が山を登っていることから分かるように、近頃里への道が新たに開拓された。シェイミの里に、数百年の歳月を超えて光が差し込んだのだ。

「ねえラン。山頂はまだ？」

「ハーブさん、まだ一合目ですよ」

登山開始五分後、既にハーブが音をあげはじめ、ランにたしなめられていた。

「はあ……だから登山なんかいやだって言ったのに……」

柔らかな表情のランとは逆に、シアンは呆れた顔だ。これでハーブのことを想っているというのだから凄い。

「はい」

ハーブは嫌そうな顔を一つもせずに戻した。

「一合目までもうすぐだよね……」

「はい。ただそこまで強力な野生のポケモンに遭遇する確率が高いので注意して下さい」

ランの忠告に、シアンは一抹の不安さえ見せない。かなり自信がある表情だ。

——カッコいい……

その表情は、ランに切ないまでの羨望と憧れを抱かせた。

ランは、シアンの顔を見つめながら、同時に胸が強く痛く疼くのを感じていた。

「そうか。強いつて言うところのくらいかな？」

シアンの問いに答えたのはランではなくハーブだった。

「実際に訊くより体験してみたほうがいいんじゃないかしら？」

彼等の前にいたのは、ベイリーフ、ラッタ、オニドリル、ビードルだった。

「あ、き、気をつけて——」

ランがオロオロしながらシアンとハーブに注意を促す。だが、二人はランを庇うように立つと戦闘の構えをとった。

「だ、大丈夫なですか！？ ここのポケモンは一筋縄ではいかないのですよ！？」

「大丈夫よ。一筋縄でいかないのは私達も同じなんだから」

ハーブの声は、自信に満ち溢れていて力強かった。

「ラン、君も気をつけていて」

シアンは一言、ボソリと呟くと、銀の針を投げつける。その針は、シアンのシャドークロウの力を受け、“ダークネビュラ暗黒星雲”となった。それだけでなく——

「——回った！？」

シアンの耳に、ハーブのものとも、ランのものともとれない声が響く。暗黒星雲を取り巻く黒いオーラが、形を変え、銀の針の周囲を回転し始めた。

ダークネビュラ「暗黒星雲・輪廻——！」
スパイラル

オーラは、銀の針を先行し、ベイリーフに突き刺さった。攻撃を受けたベイリーフは動きを止められた。そこに、銀の針が刺さる。
「毒づき！」

痛みで動けないベイリーフに、シアンの技は効果が絶大だった。ベイリーフはすぐに倒された。

「原始の力！」

ハーブが目の前光景に目を奪われているオニドリルに岩タイプの技を打ち込む。倒れるまでには至らなかったが、気にしない。蔓の鞭で地面を一打ちして飛び上がると、ビーダルに押し掛かりを加えた。ビーダルはハーブを弾き飛ばそうともがいた。ハーブはエナジーボールをビーダルに放つ。

「グアアッ！」

小規模の爆発が起こり、ビーダルは動かなくなる。ハーブは空中で向きを変えると、自分を襲おうとしていたオニドリルに原始の力をもう一回放った。

「やあぁっ！！」

原始の力により飛ばされたオニドリルはラッタにぶつかった。

「瓦割り！」

シアンはここぞとばかりに、よろめいたラッタに全力の一撃を加えた。

———すごい！！

ランは、彼等の戦闘を見て感嘆のため息を吐いた。同時に一つの考えも纏めていた。

———あの方達なら……姉さんを助けられるかも……

「お、お疲れ様です、シアンさん、ハーブさん」

ランは、戦闘を終えたシアン達に労いの言葉をかける。そして、二人の眼を交互に見つめる。

「……ん？」

「な、何？」

二人共あまり見つめられることに慣れていないのか、戸惑いの表情を見せる。

「あの……お強いんですね」

「ああ、いや、今のは運が良かっただけさ。普段はもっと修行が必要なくらいだよ」

「いえ、運のよさだけであんな高度な戦いはできません」
「そうかしら……」

ランはの頭の中に一つの説がよぎった。

——そう言えば……この方達の探検隊名は“ブライト”だったよね……一年くらい前に世界を救ったとか、いつて騒がれた探検隊の名前も……たしか“ブライト”！！それに、リオルとチコリータのコンビ！！間違いない！！

「あ、あのっ！！」

ランは身を乗り出して叫んだ。

「何かな？」

「実は、私には姉がいるんです。名前はハインスです」

「い、いきなり何かしら……」

ランの言うことを理解できず、戸惑うハープ。だが、シアンはいつも通り冷静だった。

「そのハインスさんを、助けて欲しいのかな？」

瞬間、ランの顔に光が満ちる。

「別に構わないよ。僕達はこれでも探検隊の端くれなんだ。君の姉さんは、絶対に助けてみせる。な、ハープ？」

「えっ、え！？ う、うん！！」

急に話を振られたハープの声は、若干浮ついていた。

「へえ、数日前から行方不明ね……」

シアンとハープは、ランからハインスの、出来るだけ多くの情報を聞きだした。

それによると、ハインスはランと同じ家に住んでいた。

「でも、朝起きたら姉の姿は無くて……里の皆に訊いても、誰も姉を見てないって言うし……」

シアンは困惑した。これは、紛うこと無き神隠し。だとしたら、ハインスの手がかりはゼロ、ということになる。

「本当？ ラン、それ以外に手がかりは？」

ハーブがランを急きたてるように言う。それに対し、ランは俯いて押し黙っているだけだ。シアンは少し勘案した後、訊ねた。

「ラン、ハynesさんの特徴を教えてもらえないかな？ 顔立ちとか……性格とか」

ランは、それならとばかりに話し出す。

「えっと……言うまでも無いんですけど、種族はシェイミです。顔は明るくはつきりした感じで、性格はボーイッシュな感じでしたね……すみません」

「いや、良いんだよ。さっき言っただろう。僕達も探検隊の端くれだって」

ランは彼の言葉を聞いて罪悪の念に駆られる。

「そうじゃないんです……元々私達はこの山に登る方々をサポートする役目の種族です。なのに……そのサポートする方々の役にも立たないばかりか、あまつさえ依頼を申しつけてしまうなんて……」

シアンとハーブは、暫し黙りこむ。やがてシアンは口を開き、ランに励ましの言葉をかけた。御世辞のような薄っぺらいものでなく、あくまでも自分の本音を。

「いや、良いんだ。僕も今日は登山なんかじゃなく、いつもどおりに救助活動を行ったかったんだ」

「え、でもシアン、私は——ムグ!？」

余計なことを言いかけたハーブの口を塞いで続ける。

「だから、構わないよ。依頼活動の一つくらい頼まれても文句は言わないさ。寧ろ大歓迎だ」

10話 恋し始めの案内役（後書き）

補足

元々、シェイミに性別という概念は存在しないので、ハynesのこ
とを姉、と呼ぶのはおかしいじゃないか、と仰る方もいるかと思
います。

しかし、今回のハynesイベントに関して、やはり兄弟姉妹がある
ということ、中性であると困るのです。ですので、今回敢えてシ
エイミに性別の概念を持たせました。

今回、ランがシアンに恋情に近いものを抱いたのもそういう設定の
上です。ご了承ください

11話 引き裂かれた者達（前書き）

シアン

「やっと更新だよ……」

いやゝ遅れてごめんごめん。

シアン

「謝る気ゼロですよね」

うん↑ それから、エメラルドのツイートで言っていたのですが、
本日よりローテーション方式での執筆を始めます。詳しくはツイ
トの方をご覧ください。

シアン

「それから今日は作者の誕生日ですよね……厄日だ」

オイコラ。最後失礼なこと言っただろ

11話 引き裂かれた者達

「成る程、ボーイツシュでさっぱりした、明るい性格、ね」

シアンはどこからか手帳を取り出すと、ランから聞きだした、有りつ丈のハynesの特徴をそこに書きだした。

「ほ、ホントすみません」

ランは申し訳無さから、顔を赤くして俯いてしまう。

「はは、さっきも言っただろ。構わないで」

シアンが気さくに微笑むと、その顔は一層赤くなった。シアンは、それがランの照れによるものであることに気付かなかった。

「……」

ついでに言うと、ハーブが折角の登山を邪魔されたことに怒って拗ねた表情をしていることにも気付いていなかった。

「……シアンさん、ハーブさん、気をつけて下さい」

一合目を過ぎて、二合目に差しかった。少し登ったところで、ランがただでさえ低い身を更に低くして二人に警告する。

「ど、どうしたの？ ラン」

ハーブは、ここがランにならって身を低くする場であると気付かずに、キョロキョロと辺りを見渡す。

「ハーブ、そこは伏せるべきだろう？」

シアンが苦笑い気味に嫌味を言う。瞬間、ハーブが飛びあがった。
「キャア！ つ、蔓の鞭！」

彼女が悲鳴と共に叩いたのは一匹のピジョットだった。

「み、見つかってしまいましたか……」

すでに無駄だと踏んだのか、ランが身を起こす。シアンもそれに倣う。

「しょうがないな……気合い珠！」

シアンが両掌を向かい合わせると、そこに橙色のエネルギー弾が現れた。それを放つ。だが、ピジョットは風起こしで気合い珠を跳ね返した。

「し、しまっ——」

気合い珠は三人の足元で爆発を起こす。一番足もとの悪い所に立っていたシアンが、宙に放りだされた。

「わあああああ……」

彼は、そのまま崖の下に落ちていく。

「シアン！」

ハーブが蔓の鞭を伸ばしたが、届かない。シアンの叫びは、徐々に小さくなっていき、やがて消えた。

「……」

「あ、あの……大丈夫ですか？」

空の頂きの岩道で、一人のシェイミがリオルに話しかけている。

そのリオルの名はシアン。

「お、起きて下さい」

シェイミはシアンの体をゆさゆさと揺らす。すると、今まで死んだように動かなかったシアンから反応がでた。

「う、うーん……」

呟くような呻き声。そして、目を開けると一瞬で跳ね起きた。

「ひゃっ!？」

「ぼ、僕は何を……そっか、気合い珠に当たって崖から落ちたんだっけ……」

「崖から落ちたんですか!？」

シェイミはまさかの話に、語調を強める。シアンは、ようやくそのシェイミに気付いたらしく、その方を向いた。

「僕を起こしてくれたのは、君？」

「あ、はい」

「そっか……」

シアンは少し困ったような表情を見せると、シェイミの方を向いた。

「ここが何処分かるかな？」

シアンが、この山の頂上まで登りたいという旨を付け加えると、シェイミは急に背中を向いた。

「えと……すみません。口ではうまく説明できませんので、私に……」

着いてきて下さい、と言いたかったのだろうが、最後の方はモゴモゴしていて聞き取れなかった。相当シャイなようだ。

「有難う。名前を聞いてもいいかな」

「……イナ……です」

「アイナ？」

シェイミは違うように言ったのだが、シアンには、シェイミがアイナと言ったようにしか聞こえなかった。

「い、いえ。そうじゃなくて……」

「よろしくね、アイナ。僕はシアン」

アイナは弁解すらも出来ず、名前を間違って認識されたままシアンの案内役をする羽目になった。

（む、むう……里の皆とはうまくやっていたのに……）

アイナは口を尖らせて内心でボソボソと何やら言っていた。

（でも、このポケモンさん、どうも案内役とはぐれたっぽいよね？
だったら私がその子が見つかるまで案内役をしないと……）

アイナはそう思っ、何か話題が無いか、と思考を巡らせ始めた。
そして思いついた話題がコレ。

「あ……あの、シアン、さん……」

「ん、どうかした？ アイナ」

アイナは既に自分にかけられた誤解を解くのは不可能だと感じたのか、名前の間違いを正しはしなかった。

「空の贈り物、とか御存知……ですか？」

その問に対し、帰ってきたものは随分とぞんざいだった。
「知らないよ」

アイナのシアンに対する初見のイメージは優しい繊細な美少年、
という感じだったが、案外無愛想な性格なのだろう。

「……何？ このダンジョンの名物とかかな？」

「ええと……似て非なるものです。箱の形状をしているんですが、
拾った方が開けても空っぽなんです」

「それじゃ意味無いよね？」

シアンが呆れたような口調で相槌を打つ。アイナは少し尻込みな
がら続けた。

「でも、拾ったポケモンが善意を以って他のポケモンに贈ると、そ
こから何かが出てくるんだそうです」

アイナは「大事なものは、感謝の気持ちなんです」と付け加えた。

「……良い物だね」

シアンが嬉しげにボソリと呟いた。

そうこうしているうちに五合目に辿りついたようだ。

「あ、あれ？ なんか様子が変わだな……」

シアンが、五合目の様子を見るなり、違和感を口にする。アイナ
はつられて、シアンと同じ場所を見る。

普通なら、ここはガルーラの像やリフトなど、様々な施設がある
筈なのだがそれらが見当たらない。それだけでなく、遠くから喧騒
が聞こえる。

「あ……」

シアンはその喧騒の方向を見て、急に間の抜けた声をあげる。

「おう teme エ……^{ポケモン}人の縄張りに入っというて、御免の一言もなしかよ
お？」

五人程のポケモンが、一匹のポケモンに絡んでいた。
絡んでいる方は蔓のような腕に万力をも思わせる大きな黄緑色の

顎。マスキッパというポケモンだ。

絡まれている方は黒い中に所々混じる紅蓮の毛。そして、断頭台の刃のような鍵爪。既視感を覚える。というか、恨みで忘れきれない。

「ニユーラか……フン、あんな連中に囲まれて、いい気味だ」

その光景を見ながら呟くも、集団で纏まらなさと強くなれないマスキッパ達に挑発の念を送り続けたいシアンであった。

11話 引き裂かれた者達（後書き）

シアン

「なんか……グダグダで分かりにく……」

ごめん。最近休む暇なくてさあ。かなり集中力削がれた中で執筆してるから……

12話 身勝手な巡回者達（前書き）

今回、ハーブとランは全くと言って良いほど出ませんwww

ハ・ラ

「「え？」」

シアンとアイナを中心に考えてるから。

ハーブ

「ちよつと……」

ラン

「作者さんて、オムニバス形式よく使いますよね……」

まあ、ね……同時進行とか今の私の実力じゃ無理だから

12話 身勝手な巡回者達

「あいつら……」

シアンはマスキッパを卑怯だと思った。だが、戦闘を仕掛けたところでニユーラは逃げ出してしまっただろうし、アイナは正直役に立つかどうか分らない。

つまり、最悪一人で五人を相手にする必要があるのだ。しかも格段に有利とか力が強い、というアドバンテージもなく。

しかし、山頂へ続く道は彼等の後ろに控えている。やはりマスキッパ達はどうかする必要があるだろう。シアンがどうマスキッパを料理しようか考えていると、不意に後ろからあどけない声を浴びせられた。

「シアンさん？ どうしたんですか？」

「何やってんだオメーよ。間抜けみたいにつつ立ってるぜえ」

後ろを向くと、そこに立っていたのはチップとゼアン。そして、クチート、キノガッサ、ゴリキーの見知らぬ集まりだった。

「チップにゼアンさん……後ろの三人は？」

「え、探検隊、“フロンティア”の方々……ですよね……？」

シアンの間に、アイナがフロンティアの代わりにボソボソと答える。

「ふろんていあ？」

この場でそのチームを知らないのは、無論シアン一人のみである。チップとゼアンが立て続けに説明を加える。

「御前フロンティア知らねーのか？ あいつら、この山までの道を開拓して」

「何と言つても、その実力が凄いですよ。中堅のダンジョンにいるポケモン程度なら軽く」

「んで、パッチールに雇われてこの道開拓したんだと」

「あのちよっと、同時に喋られても困るから」

シアンが困り果てて二人を制止する。フロンティアの三人も、チップとゼアンのはっちゃけぶりに少し失笑している。

キノガツサがマスキップ達に目配せをした。

「で……五合目まで来てみりゃ、なんだコイツら？」

「あ、……あの方達は」

アイナが何か言いかけたが、ボソボソとしか喋らないので誰もそれに気付かず、止まろうとしない。

「ちよつとアンタ達！ 大勢で寄ってたかって、卑怯じゃないかい！？ 今度は私達が相手になるよっ」

キノガツサが威勢のよい美声を轟かす。マスキップとニユーラが後ろを向いた。

「あぁん？ 何だテメエら？」

「コイツが俺達の宝を盗ったんだよ。大勢だなんて関係ないじゃないか」

マスキップ達はそう言うなり、シアン達に突っかかってきた。

「うわわ……」

「殺されてえのか？ 柄の悪い奴等じゃねえか。ヒツヒツヒ」

チップが後退り、ゼアンが肉薄的に笑う。もつとも、ゼアンの「柄の悪い奴等」というのは彼自身にも当てはまるが。

「ちよ、や、やめ……」

場の状況を見たアイナがオロオロしながら割って入ろうとしたが、ボソボソとしか喋らないので、どちらも止まる気配を見せない。

「チャンス……！」

ニユーラは、マスキップの注目が自分から外れた瞬間、山頂の方へ逃げ出していた。シアンはそれを見ていたが、今は特段咎める気も無い。

「二分……」

「あ？ 何だ？」

彼がボソリと呟いたのを一人のマスキップが聴きとめる。シアンは冷ややかな目でこう告げた。

「二分あれば、それで十分。貴方達を泣かせられます」
ブチリ

マスキッパ達のこめかみから、鈍い断裂音が聞こえた。

「デメエ！ ぶっ殺す！」

マスキッパの一人が、大口を開けて襲いかかってきた。シアンはしゃがんでかわすと上に蹴りあげる。

「グボッ！」

彼の足に変な感覚が走った。

「ヒヤアッハッハッハアー！ 壊すぜ殺すぜぶっ飛ばすぜえーッ！
！！」

「10万ボルト！！」

ゼアンがマスキッパをタコ殴りにしながら奇声をあげている。
チップは電気技を放ったが、相性の関係からあまり効果はなかった。

拳で敵を殴り飛ばしたシアンが、気合い珠を打とうと手を振りかざした。その瞬間――

「や、止めて下さいっ！！」

突然、甲高い声がその行動を遮った。彼の心臓は、一打ち撥ねた。
「……」

シアンは苛立ちの感情を籠めた目で、先程の声の主のアイナを睨めつける。アイナはその視線にビビりまくって、縮こまっていた。その姿を見たマスキッパが声をあげる。「おおー、シェイミじゃねえか！ 久しぶりだなあ」

シアン、ゼアン、チップ、チームフロンティアの皆が目丸くする。咄嗟にシアンが話を振る。

「アイナ、知り合いか？」

アイナは、さっきのシアンの目がまだ瞼の裏にこびり付いているのか、彼を何処となく敬遠した様子で返事する。

「は、はい。この辺を縄張りに行っている方々です……根は良いんですが、ちよっと素行が悪くて……」

「お、おいおい。つれねえじゃん。俺たちやあの宝泥棒をとつちめようとしただけだぜ？」

アイナのあまりな言い方にマスキッパの一人がしょんぼりと肩を落として言う。シアン達からすれば、自業自得だ。

「はあ…… こんでも無い馬鹿ですね。シェイミに叱られて、終いにはその宝泥棒を逃がすなんて」

「そ、そんなこと言っただって…… ん？ 逃がす？」

目を丸くしたマスキッパにシアンは更に告げる。

「ニユーラのクソ野郎なら、さつきどさくさに紛れて逃げて行きましたよ」

「なっ！？」

マスキッパ達は、シアンの指した方向を見て、素っ頓狂な声をあげる。だが、時すでに遅し。

ニユーラの背中中は遥か彼方にあつた。

「あ、あの野郎オオオ！！」

マスキッパ達は悔しがって蔓のような腕で地面をぺしぺし叩く

「まあ…… 仕方ねえな」

やがて肩を落として立ち上がると、シアン達の方に向き直った。

「あー…… ゴメンな、お前ら。シェイミも」

シアンだけ、氷雪のような瞳で彼等を見つめていたが、他の皆はもう彼等を受け入れたらしい。

「いやいや、私達こそ勝手に攻撃仕掛けちゃって、悪かった。これからは気をつけるよ」

「ああ。頼むなー」

マスキッパ達はこう言い残して、その場から去った。

「さて…… 俺達も早く行かないとな」

5合目のど真ん中で、残された者達の一人のゴーリキーが呟く。

「そうだね。なら私達はもう行くよ。向こうで基地作っておくから」
クチートがそう言ってフロンティアの皆を従えて行った。

「俺達もさっさといくしかねえな」

「うん。ここにいても仕方ないしね」

ゼアンとチップも山頂に向かいだした。

「……あ、シ、シアンさん、私達も行きましょう」

アイナが先程のシアンの目を思い出しながらおずおずと言つ。すると彼は

「そうだな。よく考えればハーブ達も探さないと言つて歩き出した。」

12話 身勝手な巡回者達（後書き）

ただいま、とある小説にてエメラルドの一周年の記念のイベントの募集をしております。

その小説のURLを貼っておくので、是非おいで下さいますようお願いします。

<http://ncode.syosetu.com/n44444u/>

シアン

「宣伝かよ（汗）」

13話 忍びよる闇の象徴（前書き）

13話、書き上げました……眠い、寝よう。

13話 忍びよる闇の象徴

「アイナ、山頂まではどれくらい？」

五合目を登り始めてちよつと経つてから、シアンは彼の前を歩いているアイナに尋ねた。やはり、山の案内役とあつてか登山に関してはシアンより達者だった。

「そうですね……今半分を過ぎた頃ですから、シアンさんが登り始めてからの道のりがもう一回続くって考えられると良いです」

そう答えると、シアンは嫌そうに顔を歪めてみせた。だが、への字に曲がった口からは弱音の一言もでない。

「そうか……でも、その前にハーブ達と合流する必要があるな」

シアンは、山頂に着くまでには合流したいという思いを少し口にした。その声は、アイナの耳にしっかりと響いていた。

「あーもう、シアン何処に行ったの……!!」

ハーブとランはつい先ほど、シアンを探すのを諦め登山を再開していた。

「登っていればそのうちひょっこり出てくるかもしれませんよ？」

ランがおっとり口調で言うのを見て、ハーブの焦りもいくらか鎮まった。

「そうだと良いんだけど……」

だが、彼女はそのままムスツとした表情で黙り込んでしまった。

「……」

突然、ヴォキヤブラリーが欠如した雰囲気、ランは対処しきれず、とりあえず話題を探した。

「あ、あの……シアンさんとはいつあつたんですか？」

すると、ムスツとした表情は消え、口元には微笑みすら浮かべかけていた。

「えっと……2年前だったかな。私がまだ、とんでもない臆病者だった頃だよ」

「臆病者？」

ランはその言葉の信憑性を疑った。郷に来てからのハーブのイメージは、クールで聡明で、探検もバトルも何でもこなすしっかり者だと思っていた。でも、実際には違う。それどころか、頭は悪く、臆病で少しも戦うことが出来なかった。それは彼女自身の主観でもあり、他の者からハーブを見た時の印象であった。

「うん。シアンと会ってから、だいぶ改正はされたんじゃないかな、って思うけどね」

その言葉は、ランの胸を突いた。

シアンとハーブ。それは互いに惹き合い、求めあう存在なのだ。この時から、ランはシアンに抱く想いが邪恋であると思い始めていた。「でも、たまに思うの。彼がいると、どうしても自分に甘えが生じてしまうって。私は、一年前からまた一人で生き始めた。でも、一人で生きていると、どうしても二年前のあの頃に帰ってしまったたの」

ずっと、二人一緒にいたから、一人のとき、耐えられないほど悲しかった――。

ハーブの瞳は、そう物語っているように見えた。

「そう、だったんですね……」

ランはそう言ったきり、目を伏せてしまっていた。だが、ずっと瞳の角度をあげて言った。

「さ、五合目です。あと半分ですよ」

「まだ半分しか行ってないのね……」

この瞬間、ランとハーブのテンションは、空の頂きの頂上と麓よりも大きな差があった。

「あ、あれ？ 無い……」

先程、数匹の敵がシアンのところに襲いかかってきた。さつさと追
い払い、一旦一息ついてバッグの中を開けてみた。

「どうしました？」

急に呆けた声を出すシアンに、アイナが尋ねる。

「いや、さつき綺麗な箱を拾ったからさ、とっておこうと思ってバ
ッグの中に入れてたんだけど……」

「失くしちゃったんですか？」

シアンの最後の言葉をアイナが代弁する。彼の言う、“綺麗な箱”
というのがなんなのかは見当がついていた。

「ああ……」

「そうですね……一旦戻って探してみますか？」

アイナが出した提案に、シアンは暫し考え込んでいたが、やがてこ
う言った。

「戻っても、迷惑はかからないよね？」

「ええ、全く」

「じゃあ、ちょっと今来た道を引き返すよ」

シアンはそう言うが早いか、踵を返した。アイナが後から慌てて追
いかけてくる。

「五合目はすぐそこだったよね……」

「シアンさん！」

アイナが絶叫をあげる。シアンが何事かと思って振り向くと、アイ
ナは傍らでぶるぶると震えていた。シアンの瞳は急に虚ろになり、
彼女の振動の元となっている者達を見た。彼等は紅い顎と銀色の角
を黒い体に生やしたポケモン、デルビル。そしてヘルガー。

「ラン、今はどこら辺？」

ランはこの類の質問を十回程受けた。登り始めた時はやる気満々だ
ったあのツラは何処行っただんですかと逆に訊きたくなったが、元来
そんなことをする性格でもないのでやめておいた。

「ええと……もうすぐ五合目、という辺りです」

「じゃあ、もうあと半分ね」

ハーブがパツと顔を輝かせる。そこは“まだあと半分もある”という言い方が普通だろうが、そこに気付くハーブではない。

「えっと……さっき、五合目で戦闘が起こりかけたって情報が入りましたので、注意してくださいね」

「分かったわ。心配しないで」

ハーブは自信ありげにそう言ったが、ランはそう言いながら不意を突かれて深手を負ったシェイミを何人も見ているので安心はできなかった。そしてそれは、今回も然りであった――

「ハーブさん、危ない！」

ランが叫ぶ瞬間、ハーブの時間が一瞬だけ止まった。それからさつと振り返ると、ランにあのような声を出させたポケモンを認める。

灰色の体に黄色の瞳。鋭い牙を持ったそのポケモン達の名前はポチエナ、グラエナ。

13話 忍びよる闇の象徴（後書き）

来月13日は、私エメラルド「スターダストが「小説家になろう」にユーザ登録した日です。

ただいま、とある小説にてエメラルドの一周年の記念のイベントの募集をしております。

その小説のURLを貼っておくので、是非おいで下さいますようお願いします。

<http://ncode.syosetu.com/n44444u/>

14話 合流と鋭利な機転（前書き）

数話程前の、ランの姉のこと、覚えていますか？ 忘れてしまわれた方多いんじゃないでしょうかw

シアン

「いや、なんていい加減な（汗）」

まあそう言うナイ。最後に登場します。期待裏切りまくりの展開かもしれないがw

シアン

「それでは、14話目開始です」

14話 合流と鋭利な機転

『逃げろっ！』

意思が疎通し合っているわけでもないのに、別々の場所にいるシアンとハーブが同時に叫び合う。アイナとランは、それぞれに手をとられ、シアンとアイナは五合目に向かって下り、ハーブとランは五合目までもうダッシュで駆けあがろうとしていた。

「シ、シアンさん！ このままじゃ追いつかれます！」

アイナは後ろのヘルガーが迫ってきているのを見て珍しく大きな声をあげる。

「その位分かつてるっ！ でも、積極的に戦いたくはないし、かと言って良い案も見つから——」

ない、と言いかけたところでシアンの足が、足元の石に引っ掛かった。何が起こったか考える間もなく、シアンの背筋を嫌な汗が滑り落ちた。

「う、わあああああつ——！」

タガが外れたタイヤのように、シアンとアイナはゴロゴロと山道を転がり落ちていく。

「ハーブ、さん、もう、少し、遅く走って、頂けます、か、？」

ランは、ハーブが彼女を蔓の鞭で掴んで闇雲に走る為にブンブンと振りまわされていた。

「な、何言ってるの！ 追いつかれちゃうじゃないいいいい！」

ハーブは少し涙目で、錯乱しながら答える。こんなに走っているのに、よくここまで喚けるもんだ、とランは別の意味で感心した。

「それより何で襲ってくるのアイツら！」

「多分、縄張りを侵されたと思ったんです——ん？」

その時、ガチンガチンと妙な音が聞こえた。後を振りかえると――

「きゃああああ！？ ハーブさん、もつと速く走って下さいっ！」

ポチエナが、自分の直後5cmで噛みつきを連打していた。それを見たランも、ハーブ以上に錯乱し始める。

「りゅおーかいいい#\$・%&¥!?!！」

ハーブの最後の言葉は、もはやポケモンの域を越していた。

「く、そつ！ 瓦割り！」

予想通り、というか、遂に追いつかれたシアンとアイナ。シアンは拳を技を当てて、デルビルを牽制する。そして、五合目へまた猛ダッシュを始める。アイナもそれについていく。

「宿り木の種！」

アイナが投げつけた種は、一瞬にして成長して草の壁を作った。

「ナイス！」

シアンはそう叫んだが、同時に後ろからパチパチ、と草を焼き払うような音が聞こえたのも事実だ。

「だ、大丈夫なんでしょうか！？」

「まずいかな……!!！」

そう言って後ろを振り返った瞬間、シアンの体は大きく吹っ飛んだ。書きまわされる視界の中に、緑色の物体が映った。そして、聞こえてくる声。

「邪魔よ！」

「後ろ、どう!? ラン!!！」

五合目を過ぎて、ハーブはいくらか落ち着きを取り戻した。

「あ、あと30cmってところですよ」

ランの方はいつ襲われるか、という不安から声が震えている。

「ラン、もし危なかったら、攻撃して良いのよ？」

「もし触発しちゃったらどうすんですか!？」

ハーブの提案を、ランは即座に切る。ハーブは既にその提案のこ
とすら忘れていたが。

その時、前方から何かが迫ってくるのが見えた。緑と白の小さな
物体と、群青色の、細長い物体。青い方は彼女達の進路を阻む場所
にいたので、ハーブは、それが何か確認することもなく、群青色の
細長い物体を蔓の鞭で弾き飛ばした。

「邪魔よ!」

直後、なかなかいきり立っているヘルガーと目があつた。

「……………グルルルル」

「……………あ、あはは」

「ハーブさん、おろして下さい」

ヤクザのような連中に睨まれていて、ランが平気そうな顔をして
いるのは、彼女が後を向いた状態でハーブに掴まれているために今
の自分の状態が分かっていないためだ。その要望が伝わったのか否
か、ハーブは蔓の鞭を緩めてランを放した。

「ふう……………きゃあ!？」

ランは自分がおかれた状況を見て悲鳴をあげる。

「ハーブ、今僕を突き飛ばしたのは君？」

後ろから、聞きなれた声が聞こえてくる。

「シ、シアン!？」

思わず振り返った瞬間、シアンと、————一番いて欲しくない、
グラエナ、ポチエナというポケモンのオンパレードが見えた。

「全く、僕を突き飛ばした拳句、余計な奴等まで引つ提げて来るな
んで、どういふつもりだい？ 仕事が増えたじゃないか」

こちらこそ、合流して早々、相方の愚痴を聞かされることになる
とは思ってもみなかった。そう言っただけでやりたいが、前からはヘルガ
ー、デルビル、後ろからはグラエナ、ポチエナの凶器隊が迫ってき

ているので、無駄口は叩いてられない。

「さつさと片付けるしか無くなったな……ラン、アイナ。準備は良い？」

「は、はい。——え？」

「ちょ、ちよつとシアンさん——」

ランとアイナが互いを見て、素っ頓狂な声をあげたが、お互い言いたいことが言い終わらないまま戦闘が始まった。

「水平斬り！」

シアンの右手から青い閃光が伸び出て、それが一閃、ポチエナ達を傷つける。

「原始の力！」

ハーブの飛ばした光の塊がデルビル達に襲いかかる。

「負けるなあ！ 悪の波動」

それぞれの頭領と思しきヘルガーとグラエナが、それぞれ、黒い塊の波を飛ばす。

『エナジーボール！』

ランとアイナが、深緑の珠でそれを相殺する。

シアンとハーブは背中合わせに近寄った。

「ダークネビュラ 暗黒星雲・銀河！」

そして、シアンがシャドークローの力を籠めて銀の針を投げつける。闇のオーラは銀河のような形をとりながら回転し、ポチエナ達を薙ぎ倒していった。

「火炎放射！」

デルビルの一人が炎技を放ったが、ハーブは光の壁でそれを防いだ。

「おい、グラエナ共！ コイツらは俺達の領土の侵犯だ！ 邪魔すんじゃないえ！！」

デルビル達の頭領が、グラエナ達に気付いたのか、彼等に向けて叫んだ。それに対し、グラエナも叫びかける。

「違う！ コイツらは俺達の縄張りに侵入したんだ！ 俺達が片付

ける！」

「いや、俺達だ！」「俺たちだ！」

そんな言い合いが続いている間、シアンは両方が膠着状態になっていて、動いていないことに気付いた。

——このポケモン達、話は通じるんじゃない？

そう思ったシアンは、かけてみることにした。

「違う！ 僕は領土侵犯じゃない！」

その凜とした声が響き渡り、グラエナとヘルガーを黙らせた。

「僕は、ただの冒険者だ。貴方達の縄張りを侵そうとか、そんなことは微塵も考えていない」

「……」

両者とも、考え込んでいて何も言わない。

「この山の頂上まで登り詰めたら、僕はすぐ退却する。だからここは黙って見逃してもらえないだろうか」

シアンの様子に、何も変わったところは見られない。だが威圧感が異常に強い。ランとアイナはおろか、ハーブまで圧倒されてしまっている。だが……

「……証拠はあるか？」

「な……」

勝ちを確信していたシアンの表情が、グラエナの言葉を聞いて急に焦りを帯びる。だが、アイナとランがそれをカバーした。

「証拠は、私達です」

そう言って、ランが前に進み出る。

「……シェイミ？」

ヘルガーが呟く。

「はい。私が案内をするのは、という方が知っていますよね？」

アイナの確認がグラエナとヘルガーの表情から感情が消える。

「……」

心清き登山者。その答は、この山に住む者として、暗黙の了解らしい。ヘルガーもグラエナも、シアン達を信用したらしく、部下を

引き連れて帰っていった。

「……た、助かったあゝ！」

ハープが、ホッと安堵のため息をついて地面に崩れる。シアンがアイナとランを見て微笑んだ。

「有難う。君達のお陰で助かったよ」

「いえ、き、気にしないで下さい……」

「登山者が安心して山を登れるようにするのが、私達の仕事ですから……で、」

ランは爽やかに微笑むと、急にアイナを睨んだ。
アイナも、顔を強張らせてランを見つめる。

「ラン、ここで何やってるの？ ボクの目の前に出た時は驚いたよ？」

——ボ、ボク！？

シアンが、アイナの一人称が変わったと気付いた瞬間にランが叫んだ。

「それは私の台詞よ！ ハイネス姉さん！」

14話 合流と鋭利な機転（後書き）

シアン

「……………エ？」

はいこれ以上詮索禁止。

ハーブ

「ラ、ラン、今あの子みてハインスって……………」

シアン

「いやいや、アイナって名乗ってたよ？ それに一人称がいきなりボクに変わって……………どういうこと？」

ラ・ア

『えーと、それは……………（強制終了）』

詮索禁止だつて。では、次回をお待ち下さい。

15話 倒れていた好敵手（前書き）

更新です。

シアン

「遅いよ。前の更新から一週間経ってます」

いや、やっぱりローテーションだから……順番変えよっかな？

15話 倒れていた好敵手

「ハynes、って…… どういうことだ？」

シアンは、ランが叫んだ瞬間に自分の耳を疑った。さっきアイナと名乗っていたシェイミはハynesと呼ばれ、彼女自身もそれを認めているようだった。

ハynesは、彼の方を見ると、急におどした様子で

「えっと…… 私は、アイナじゃなくて、ハynes、です……。 シアンさんの聞き違いなんですよ。そ、それから、私、初対面の方だった気が小さくなってしまみたいで……」

「えっ……」

シアンの理解は徐々に追いついてきた。ハynes。アイナ。二つとも、語呂（ことば）が似ている。彼女は、内気気味で、ボソボソとしか喋らない。ランに、ハynesは明るい性格じゃなかったのか、と問いただそうとしたが、初対面相手に性格が変わるのもよくある話だ。

「……そういうことか」

ハープは状況の一部しか知らないの、シアンと一緒に行動していたシェイミがハynesという名前であることしか理解できなかった。

「姉さん……なんで急にいなくなっちゃったりしたの？」

ランが、心配していた証拠である、ハの字に歪んだ眉（まゆ）を見せながらハynesに尋ねる。ハynesは、苦しげな表情で慟哭（たうこく）のように叫ぶ。

「だって……！ い、いきなり知らないポケモン達がぞろぞろ郷（さと）に来て……それで、顔なんて合わせられなくて……それなのに、郷にいられるわけじゃないか！」

シアンとハープは顔を見合わせて、同時にハynesを見て、沈痛な面持ちになった。

今回、空の頂きへの開拓が成功したのは輝かしいパッチール達の

実績だと思った。だが、その裏で、苦しんでいる者だって、少なからずはいるのだ。ハーブは、それで喜んではっちゃけてばかりいた自分を責めた。自分のことしか考えないのに、何が世界を救った探検隊だ。そこから悪事を働くお尋ね者と何ら変わらないではないか。シアンは一つ、大きなため息を吐くとハインスに向き直った。

「古くからの知り合いじゃないと、饒舌じょうせつに喋れない、というのは変えたくないかな？」

「か、変えるだなんて……そんなこと、私には無理です……」

ハインスは縮こまって、顔を伏せた。シアンは、困ったというように頭を掻き毟めしったが、彼女の顔を起こすのは不可能とみて、そのまま言葉を紡いだ。

「変えたら、今みたいに逃げずに済むようになる。自分を救ってくれる人は、自分ボケモンが逃げずに向き合ったときに、始めて姿を現してくれるんだ」

ハインスは、そんなことはできない、と言うように、伏せた顔を思いつきり悲哀に歪めた。その表情を、見ずに察知したのか、はたまた偶然か、次のシアンの言葉は彼女の心に強い響振を与えた。

「でも、あの時崖から落ちた僕を起こしたとき、変わり始めていたのかな……」

ハインスの顔が自然と上がる。暫く、口をパクパクさせていた彼女は、やがて必至に声を絞り出した。

「わ……私、いやボクも、頂上まで一緒に行っていていいですか」

「勿論さ。ね？ ハーブ」

「うん。一緒に頑張ろう、えっと……アイナ」

「アイナじゃなくてハインスです」

ハインスに突っこまれるハーブを見て、大丈夫か、と心配になるシアンであった。

「さ、ラン、早く行こう」

「あ、はい。六合目はもうすぐですよ。頑張りましょう！」

ランは晴れやかな笑顔で皆を励ました。

六合目にも、チーム：フロンティアは基地を作っていた。だが、チームメンバーのゴリキーによると、この先からは積雪の影響で基地を作るのは困難であるらしい。

「すまないね。私達も頑張ってみたんだけど……七合目はガルーラ像を設置するのが精一杯だった」

キノガッサがペコリ、と頭を下げる。その横にゴリキーがいるが、チームリーダーのクチートがいない。

「いえ、良いんですよ。それだけでも助かりますし」

シアンは愛想笑いを浮かべて彼を弁護する。その時だった、ザクツ、ザクツ、ザクツ、という、雪を踏みしめるような音が聞こえてきたのは。

「た、大変だよ！」

シアンとハynesにとっては聞き覚えのある声。クチートである。

「あのポケモンは？」

「チーム：フロンティアの方なんですか？」

彼等に会っていないハーブとランが疑問顔をする。シアンは、肯定の返事を短く返して、急に真剣な面持ちになった。クチートの口調から見ても、表情からみても、彼女のそれは一流の探検隊の落ち着いたリーダーのものとは明らかに異なっている。

「どうしました？」

シアンの声も、当然厳しくなる。

「せ、説明は後だよ！ 早く七合目まで来てくれ！」

クチートの男勝りな声に急かされて、チーム：ブライト、フロンティア、そして二人のシェイミは足を踏み出した。

七合目に到達するまでの道のりは、今までのような硬い地面で敷き詰められてはおらず、高く積もった雪に覆われていた。

少し前まで吹雪が吹き荒れていたらしく、寒く、凍えてしまいそ

うで、更に降り積もった雪も深く、足をとられてしまい、ここまで到達した者がいるのかシアンは不明になったが、恐らく、到達した者はいたのだろう。クチートが血相を変えて走ってきたのがそれを物語っている。また、途中に出てくるポケモンも手強いものとなっており、進むのに苦勞を強いられた。

「何が起こっているんだ……」

目の前に転がっていた、半径だけでも十メートルはありそうな雪玉を爆裂の種を数発投げることで無数の氷雪の欠片に変え、更に突き進んでいくこと数分、

「見えた！ 七合目だ！」

急にダンジョンを抜けた。前方に見えた、黒い物体。それは、ニユーラというポケモンに見え、雪の上に倒れているようだった。

15話 倒れていた好敵手（後書き）

シアン

「え； ニューラ倒れてるしwww」

え、そこ笑いながら言っただ（汗）

ハynes

「ボクのが分かってよかったよ」

ラン

「姉さん……（汗） 皆に迷惑かけたのに……」

それではっ

16話 立ちはだかる樹氷（前書き）

更新です。

シアン

「え、嘘。更新が早い……やばい、明日嵐と雪が同時に来る…」

失礼な。私だって更新の早いときくらい……あるといいなあ

シアン

「え、願望形に変わった（汗）」

16話 立ちはだかる樹氷

シアンは目を見開いた。あんなに大胆に啖呵を切っていたニューラが、ここまで早くやられようとは思っても寄らなかった。

「ニューラー!!」

「アンタ! 大丈夫かい!？」

シアンとクチートが焦りを帯びた足取りでニューラに走り寄る。傍に近づいて、彼を見てみると、その胸の辺りが規則正しく上下しているのが見てとれた。

「よかった……息はしているな」

だが、体の所々に、ニューラの黒い体でも分かるような痣や、傷が見え、決して安全な状態でないことも容易に推測できる。

「一体、どうしたんだ……」

「恐らく、この傷から見てこの付近を縄張りとしているユキカブリ達に襲われたんだと思います。ボク達でも、下手をすれば攻撃されるので……」

冷静な推測をハynesが述べる。

「とにかく、このままじゃ危険だ! シエイミ達、ここから最短距離で暖をとれる場所はないか？」

ゴリキーが剣幕を暗く、指示を出す。その様子に、ハynesは怯えきってしまった。代わりに、誰相手でも上手に振舞えるランが応対した。

「そうですね……この一つ上の八合目……そこにデンリユウというポケモンが住んでいるんです。あの方ならあるいは……」

「なら、そこまでコイツを運んでいくぞ! お前達は、ユキカブリ達が現れた時の為に整えておいてくれ!」

ゴリキーがチーム：ブライトに的確に指示を出す。次の瞬間、彼は自身の身長的一半はあろうかというニューラを担ぎあげ、八合目へ続く道に足を踏み入れていた。後からキノガッサとクチートが

ニューラを支える。

「僕達も、行こうか」

シアンが強張った面持ちで言うと、ハーブも、ランもハynesも頷いた。

いつどこから襲ってくるか分からないユキカブリの群れは、シアン達にとって脅威だった。だが、それと同じく、七合目から八合目に至るまでの道に潜むポケモン達も手強かった。

「瓦割り！」

「マジカルリーフ！」

シアンがオコリザルに拳を浴びせ、強力な跳躍力を使って、跳び上がる。

怒りのやり場を見失ったオコリザルに、ハーブの必中の葉がショートした。マジカルリーフ

「よし、良いぞ！」

それを前方から肩越しに見るゴリキーが叫ぶ。シアン達は、先を行っていた彼等にすぐに追いついた。

「このまま、何も起こらず八合目に到達できりや良いんですけどね」
『そうはいくか』

シアンが倦怠気味に呟いた瞬間、低い陰い声が七人の耳を突いた。

「だ、誰！？」

ハーブが声の主に叫びかける。だが、声の主が何処にいるのかすら分からない。

「まさか……ユキカブリ！？」

『我等の縄張りに侵入して、ただで済むと思うな』

ユキカブリ、とシアンに推測された者は、その問には答えず言葉を続ける。道の周囲から、十数匹程のポケモンが飛び出て来た。白い円柱体に、円錐体。ユキカブリと呼ばれる種族だ。

「しまった、逃げ」

「ま、待って下さ」

チーム：フロンティアは戦いを避けようと、八合目に向けて逃げ出そうとしたが、そのすぐ目の前に、大きな塊が落ちてきた。ユキカブリを三回り程大きくした巨体。彼等の進化系のユキノオーである。

「ぐわぁ!?!」

「わぁ!」

「きゃぁ!」

フロンティアの三人共が衝撃に吹き飛ばされる。思わずニユーラを取り落としてしまいそうになった。だが、シアンが無意識的に飛び出していた。おぶるような形で、彼を背中に受け止める。そのまま滑ると、ユキカブリとユキノオーが為す円陣の中から出ていた。

「邪魔よっ!」

ハープが二本の蔓の鞭でランとハynesを強引に引っ掴み、ユキノオーに原始の力を放つ。

「うぬっ……」

原始の力は直撃こそしなかったものの、ユキノオーを怯ませることはできた。

「危なかった……」

ハープは、円陣を抜け出てシアンの所へでた。

これで、ゴリキー達がユキノオー・ユキカブリの円陣に囲まれ、シアン達がニユーラを背負い、八合目まで到達できる状況になった。「クチートさん、僕達がニユーラを八合目まで連れて行きます。なので、貴方達はユキノオーが僕達を追えないよう食い止めていて貰えますか」

クチートは、頷くだけの返事をした。シアンも、それに頷いて返すと、八合目へ足を向ける。ハープが、シアンの負担にならないようにニユーラを蔓の鞭で支える。

だが、勿論それをユキノオーが見逃す筈がない。

「逃がすな、追え!」

彼が命令を飛ばし、二人のユキカブリが円を外れシアン達を追出した。

「ラン、ハynes、やっちゃって！」

「えっ……」

冒険者の案内のみで、戦いには全くの素人の二人はハーブの指示に戸惑った。とりあえず何か技でも出そう、と考案していたが、ユキカブリ達が円陣を外れた瞬間に、その必要はなくなった。

何故なら、道の右手からは電撃が。左手からは流れ星のように速い弾丸が飛んできたからだ。

「だ、大丈夫！？」

「ヒヤッハッハア！ 面白そーなことやってんじゃねえか！！俺も混ぜろやあー！！」

電撃の元はチップ。弾丸（石）の元はゼアンだった。

「チップにゼアンさん！ そいつらを引き留めて！ 一人たりとも逃がさないで！」

シアンはそう叫ぶと駆けだす。ハーブも、それに合わせてニューラを落とさないように走りだした。

「ハアハア……ラン、後、何か見える？」

「いえ、今のところは何も……」

走りだして十数分。ランが振り返って答えた。八合目まで、ざつと二十分。それまで後方で彼等が頑張ってくれば良いのだが……。

「大丈夫かな。ゼアンさんだっているんだし」

シアンは、時の歯車争奪戦の際にゼアンと戦って彼の強さを嫌と言うほど思い知っている。いや、あれさえ、彼の本気の十パーセントを満たすかどうか分らないのだ。ユキノオー達が全滅させられることはあれど、彼等が負けることはあるまいと確信していた。

「ヒヤッハッハ！！ いーねえいーねえ！ おめえさん、良いくらいに俺を手こずらせてくれるぜえ！」

巨体にローブを被った人間は、ユキノオーに拳の奔流を叩き込ん

でいた。ユキノオーは何とかその一発一発を薙いでいる。ほぼ、ユキノオーが追い詰められた状態だ。

「いくよっ、スカイアッパー！」

キノガツサがユキカブリを一体殴り上げ、上空に吹き飛ばす。苦手タイプの特技を叩き込んだので、倒せているだろう、と思ったが、落ちてきたユキカブリは痛そうな表情こそしていたものの、平気であるという様子だ。恐らくレベルは互角、若しくはそれ以上だろう。

「放電！」

チップは辺りに電撃を撒き散らして敵の牽制を図る。だが、それではゴリキー達が攻撃できない。

「馬鹿、動けねえだろうが。ったく、メガトンパンチ！」

ゴリキーが放った渾身の一撃は避けられ、更にユキカブリが放った氷の礫を当てられ、拳を凍らされた。

「クソッ！」

ゴリキーは悪態混じりに拳を打ちつけ合わせ、右手の氷を打ち砕く。

「ヒャッハ！ 加勢するぜえ！」

刹那、ゼアンがゴリキーと対峙していたユキカブリを殴り飛ばした。

「ゼアン、ユキノオーはどうした？」

「まだぶっ殺せてねーんだけどな。おめーら見てたら危なっかしくて、一発当てて来たんだ」

見ると、ユキノオーはお腹を押さえて蹲っている。

「さあさあ、殺戮はまだここからだ。ぶっ飛んでいこうじゃねえか。ヒャッハアー……！」

17話 戦いと救出の終了（前書き）

更新です。今回はちょっとグダグダでした；

シアン

「グダグダなんていつものこと」

酷い（涙） その言い方は無いでしょ。

シアン

「それでは、どうぞ（最早無視）」

17話 戦いと救出の終了

シアンの行く手は、段々雪が少なくなり、地面が剥き出しになっているところも部分的に見られた。

「随分歩きやすくなったな。あとのくらいだ？」

シアンは振りかえないまま、ランとハynesに尋ねる。

「えと……あと五分ぐらいのところですよ」

「ボ、ボクが行ったときは、ここまでくればあと一息なので、もうちょっとですよ」

ハynesは、舌が回っているのか疑問になる程の早口で答えた。

普段のシアンだったら、微笑ましさに頬が緩んでいただろうが、今は呑気に笑っている暇ではない。

「シアン、大丈夫？ きつかったら変わるわよ」

「いや、大丈夫。それに、あまり時間を浪費できないし」

シアンの様子を気遣ったハーブに、彼は柔らかにその提案を退けた。

「もうすぐ……あ、見えてきました！ 向こうですよ！」

ランが声をあげた。二人が進行方向を見ると、山の岩肌が露出しているところのある一点に、焚き火と思しき紅の光が燈り、一筋の煙が上がっているのが見えた。山頂の高さと比べてみても、八合目でもおかしくない位置だ。

「あの焚き火……あれがデンリユウの居場所か？」

「は、はい。そこですよ」

「そうか……ハynes、先にデンリユウのところまで行って事情を説明してきてくれ」

「あ、は、はいっ」

ハynesは、答えるが早いか飛び出した。

「ラン、後……誰もいないか？」

「大丈夫です。今のところ、ユキカブリ達の姿は見られませんよ」

ランの答に、シアンは安堵のため息を吐いた。

「ヒヤアツハツハツハー！ いーぜえいーぜえ！！ もつともつと足掻けやあー！」

一方、七合目と八合目の中間あたりでは、チーム：フロンティア達がユキカブリ達を圧倒していた。否、圧倒しているのは偏にゼアンの実力で、他は一人一体という感じでユキカブリに当たっている。ユキカブリは、八人でゼアンと向かい合って、一人一人出て、危ない、と感じた瞬間に控えと交代する、謂わば攻撃と防御を見極める戦いだ。だが、それでも確実にユキカブリ達の数は減っている。勝負の決するは、時間の問題だろう。問題は、彼等を束ねるユキノオーの存在だった。先程、ゼアンが鳩尾に拳を叩き込んだが、既に回復したらしく、丸太のような大腕を振るったり、氷の礫を放って牽制している。正直、厄介どころか手強すぎる。

「吹雪！」

「しまった……」

「やらせねえぜ。雨珠！」

ユキノオーの繰り出した寒風は、ゼアンの右手に握られている不思議珠で潰された。

「更にい……」

ゼアンはあまりのできごとに怯んだユキノオーに拳を幾つも叩き込む。それは、さながら数多の影で、避けることは不可能だった。

「んがあっ……」

「ユ、ユキノオー様！」

「ヒヤッハアア！ タマヤー！」

ユキノオーと、駆け寄ってきたユキカブリに、ゼアンは爆裂の種を両拳に握り締め、瞬間的に両者にぶつけた。

ババババンッ……

彼の両手から爆発が起こる。その元となった手は少し焦げている

が、何ら問題はない。

「クソッ……」

ユキノオーはよろけざま、右腕を彼から見て左から右へ振った。囲め、という合図。それに際したユキカブリユキカブリ達九人がゼアンを取り囲んだ。

「オーケーオーケー。……ヴチツ壊すぜ!!」

「ゼアン、加勢するぞ」

ゴリキーが拳を鳴らしながら近寄ってくる。

「僕達の方はすんだよ」

チップの頬がビリビリと電気を帯びる。

「おーすまねえな。ま、ぶちっ壊すだけだ」

ユキカブリ達を囲む者達の眼光が鋭く光る。勝敗は決したようなものだ。

数分後

「さて、これで良いかな……」

シアンは、オレンの実の果汁を含ませた布でニユーラを一頻り拭いた。傷はだいぶ治った筈である。

ニユーラがライバルであるのは分かっていた。でも、放っておけなかったのだ。

——— ということだろう？

昔の自分とは、確実に何かが違う。冷酷な一面を持つ自分とは。そう考えていた脳を、声が乱した。

「シアンさん、ハーブさん！ 大丈夫ですか!」

驚いてそちらを見ると、チップが走ってきている。ハーブが驚きの声を漏らした。

「チップ！ 大丈夫？ ユキカブリ達は!？」

「そいつらなら心配ねえぜ。ユキノオー共々葬ってやったからよ」
物騒な台詞と共に、ゼアンが現れた。続いて、チーム：フロンテ

「イアも見えた。」

「よかった、無事で」

シアンは安堵のため息を漏らす。恐らく、誰も死んではいないのだろう。ただ一人、ニユーラが危険な状態だが。

「んで、ニユーラはどうだい？」

「顔色は良くないな……」

キノガッサがニユーラの顔を覗き込んで言う。ニユーラの傍にいた、黄色い長身のポケモンが答える。

「体の局部に怪我をしてるね。でも命に別条はないよ」

サメハダーのヒレのような手に、水晶の珠が先端に付いた、縄のようにしなる尻尾。彼がデンリユウである。

「よかったな……」

ゴリキーが呟いた時、ニユーラがうめき声をあげた。数秒間瞼がピクピク動いたと思ったら、付き方の悪い目が姿を現した。

「お……俺は？ 確か、真つ白な奴等に襲われて……」

そのまま、焦点の合わない目を全員に向けた。ゴリキーが低い声で、ここが八合目であり、ニユーラは七合目で倒れているのを発見され、暖のとれるここに運び込まれたと説明した。

「貴方を運ぶのは大変だったんですよ。ちよつとは感謝して下さいな」

シアンが、侮蔑も、憐憫も込めたような眼差しをニユーラに向ける。それを聞いたニユーラは、訝しげな表情を見せた。

「運ぶって……お前がか？ つつ……」

「ちよつと、動いちゃダメだよ」

ニユーラが手を動かそうとして、顔を歪めたのを見て、クチートが穏やかにあやす。

「僕だけじゃなくて、ゴリキーさんやハーブも手伝ったんですけどね」

シアンは吐き捨てるように言うと、デンリユウに向き直った。
「それでは、僕達はここでお暇しますね」

「ああ。何か困ったことがあったらまた来な」

デンリュウが人の良さそうな笑顔で応対する。そこに、ハーブが割って入った。

「え、でもこのまま行つて、ニユーラに何かあったら……」

「彼には別状はないって言っただろう。これでも僕は昔は名の知れた医者だったからね」

デンリュウの言葉を聞いて、ハーブはいくらか安心したらしく、引き下がった。

「それじゃ、フロンティアさん達はどうします？」

「ん……俺達はニユーラの容態を見てからここを発つ」

と、ゴリキーが答えた。一方、ゼアンとチップは別行動をとるようだ。

「俺はちよいその辺うろついてから頂上目指すな。俺よか先に着かなかったら恥だぜ？」

「僕も、ニユーラさんを見てから行くよ」

彼等がそれぞれに答えると、シアン達は手を振りながら八合目を後にした。残りは九合目、そして頂上だ。

「……百里の道も九十九里を以って半ばとす。皆、油断するなよ」
シアンはハーブを流し見る。彼女が頷いているのが分かった。
そして、ランとハynesが引き締まった表情をしているのも。

18話 最高峰の最高峰へ（前書き）

シアン

「更新遅い」

ごめんなさい； これでも急ピッチで仕上げたんだよ。

ハーブ

「ってことは、展開は？」

かなりペース早いよ（汗） 誤字脱字も否めないし、何があったか分からない部分沢山あると思う。

シアン

「読者様方、分かりにくければ、気兼ねなく仰って構いません。作者に説明させます。では、18話。行きましようか」

18話 最高峰の最高峰へ

シアン達は九合目に到達し、いよいよ残りは頂上へ登るだけとなった。周りを雲が覆っていて、視界が悪い。

「もう少しだな……油断しないように行こうか。高山病だってあるんだし」

水筒の水を飲んでいたシアンが立ち上がって言った。ハーブも、かじっていたリングゴの芯を何故か地面に埋め、シアンに続いた。

「ラン、ここから先は一本道かい？」

「はい。もう頂上は目の前ですよ……？ どうしたの、姉さん」

ランが答えた折、ハynesが彼女をつついて振り向かせた。

「いや、なんだかさ……嫌な予感がするんだ……ボクだけかな？」

嫌な予感？ うーん、私はしないけど……」

ランは眉根に皺を寄せて首を傾げる。

「どうした、二人共。早く行こう」

「あ、はい」
先に行ったシアン達の後を、ランとハynesはとてとて着いてきた。と、思ったら、シアンは急に歩みを止めた。そして、呼びかけた。

「……由祈？ それにミュウ？ 来てたのか？」

「わあゝ。二人とも、来てたのね」

ハーブが朗らかに笑う。シアンが見た相手は、キルリアである相^{あい}原^{はら}由祈^{ゆき}。それにミュウの二人組だった。

「うむ、ブライトの二人か……お主ら、シェイミの案内役が二人もついておるのか？」

「いや、これは色々成り行きがあつてさ……」

由祈の言葉に、シアンは苦笑い気味に抗弁した。ミュウが楽しそうに目を細める。

「シェイミは草タイプですから、炎タイプや飛行タイプが出た時の

対処に困るのではないですか？ シアン殿」

「寧ろ格闘タイプも飛行タイプに弱いからな……ところで二人はど
うしたんだ？ 頂上から降りてきたみたいなんだけど」

シアンが疑問に思ったことを突くと、由祈は急に困ったような顔
をしてみせた。

「そのことなのじゃが……少々困っておるのじゃ。実はの……」

「いえ、百聞は一見に如かずとも言います。ここは実際にご覧いた
だいた方がよろしいでしょう」

由祈が言いかけたのをミュウは塞いだ。シアンが眉を下げ、真剣
な表情になった。

「……頂上で、何かあったんだな」

「はい。着いてきて下さい」

ミュウと由祈が背中を向けて走り出す。シアン達もそれに着いて
行った。

「この先じゃ」

周囲を覆う雲が晴れ、気温がどんどん下がってきた頃、由祈は、
崖に設置された石段の前で立ち止まった。

「ワシらは用があつて五合目まで戻るが、用を終えたらすぐに戻つ
てくる。ワシの力が必要なら待つておくのじゃ」

由祈はそう言つと、テレポートを使ってその場から消えた。ミュ
ウはその後を追おうとして、ふと思ひ出したように動きを止めた。

「この先、頂上なのですが……得体の知れないものに汚染されてい
ます。更に、強力なポケモンの気配が感じられます。十分お気を付
け下さい」

ミュウの警告は、チーム：ブライトの二人と小さな二人の案内役
に戦慄を抱かせるには十分だった。だが、シアンの顔色は簡単に変
わらない。いつも通りの強気な言葉で返した。

「大丈夫です。貴方達が戻ってくるときにはそいつらを片付けてお

きますよ」

「そうですか」

ミュウは少し笑みを見せると、テレポートで消え去った。頂上から五合目というのはテレポート一回で行ける距離ではないから、恐らく数回ほど重ねて戻るつもりだろう。

因みに、麓から頂上まで、登る時は一度もテレポートを使っていない二人だが、シアン達が気にする範疇ではない。

「さて、登ろうか」

シアンは相棒と案内役を振り仰いで、準備が整っていることを確認した。そして、石段に一步を踏み出した。その瞬間、上から漂ってくるウイスキーにも似た、生ゴミの芳香が鼻を突く。

「え、何なの、この臭い……」

ハープが顔をしかめて言うが、シアンは気にせずに登っていく。

「来たよ、頂上だ……！！」

始めに頂上を見たのはシアンだった。彼は、その有り様を見るなり、愕然とした。次はハープ。彼女は飛び上がってオーバーに驚いた。最後にランとハynes。「ああ……」と残念そうな溜め息がシアンの後方から聞こえた。

空の頂きの頂上。そこは、ヘドロが辺りに散乱し、悪臭を放って周囲の空気を悪くしている、謂わば天空の地獄だった。

「こ、この様か……」

「仕方ないです……。ボク達も、長い間ここに来なかったので……」
ランとハynesが懺悔のように頭を頂垂れた。

「で、でも、誰なの？ こんなことをしたのは――」

「静かに。敵の気配がする」

ハープが言いかけたのを、シアンが忠告によって遮った。瞬間、四人全員が硬直した。やがて、ゾゾゾ、という気味の悪い音と共に、幾つもの塊が這い寄ってきて、シアン達を取り囲んだ。

「べとべとだあ」

「汚いのだあ、いすき」

低い声で言うその声の主は、ベトベターにベトベトン。両方とも固体が液体に変わる途中の紫色の体をしている。見た目的に、著しく清潔感に欠けている。

「な、何？ この汚いの……」

「ミュウが言っていた“得体の知れないもの”っていうのはコイツらか……確かに、得体は知れない……いや、知りたくないな」

シアンが嘲気味に呟いた。ランが前に進み出て言う。

「ベトベター、ここは貴方達の住処じゃないでしょう。早く出て行って」

だが、ベトベターはそれに応じる姿勢を見せようとはしなかった。五体満足、という概念を持たない体つきの彼等は、頭らしき部位を横に振る。

「ええ〜？ やだよぉ〜」

くぐもつていて、相手を馬鹿にしたような響きのある声に、シアンの苛立ちが揺さぶられた。不機嫌を顔色に表し、戦闘体勢をとる。

「ハーブ、ラン、ハynes、戦うか？」

「えっ……」

「はい。彼等には少し目を覚まして貰う必要があります」

戸惑うハーブの傍らでランが冷静な見解を述べた。ハynesも、元来低い体を更に低くしている。

その後ろから、誰かが来る足音が聞こえた。足音からすると四人恐らく、八合目に残してきたチームい：フロンティアとチップだろう。

「な、何だ、これは!？」

ゴリキーは山頂の惨状を見るなりに目を見開いた。

「酷いわ……」

「何てこつたい……」

クチートとキノガッサも、不快そうに顔を歪め、それぞれの感想を述べた。

「うわぁ……こんなんじゃここまで登ってきた意味が無いよぉ……」

チップが事の犯人と思しきベトベター達を睨みながら頬を膨らませ、そこを帯電させた。

「説明してる暇は無い。今はアイツらを倒すのが先だ。オーケーか？」

シアンが呟くと、チーム：フロンティアの三人とチップは打ち倒す敵を見繕った。

「綺麗な奴は追っ払っちゃうぞぉー！」

ベトベトンの猫撫で声がシアンの耳を突き刺す。苛立ちを抑えきれなくなった彼は、そのベトベトンを蹴り付けた。それが、戦闘を開始する合図となった。

「電撃波！」

チップが黄色の波動を放ち、ベトベターに当てた。

「んべべべ」

「メガトンパンチ！」

ゴリキーが、痺れたベトベターに一発を当てた。

シアンは、二人のベトベトンに挟み撃ちにされた。

「くそ……進化前が二人なら楽なのに」

シアンは、入れ替わりで前後のベトベトンと当たっていく。瓦割りを打ち込むと、即座に影分身を繰り出して回避行動をとる。牽制の為に気合い珠を地面に打ち付け、小規模の爆発を起こし、敵を牽制する。その間に跳び上がると、ベトベトンの片割れにムーンサルトキックを喰らわせる。

『ヘドロ攻撃！』

「水平斬り！」

両側から迫ってきた攻撃を、水平斬りの一回転で薙ぎ払う。片方に、パンチを二、三発喰らわせてもう片方を対処しようと後ろを向いた瞬間、急に吐き気が襲って来た。

「毒々じゃあ〜」

口を抑え、下を向いたシアンの視界に見えたのは、紫色の地面だった。そこからけばけばしい色の泡が上がってきている。

毒々。それは通常の毒と違い、苦しみを徐々に増していく毒を与える技。シアンは一気に形勢を不利にされた。

「おい、止めを刺すぜ」

「了解だあゝ！」

ベトベトン二匹分の物理的打撃が迫る。だが、シアンはこの瞬間に勝利を確信した。

「……アツ！！ 空元気……っ！」

シアンは突然顔をあげると、拳を振りまわして、ベトベトン達を攻撃した。その拳は、緑のオーラに纏われていた。

「んぐわあ……」

シアンの状態以上の為に、威力が二倍に跳ね上がったその技は、ベトベトン達をぶち飛ばした。

ハーブは原始の力でベトベターを次から次へと攻撃していた。勿論、戦いに向かないシェイミ二人を庇いながら。

「ヘドロ爆弾！」

そのうち、ベトベターはシェイミが弱点と見て、シェイミに技を飛ばした。不潔感を凝縮したような塊がランに飛んでくる。

「蔓の鞭！」

ハーブは対抗せんと、首の付け根から蔓の鞭を伸ばして、彼女自身と、ランとハynesを守るようにぐるぐると渦捲かせた。蔓の鞭のバリアはヘドロ爆弾を全て弾き飛ばした。

「吹っ飛びなさい！」

彼女がバリアを解くと同時に、蔓の鞭が広がって、ベトベター達を叩いた。

「……馬鹿にしないでね。私の蔓の鞭、軽く三十メートルにはなるのよ？」

ハーブは目力を籠め、敵を睨む。それに怯えたベトベターを、蔓の鞭で叩き潰した。

「くそおお、泥爆弾！」

「原始の力！」

ベトベターの泥爆弾に対して放たれたハーブの原始の力は土の塊を突き破り、光の閃光としてベトベターを倒した。ホッと一息ついたハーブの目の前に、一人のベトベトンが落ちてくる。

「ハーブ、そいつをやるぞ！」

苦しそうな表情のシアンが、右手に空元気を構えながら走ってくる
「了解よー！」

ハーブは、蔓の鞭を出して準備する。

「くそおお！ 負けるか！ ヘドロ爆弾！」

紫色の塊が、シアンを襲う。だが、その時見えたのは幾重にも重なるシアンの残像。影分身だった。ベトベトンが驚きに硬直する。シアンの残像の一つが、そこから漏れ出て実体を持ち、本物のシアンとなった。

「いくぞ、空元気！」

「蔓の鞭！」

両端から二匹分の技を受けたベトベトンはひしゃげた様な体になって気絶した。

「うおおおお！ 爆裂パンチ！」

ゴリキーの拳がベトベターに連続で炸裂する。ベトベターは毒タイプ故に、格闘タイプの技はあまり通らない。だが、爆裂パンチは脳内を掻きまわされるほど強烈な打撃を喰らわせる技。致命傷を負わずとも、安心ではないのだ。

「む、ああ。頭がくらくらするよぉ」

ベトベターが変な動きをしている間に、キノガッサが後ろからスカイアップパーを喰らわせた。飛び上がったベトベターを、クチートがジャンプして、顔の後ろの缺で叩く、ベトベターがぶつかっただけは、地面ではなく、その間にゴリキーが投げていたベトベトンであつた。ベトベターとベトベトンは空中で交差すると、呆気なく目を回した。

「こ、これで最後だ！ 気合い珠！」

シアンは、両掌で抱える橙の塊を、ベトベトンに打ち付けた。

これで、戦闘は終了を見せた。

18話 最高峰の最高峰へ（後書き）

補足

この世界のポケモンは、「社会の一部分としてのポケモン」の
場合は数え方が人、「固体としてのポケモン」の場合は数え方が匹
となります。

19話 最高峰に到達して（前書き）

今回挿絵付きです。

……で、私としたことがその挿絵でミスをやらかしやがりました、今回シアンオンリーを書いたんですがその中に致命的欠陥を発見した所存なんですよ。

まあ、間違い探し程度で探してやって下さい。多分簡単に見つかります。

19話 最高峰に到達して

「うわあああゝ!!」

戦闘の終了と共に、ベトベトン達はボロボロの体を引きずるよう
に後ずさった。あのヘドロは、体の一部ではないと思っていたシア
ンはそのギャップに少々顔を顰めた。

「ベトベター、ここは貴方達のねぐらじゃないでしょう。おうちへ
帰りなさいな」

ランが一步前に進み出て少し語気に苛立ちを籠めて言う。それを
聞いたベトベトン。少し、呆けた表情になった。

「ええゝ? どういうことおゝ?」

その、少し間の抜けた相手をおちよくるような語調に、シアンの
こめかみからブチリという音が幾度も連立して、あたかも輪唱のよ
うに轟いた。

「こ、ここは山の頂上だよ。君達のねぐらは八合目だよね?」

ハインスが少しおどしながら言うと、ベトベター達は辺りを見
渡した。そして、そのうちの一人が足元を見て（彼等に足という
ものは付いていなさそうだが）、一輪の花が下を向いているのを見
た。それは、グラデシア。麓が頂上にしか咲かない花。勿論、ここ
が麓でないことは分かりきっている。つまり……

「ああーっ!!」

のんびり口調が一斉に放った叫びに、全員、ビクツと体を痙攣さ
せた。シアンなどは、目頭を思い切り逆立て、憤怒の形相を作っ
ていたが、それに気付く彼らではない。

「ここ、頂上じゃないよ!？」

「げえ、ホントだ。俺達何時の間にかここ汚してたんだなあ」

「うわあ、早く立ち退かないと」

「分かったんならさつさと去りなよ阿呆」

ベトベター達が言い合う終わり際にシアンが低い声で漏らした呟

きはランの耳に届いていた。ランは、いつもの冷静な態度の壁を崩してシアンを流し見た。だが、直後にその怯えを笑みの薄皮一枚裏に隠して続けた。

「わ、分かったなら早く行ってくれるかな？」

「うん。ごめんね、シェイミちゃん達」

不定形の紫の塊は悪臭を放ちながら頂上から去っていった。彼等の姿が見えなくなったとき、シアンが頭をガクツと下げて溜息を吐いた。

「どうしようもない奴らだな」

その言葉を聞いて、ランは少しホツとした。シアンはベトベター達に嫌悪こそ抱いているかもしれないが、あからさまな殺意は抱いていない。寧ろ、この程度の邪魔を入られた程度で殺意を抱く方がおかしい、という良識はシアンも携えているが、ランから見るとシアンは不思議な部分があつて、思考を読みとれないことが多いのだ（と、言いつつランはシアンに恋情を抱いてしまっている）。

「……で、どうする？ この汚れてしまった山頂」

傍らで、ゴリキーがボソリと呟いた。あまりにさり気なかったので、下手をするところにいる全員の意識からはみ出してしまうていたかもしれない。

「ああ、そうですね。今から掃除したところで、どの位かかるかわかりませんし……洗濯珠の持ち合わせも無いんですよ。残念ながらシアンの鬱屈そうな答を最後に場に降りた沈黙は、しかしすぐに破られた。

「あ、だ、大丈夫です。ボク達、汚れなどを浄化する力を持っています」

名乗り出たのはハインス。ちょっと自信ありげな表情は、隣のランも作っている。

「よ、汚れを浄化できるの？」

ハープがオウム返しに訊いた。ランが首を縦に振った。

「はい。“シードフレア”という炎なんです。技タイプは草ですけ

どね。ちょっと下がっていて下さい。危ないですから」

解説を終えたランはシアン達に退却の指示を出した。技を使うという合図だろうか。

ランとハynesは目を瞑って精神を集中する。やがて、周囲からどす黒い紫色の煙が出て、シェイミ族が体の両端に付けたグラデシアの花に吸い込まれていった。煙が吸い込まれていく程に、辺りの汚れは消えていく。それと遂になるように、グラデシアの花は段々と紫に染まっていく。周囲のヘドロや悪臭が消えていき、そこにどんな花が生えていたのか明瞭に分かるようになってきた。変色が酷いが、足元一面にはグラデシアの花が咲いている。そして、そして、穢れはあと半分かというところで二人のシェイミが覚醒した。

『シードフレア!!』

二匹の叫びが山頂に木霊し、彼女らを中心に光が広がっていく。光はたちまち山頂の全てを覆い尽くし、全てが見えなくなった。

光が晴れて、シアン達の視界は晴れて細やかに見えるようになった。

「わぁ……!!」

誰のものともつかない感嘆のため息がこぼれ出る。足元の、鮮やかな花畑。涼やかに吹く風。崖の近くに來たハーブがシアンを手招きで近くに來させた。

「どうした……」

シアンは崖際に立って、言葉を失った。

眼下に広がるのは、永の絶景^{とくしえ}。雲が影を落とす地上は、木々や林や平原で覆われ、その中を湖が偏在し、川が貫いている。空を見上げると、宇宙に近いのか碧空が空色と群青色を混ぜた色になり、そこにはさながらラピスラズリの宝石のように、星の光が散りばめられている。

まさに絶景という表現が当てはまる。ここに來て始めて、シアン

は登山をして良かったと思えた。

> i29792—1837<

「この山に眠る秘宝って……この光景のことだったんだな」

喜びを瞳に湛え、目を細める。ハーブも、大きな眼を更に大きく見開き、嬉しそうな表情でその景色を瞼に焼き付けるように見つめている。永遠に忘れない思い出を残すために。シアンが、前を向いたまま言う。

「ハーブ。実はさ、渡したいものがあつたんだ」

「えっ！？ 何？ 何？」

ハーブが、出張から帰って来た父に土産をねだる子供のような目で見つめる。シアンは、少し切ない目をして、目の前の絶景から目をそらさずに言った。

「フフ、時制を考えてみなよ。渡したいものが“あつた”んだ。つまり、今は失われてしまったってことだよ」

ハーブが、その言葉にシュンとした。だが、すぐに表情を変えてトレジャーバッグから一つの箱を取り出した。

「それって……空の贈り物……！」

シアンが目を見開く。入手した本人が蓋を開けても何も起こらないが、誰かに感謝の気持ちを以って渡すとその中には想いの詰まった品が入っているという、空の頂きの特産品。ハーブはそれをシアンに渡した。

「私の方は渡すものはあるんだけどな」

そのいたずらっぽい目に、シアンは受け取ることを躊躇ったが、ここは素直に貰っておくのが礼儀というものだ。手を出して、掌にその箱を置かせた。静かに蓋を開けると、その中には何の変哲もないオレンの実が。だが、シアンは日ごろの感謝の気持ちで受け取っておいた。後で知ることになるのだが、ハーブは空の贈り物を拾ったとき、その使い方を知らずに一度箱を開けてしまったという。そ

の箱の中にオレンの実を適当に放り込んでそれをシアンに渡したそう
だ。

「シェイミ達、色々有難う。世話になったよ」

「うん、私達はここでお暇するわね」

帰り際、空の頂きの麓でシアンとハーブはシェイミの姉妹に別れ
を告げた。

「あ、えと、ま、また来て下さいね。待ってますから」

「いつ来ても、私達は歓迎しますよ。それから……シ、シアンさん
……」

ランはシアンの名を呼んだ後急に黙り込んでしまった。よく見る
と、俯いた顔が真っ赤だ。

「ん、何……」

それを見たシアンは、ランが心の中でどう思っているか悟った。
数秒黙り込んだ後、辟易した表情で応対する。

「うん、いつか暇が出来たらまた来るよ。な、ハーブ？」

「え、あ？ ええと、うん」

何が起こっているのか、四人の中で唯一分からなかったハーブも
ある意味辟易していた。

「じゃあ、私達はこれで」

ハーブはそう言って背を向けた。

「じゃあね」

シアンは手を振ると、名残惜しそうに二の足を踏んでいたが、ハ
ーブの遠くなる背を見て置いて行かれると思ったのか、慌てて歩き
出した。

チーム：ブライトのささやかな休憩の時間は終わり、またいつも
通りの慌ただしい日常が舞い戻ってくるのであった。

シアン達の背中が見えなくなるまで、ランとハイネスはその場に
佇んでいた。彼等が点になって、風景と化して——やっど、ハ

イネスの方が動きを見せた。

「ラン、帰ろうか。ボクも久しぶりに里の皆と会いたいし」

そう言ってランの顔を覗き込んで、不意に真剣な面持ちになった。

「……ラン」

彼女の瞋らな瞳に、涙の粒が浮かんでいる。

「……会えなくなるのが寂しいって思えることは、幸せなんだよ。泣いちゃダメだ」

姉は妹を慰めて、その小さな手で頭を撫でた。

19話 最高峰に到達して（後書き）

シアン

「あのさ、作者さん。今何日と思ってるんですか？」

……パソコンの画面の右下に二十四日って書いてある。

シアン

「はい。そしてこの小説の最終掲載日は九日となっていたわけです。これをどうするつもりですかこのクソ野郎」

ごめんごめん。忙しくてさ； パソコンでのもんぶりしまくってたから学校の課題とかあつて全然書く暇とかないわけよ；

シアン

「だらけ腐ってるくせに課題とか；」

だらけ腐ってるとか言っな。その通りだけどさ。

因みに、この話を投稿する日に鏡花水月とユザネを変えました。

さて、長かった空の頂き編も終わりを迎えまして、次から新章——と、行きたいのですが、次と次の次の話はちょっとしたコメディで行きたいと思います

20話 素直じゃない子の物語（前書き）

さて、今回は本編では初になる、一人称です。因みに誰視点かはサ
ブタイから悟って下さい↑

チップ

「……予想はついたよ」

バタフリー

「私事です」

うん（苦笑）　じゃ、いってみようか。

20話 素直じゃない子の物語

「課長」

「そのだらしないう呼びかけを改めなさい。ここは一応職場なんだから」

PPO捜査課事務室内。神経を逆なでさせそうなバタフリーの呼びかけに、アタシは指摘した。こういう、間延びした声で話かけられると妙にいらつくのよね。

「あ、すみません。今度からこの口調はカフェにいる時だけにします」

「自由になさい。で、要件は何？」

「あ、えつとですね——」

バタフリーは片手に持っていたバインダーのプリントの中からその一枚を取り出し、アタシに渡した。これは——？

「ダークネス・ナイトメア社？」

胡散臭いことこの上ない名前をした企業のチラシだった。銀の針とか鉄の棘が黒い紙にプリントされ、青い文字で「Darkness Nightmare」と言う文字が書かれている。何よコレ？

「はい。何でも、東の方に拠点を置いてる企業で、業績とか株とか、大手も凌駕するくらい凄いらしいんですよ」

「え？」

おかしい。バタフリーの言葉を聞いた時、反射的にそう思った。

業績、株価の双方で大手を上回る企業だったら、普通は有名になる筈だ。でもアタシはこんなチラシは見たこと無い。バタフリーの様子を見ると、コイツも知ってる風じゃないわね……？

「課長、知りませんか？」

「知らない。でも、おかしいわね」

「あ、流石課長です。気付きましたか」

「ええ。ダークネス・ナイトメアなんてどう見ても売れなさそうな

名前使うなんて」

答えた瞬間、アタシの机の天板とバタフリーの頭がなかなかの速度で触れ合って、ゴンという鈍い音をたてた。

「全然的外れですよーっ!？」

「分かってるから大声出さないのアホ。あれでしょ？ どうせ事務所の皆にこの会社知ってるか訊いてきたんでしょ？」

「はい。そうです。そしたら皆知らないって言うんですよ。……怪しいですよね？」

「業績ランキングで上位にいるのに無名。闇企業の特徴よ」

アタシが推測を述べてあげると、バタフリーは息急き切って身を乗り出した。

「そうでしょう!？ そう思いますよね！ 課長。すぐにでも戦闘課の方達を総動員させましょう」

その案には賛成できない。いくらなんでも、闇で、しかもかなり規模の大きい組織にこう軽率に挑むのはアタシとしては好きじゃない。

「落ち着きなさいバカフリー」

「課長今“タ”って言うべき所を“カ”って言いましたよね？」

「そして黙りなさい。今ここで戦力を投入しても、多分うまく行かないわ。闇企業を相手にするのを忘れないでね」

するとバタフリーは心なしか嬉しそうな笑みを浮かべた。アタシがその表情を見て悪寒を覚えるのは何故かしらね。

「じゃ、まず推薦するのはチーム：ブライトですよ〜課長」

「……だから何よ」

「シアンさんに会えますよ？」

「だからどうしたのよっ!!」

「愛するあの方と一緒に」

余計なことを言われて動揺させられる前にアイアンテールで叩き潰しておいた。手遅れとは言わせないわ。絶対。

「バタフリー……バタフリーってば……よし、起きないわね」

馬鹿蝶々が数時間は目覚め無いであろうことを確認してから、アタシはトレジャータウンへ向かった。

「何よこの体たらくはーっ!!」

チーム：ブライトがいる所に着いたのはその日の夜遅くになってだった。その有様を見るなり、アタシは叫び声をあげてしまった。いや、これはあげて当然よね。だって、夜中十二時にパッチールのカフェを覗いただけなのに十数匹のポケモン達がドリンクを飲みまくって、数匹がテーブルに突っ伏して爆睡してて、シアンは橙色のジンジャーエールが入ったグラスを傾けながらザングースと柄にもなく大爆笑しあってハーブが何か頭抱えて愚痴ってる由祈を苦笑い気味に励ましていてチップが床でどこぞのオッサンみたいにいびきかいててゼアンがソーナノとオクタンとトランプしながら高笑いしててミュウがボウルを持って、中身を泡立器で混ぜてるけど勢いが強すぎて中身の大半をその辺にぶちまけてる光景を目にするなんて思いもしなかったんだから。

「……シアン、これは何？」

その時、偶然ザングースとの談笑が終わって一人でドリンクを飲み始めたシアンにアタシは訊ねた。

「ん、レイナ？ 今日来てたっけ？」

「今日？」

コイツの口調からすると、今日なんかあったらしい……けど、アタシには関係ないし。いいか。

「いや、パッチールのカフェの常連の皆で登山に行っただよ。空の頂きつていう、世界一高いっていう山。知ってる？」

「知らないし、興味ないわよ」

そうよ。世界一高い山なんてアタシの興味の範疇じゃないし、登りきったところで何になるっていうのよ。胸の奥が妙にソワソワしてるのは気のせいよ。

「それで、打ち上げなんだよ今。ハハッ」

シアンはジンジャーエールを一気に飲み干した。よく見ると、変にテンションが高い。酒類は前にコイツが暴力事件を起こして無期限販売中止になった筈。ということは、寝不足による神経の異常現象かしら。たまにあるわよね、こういうの。

「で、何か用？」

「ああ、それがね、こういう会社知っ」

「ふあああ……あれ、レイナ？ どうしたの？」

アタシが要件を言おうとしたところで後ろからかけられるあどけなさの残る声。振り向くと、後に寝起き顔のチップが立っていた。

「ちよっと所用があつて来たのよ。さっさと済ませたいから邪魔しないで」

「シアンさんに会いたくなつたの？」

「違うわよこのアホリス！」

何て事を言うのコイツは！ 「会いに来た」、ならまだ良いけど、「会いたくなつた」って何よ！ アタシがシアンのことを好きみたいな感じじゃない！

「違うの？ レイナのことだからてつきりそうかと。だって、好きなん」

危険なことを言いかけたアホの口に、傍にあつたグラスの中身を流し込んで黙らせる。窒息して、四肢をばたつかせているのは気にしない。顔が熱いけど、きつと気のせいよっ！ ……シアンの方を見ると、今度はバリヤードと「カスとクズの違い」という果てしなくどうでも良さそうな議題について議論していた。よかった。今の会話は聞かれてないみたい。

「で、閑話休題」

「ん、どうしたの、レイナ？」

「それがね」

今度は邪魔者^{チップ}が入って来ないように、手短に用件を話した。東の方に拠点を置く、ダークネス・ナイトメア社が不穏な動きを見せて

いる。本社に潜入して情報収集、可能であれば本社を壊滅させてほしいと言った。

「――と、いうわけ。どう？ 協力してくれるかしら？」

「うーん……」

シアンは顎に手を当てて何やら考え出した。

「ちよつと、世界を救うぐらいの探検隊なんでしょう。この位の依頼は簡単な筈よね？」

アタシは、報酬として五万ポケ渡すと書かれた正式な依頼書を手渡した。五万ポケ。プクリンギルドの親方の取り分に差っ引かれたとしてもコイツの手元には五千ポケ残る。

その事實はシアンの心に左右を決めさせたらしく、彼の瞳が大きく揺らいだ。

「やってくれるかしら？」

ここは上目遣いに見つめてやろうか、とも思ってたけど、アタシは目つきが良い方ではないから効果は薄い。それにそんな羞恥プレイはしたくないと諦めた瞬間に思った。

「えつと……まずはハープとチップに了承を貰わないと。それに、僕達疲れてるから今日明日は多分受けられないよ」

ブチリ、という音がこめかみから響いてきた。シアンがビクツと方を振るわせたのを見ると、多分相当怖い顔になっている。どういう類で怖いのかは知らないが、普通のポケモンが見たら多分アタシは相当覇気を出している。

「わ、分かった分かった。受けるよ。だから二、三日待ってもらえるかな？」

結局それでアタシは承諾した。

20話 素直じゃない子の物語（後書き）

はい、次ですが、また一人称で行こうと思います。次は誰視点でしょう？ 因みに時間軸がちょっと変わります。予定としてはシアン達がギルドを卒業するちょっと前です。あくまで予定ですgry

21話 Another side love (前書き)

さて、今回も前回同様駄作です。いつもいつも駄作じゃないかとか
言わない↑

それと、今回はちょっと展開の移り変わりが早いです。ご了承ください。
さい。

21話 Another side love

「何故、お主は強さにこだわるのじゃ？」

私がそう訊いた時、彼は難しそうな顔をして答えた。

「野球選手が、どこまでも野球がうまくなりたいと思うのと一緒にだ」
いなくなつて、二週間。私が感じた時間はそれだけだった。でも、神楽は一度人間とポケモンが共存するパラレルワールドへ行つて、この世界の二百年前の時間に戻ってきた。それを二週間の間にやってのけたらしい。

「由祈……変わっていないな。その変な言葉づかいも。仕草も」

私の口調は、大分前に死んだ祖母に影響されたせいで、かなり老成している。でも、そのお陰か、神楽は私を見た時、すぐに私だと分かつてくれた。

でも、再会したとき神楽はもう二週間前の神楽ではなくなっていた。

シャワーズのクレア。彼女は神楽と共に同じ道を歩み、シアン達同様、世界を救つたらしい。

「ああ、救助隊ヴレイフェルだな」

ゼアンに訊くとそう答えた。それが、神楽とクレアのチームの名前。

二百年も前に結成されたチームで、世界を救つたことで名高い救助隊なのだそうだ。

つまり……。

神楽はある時、忽然と姿を消した。

その際に、ある世界へ転生した。その世界とは、人間とポケモンが共存する世界。

神楽はそこに、人間と変化してやってきた。

そしてまた、今度はこの世界へ戻ってきた。その際には、またピカチュウへと戻された。彼がこの世界に戻って来た時、私達が住

む世界の二百年前の時代だったそうだと。

そして、何故か現代に来て、トレジャータウンを襲撃した。
こういうことなのだ。

神楽がクレアと出会ったのは、この世界に戻って来たとき。チー
ムヴレイフェルが結成されたのもそのときだ。

尤も、これは全て「ポケモン」と名乗る謎の者から聞いたことだ
けど。

「……そうか。ワシはもう帰るぞい」

神楽の言葉の返事に、まともなものが見つからず、私は帰ること
にした。

「……」

今日は疲れていたらしく、私がベッドに入り込むとすぐに意識が
遠退いた。

「来たのう……」

私が最近見るようになった夢。神楽の経緯も教えてくれたあのポ
ケモンの夢だ。このところ夢は見なかったけど、今日は、ポケモン
は夢の中に来てくれた。丁度良い。訊きたいことがある。

「お主……自身のことをポケモンといったじやろう？ 一つ訊きた
いのじゃが……お主は本当にポケモンか？ 仮にポケモンだったと
て、種族は何じゃ？」

ポケモンと名乗る者は、いつ見ても目映い光に包まれていて、顔
立ちは愚か種族すら分らない。

「……貴方から、このようなことを訊かれるとは思いませんでした
……。由祈様、貴方はキュウコン伝説をご存知でしょうか？」

「キュウコン伝説？」

そんな単語を聞いたことはない。そういう意味を籠めて聞き返し
た。すると、ポケモンは優しい声で語り始めた。

こことは違う世界。人間とポケモンが仲良く暮らしていた。そんな世界に住んでいたある少年は、ある時出来心からキュウコンの尻尾を掴んでしまった。キュウコンの尻尾は、触れた者に千年の呪縛をかけるという。この少年も例外ではなかった。だが、呪縛を受けたのは少年ではなく、少年が所持していたポケモン、サーナイトだった。サーナイトは、主に対して非常に忠実なことで有名だ。その忠実さは、ガーディにも引けをとらない。禁忌^{タブー}とされていたことをやってのける、愚かな少年だったが、サーナイトはそれでも忠義を感じるのだ。彼を庇って、代わりに呪縛を受けた。キュウコンはこのとき、少年に訊ねた。

『汝はこのサーナイトを助けたいと思うか？ このものを助けるために、全てのものを捧ぐ覚悟があるか？』

だが、少年は是と答えずに逃げた。それを見たキュウコンは、こう予言した。

『あの人間は何れポケモンになる。そのとき、世界を破壊する災厄が動きだすだろう』
と。

サーナイト……？ 種族が、私の進化後ということに、妙に畏れを感じた。

「もしや、貴方は……！」

「はい。私はキュウコン伝説のサーナイトなのです」

そう言って姿を現したサーナイト。確かにサーナイトだった。だが、私にとってはとても大切なポケモン……。

「婆様？」

私の祖母と、全く変わらない顔立ちだった。孫を持ちながら、未だに妙齡な雰囲気を醸し出し、美人と湛えられていた。尤も、それは七年前の出来事。

「久しいのう。由祈。おんし、ワシが完全に死んだと思うたじやろう」

「……どうということじゃ？」

私は、祖母の言ったことに驚きを隠せなかった。ワシが死んだと思うたじやろう……それって、つまり……

「婆様……？ まだ、死んでおらんのか？」

すると、祖母は美しい顔に、垢の無い笑みを浮かべて言った。

「ワシは『救世主メシア・ルーカスの導人』となって人間の世界で生まれ変わったのじゃ。おんしの婆様じゃった時の記憶を持つてのう」

「それは、やはり死んだということじゃろう？」

私はそれだけ返事をした。救世主の導人とは何か、人間の世界へ生まれ変わるとはどういうことか、詳細を訊き出したかったが、それしか言えなかった。

「確かに死んだ。じゃが、おんしの婆様じゃったという記憶は確かに残っておる。ワシは言っただじやろう。完全に死んだと思うたか、と」

「生きていた証は残っておるというのか」

そう言っただとき、不意にシアンのことが思い浮かべれた。彼もまた、消え際に「自分は生きていた証を残した」と言っていたらしい。……しかし、神楽がおんしを覚えたいたのは不思議じゃのう」

「え？」

「いや、なんでもないぞい」

今祖母が言っただことを、私は野放しにできなかった。神楽が（・・・）私を覚えて（・・・）いること（・・・）が（・・・）不思議？ 「婆様、どうということじゃ？ 神楽はワシのことを忘れねばならぬのか？」

「う……」

実の孫娘の視線には耐えきれなかったのだらうか。苦虫を潰したような表情を浮かべるとポツリと言った。

「忘れておるのじゃ……やつは、人間界からこの世界に戻る時、一

切の記憶を消したのじゃ」

「なんじゃと!？」

「嘘でしょう!？ だったら、何故神楽は私のことを覚えているの!？」

「……もしや」

神楽は、私のことを覚えていたフリをしていたのかもしれない。そのことを私は祖母に話した。

「……神楽の性格なら有り得るかもしれん。う。確かめてみたらどうじゃ」

「確かめる？」

「記憶のあるときの神楽でしか答えられない質問をしてみい。しかし」

祖母は焦らさせるように、一息をついて私に告げた。

「飯にやつが答えられなかった場合、お主はそれを受け入れる覚悟があるかの？」

「……」

私がその言葉に答えることが、できなかった。

翌日、クレアと一緒にいる神楽を見た。刹那、衝動にも似た感情が胸を満たし、顔を反らしてしまった。

神楽は私を見ると、笑って手を振ったが、私は微かに頷くのが精一杯だった。

容易に信じることはできない。もしかしたら、記憶を失って分からないのも隠しているだけなのかもしれない。

「神楽……」

「どうした？」

「……いや、何でもないのじゃ」

勇気を出して訊いてみようとしたが、その瞬間に涙が込み上げて来て、何も言えぬままに終わってしまいそうになった。いけない。

「このままじゃ。本当のことを知らないと。
お主、あのことを——」

21話 Another side love（後書き）

さて、今回、「探検隊」に、「救助隊」の要素を入れてみました。

実は作者の妄想では、救助隊の二百年くらいあとの世界が探検隊の世界だということになっています。

色々謎が多く、わけわからんという方もいるでしょうが、何分パロディ話ですのでご愛敬を

22話 Darkness Nightmare(前書き)

今回、グロテスクな描写があります。ちょっと血が流れるとかそういうのも無理、という方は即座にブラウザバックされることをお勧めします。

とはいえ、この話を読まれないと次話の内容は理解できなくなりませんがorz

22話 Darkness Nightmare

「ダークネス・ナイトメアね……」

午前六時半。胡散臭いことこの上ない会社名を呟きながら、シアンは早朝のパッチールのカフェの片隅でグラスに注がれたオーレを口に流し込んだ。甘味の中に、苦りが混じった少しメカニック染みた味。彼の好きな味ではなかったのか、顔を顰めてグラスをテーブルに置いた。グラスの底面とテーブルの天板が触れ合って、コンと小気味良い音を立てる。その音と重なるように、シアンの視界とは真反対の方向から、誰かが訪れた気配を感じた。

「……レイナ？」

「約束した時間に来れているわね。よろしいよろしい」

「そう言っても、約束の時間はあと一時間もあるし、ハーブとチツプはまだ来ていないよ」

レイナは、シアンの要領を得ない答に機嫌を悪くしたのか、唇を尖らせて眉を逆立てた。

「うっさいわね。そう言うならアンタは何で後一時間もあるのに来てるのよ」

「他にすることが無いから……ところで、何でレイナもここに？
他の仕事はいいのか？」

瞬間、レイナは不意を突かれたとでも言いたげに目を見開いた。

だが、直後に頬を紅色に染める。

「べっ、別に良いじゃない！ ア、アタシは、ただ……」

途中で言葉を詰まらせたレイナを、シアンはのほほんとした表情を崩さぬまま急がす。それがレイナの頬の赤みを更に深くするのだった。

「ええいつ、何でもないわよ！ 黙りなさい馬鹿！」

——なんか、いつものことだけど、感情の変化が激しいな。

シアンは困惑の表情を表すべく、眉毛の外側の端を下げた。だが、その既成した表情は不完全で、口元が緩んでいた。

「はは、しょうがないな……」

シアンは、目の前の課題である甘苦いオーレを片付けた。その約四十分後に、ハーブとチップはやって来た。チップは、店員以外誰の姿も無いカフェに二人きりでいたことでレイナをからかっていた。当然のことながら、最終的に痛い目を見ることとなったのだが。

果ての湖。

ダークネス・ナイトメア社の本拠地としてレイナがチーム：ブライトのメンバーを案内したのはそう呼ばれるダンジョンだった。

「アンタ達、水晶の洞窟行ったときのこと覚えてる？ 畔から道が伸びてて、湖のど真ん中に小島があったでしょう？ この湖もそれと同じよ」

レイナの解説を、シアンが理解する。

「その小島に、ダークネス・ナイトメア社の建物が立っているってわけね」

「正解」

そのとき、瞳を不安そうに揺らしながらハーブが訊いた。

「わ、私達だけで行つて大丈夫かな？」

「一応、戦闘課のやつらを数十人送ってるけど……」

レイナがそう言っているうちに、小島へと続く道が現れた。

「良い？ 行くわよ」

レイナの問に、シアン、ハーブ、チップの三人は頷いた。

小島への道は、湖の畔から中心まで伸びているようで、そこそこの長さがあった。小島に立っていた石で出来た塔。あれがダークネス・ナイトメア社の建物らしい。彼等が建物の中に入ると、その視界に映った光景は、外見と変わらぬ石の作り。だが、手を加えられた部分も垣間見える。そして――

「う、嘘でしょう!？」

レイナがあげた声。その裏には信じられないという響きが籠っていた。レイナにとっては見覚えのある、戦闘課のポケモン達。皆、体の局所から血を流して倒れている。チップが、一番近くで倒れているニドリーノをつついて反応があるかどうか確かめる。その時、彼等の耳に叫び声が飛び込んだ。

「おい、また侵入者が出たぞ!」

声の主はダイノーズ。赤い鼻が高く、頭部に綿のような毛を生やした岩石のポケモンである。

「み、見つかつちゃった……」

ハーブが戦慄する傍らを、シアンは歩き抜ける。戦闘課のポケモンが落としたであろう剣を拾い構える。

八双の構え。剣の構えの一つで、右手を鰐際に持ち、口元に持つてくる、さながら野球のバッターの右打席でのポーズのようなものである。

そこへ、呼びだされたポケモン達の一人であるケンタロスが猪突猛進の勢いで迫る。シアンはそれをヒラリとかわし、斬撃を叩き込む。

致死を免れさせるべく、急所を外し、外の痛みを感じさせる部分だけ切り裂く。バランスがよろけた瞬間に、ハーブが蔓の鞭を叩きつけた! ケンタロスは十数メートル程吹き飛ばされ、壁に激突すると動かなくなった。

「くそ、次! かかれ!」

ダイノーズが号令をかけると、今度はワンリキーがかかってきた。シアンは、八双から剣を縦に振るい、彼の両手の甲を、脈を外して切り裂いた。使い慣れた武器とも言えるものを失ったワンリキーは今度は足を振りまわして来た。だが、シアンがその足を蹴りあげる。殆ど、股を限界を超えて開く形となったワンリキーは、痛恨を表情に表すと悶絶して意識を失った。

「一斉にGO!」

ダイノーズはいらついたのか、雑に号令を出す。瞬間、数多のポケモン達の奔流がシアンを包み込んだ。

「くっそー、放電！」

チップは、迫りくる濁流を払おうと放電を放ったが、それでダメージを受けるのは敵ばかりではない。

「ちよつと待ったチップ！ それを使ったら僕達もギャアア！？」
『きゃあっ！』

シアン、ハープ、レイナに電撃が炸裂し、形勢は一気に敵側に傾いた。

「くそっ、チップのアホが……」

シアンは、死なない程度に敵に斬撃をぶつける。だが、忍耐が限界を超えた一線が迫った。

「て、めえら……鬱陶しいんじゃあ！」

怒声をあげ、目の前のナツシーを蹴り飛ばす。

「そらよっ！」

そして間髪いれずに斬りつけた。手加減も加えずに。

ナツシーの腹が裂け、鮮血が舞った。

「ふん、俺をキレさせてただで済むと思うな」

最早一人称すら変わってしまったているシアン。直後に振り向くと、後方に控えていたハッサムに刺突を喰らわせた。ハッサムの体から力が抜け、劔が刺さった部分から血が流れる。

本来、劔は二、三回斬ると血肉や脂で斬れ味が格段に落ちる。だが、シアンの手に握られている劔はそんなことは関係ないように見えた。無理も無いだろう。彼自身記憶こそないが、人間だった頃は剣技に長けていたのだから。さらに、怒りのあまりにタガを外し、殺さない程度の斬撃ではなく、本気の斬りを入れていゝまでは制限もあつたものではない。

ハープは、目を吊り上げ、殺さんばかりに劔を振るい続けるシアンを恐れ混じりに横目で見ながら蔓の鞭を振るっていた。とぐるを巻かせて彼女の体を繭のように覆わせ、あらゆる攻撃を防ぐ。そし

て、機が熟したと見えると繭を一気に解き放つ。無論、そのとき蔓は豪速で回転する。その回転で周囲の敵を吹き飛ばす。空の頂きでも何度か使った方法だ。更に、マジカルリーフでオクタンに攻撃。抜群のダメージを喰らったオクタンは何ら抵抗もせず倒れた。因みに、喋っている余裕はなかったようだ。

「シアンはやつ……タガを外したわね」

レイナはアイアンテールをぶつけながらシアンの様子を鑑みていた。因みに、彼女がまともに使える技はアイアンテールと手助けくらいしかない。彼女は即座にチップに手助けをかけて自分は戦いに集中した。

「アンタ達、さっさと抵抗しなさい。でないと公務執行妨害になるわよ」

目の前のリザードに語りかける。その目はなかなか気迫が籠っていた。

「いやだね。そもそも、たった五人で乗り込んでくるようなやつらに負けるか」

リザードも負けじと言い返すが、次のレイナの言葉に固まった。

「そう？ 後ろの光景を見て同じことを言えるかしら」

リザードは後を振り向いて、顔をひきつらせた。飛び散る鮮血。時々光る刀身の閃光。死に至るポケモンこそいないだろうが、恐怖には十分値する。

チップの、少々抑え気味の放電が炸裂する。周囲の水タイプのポケモンは倒された。だが、地面タイプや草タイプのポケモンが残る。

「甘いよ！ 必殺前歯！」

チップは前歯を鋭く尖らせ、サンドに噛みついた。

「うぐ……」

「十万ボルト！」

チップが放った技は、効果は極めて薄い。しかし、放電と必殺前歯のダメージと重ねると、十分だった。

「いくよっ！ 目覚めるパワー！」

チップはそう叫ぶと、右手から光の軌跡を生み出す。それは青白く光り、キレイハナに直撃した。

チップの使用する目覚めるパワーは氷タイプ。威力はかなり高い。それも相まったのかキレイハナは安易に倒すことが出来た。恐れをなしたか、周囲の草・地面タイプのポケモンがかかってきた。

「え、ちよつ、うわあああ!？」

流石に、チップもこれは想定外だったのか、放電と目覚めるパワーを闇雲に繰り出した。幸を奏して、なんとか全滅させた。

22話 Darkness Nightmare（後書き）

はい、グロテスクな描写でしたね。

シアン

「ん、僕でもタガを外すことはあつたんですね」

ハーブ

「今更気付いたの!？」

シアン

「え？」

wwww 実は「時の記憶」が完結してからこっち、シアンの裏モーターが発動していなくて、ちょっと無理矢理ですが入れた次第です。

さてさて、それではっ。

23話 悪夢を見せる（前書き）

うおおお……ここまで書いたのは久しぶりだなあ。5000字突破したよ；

シアン

「……テスト期間なのに、余裕ですね」

毎日一時間ずつ書いていたら更新できる量になったのsry

シアン

「……こいつ、大学入試も失敗するんじゃないかな。では、23話、どうぞ」

23話 悪夢を見せる

「……これは」

シアンは、倒れた敵が落としたらしい物体を見ていた。青く塗られた鉄の塊。飾り気が無い四角錐に、側面の一つに取っ手とトリガーが付いている。

銃？

直感的にそう思ったが、どうも違うようだ。弾丸が飛び出すところは球体の機械がついている。だとすると、別の用途で使用されるのか、シアンは試しに拾い上げると恐る恐るトリガーを引き絞った。「な、何だ、これは……！？」

すると、機械の、本来弾丸が飛び出る部分の周りに、ごうごうと音をたて蠢く黒いオーラが巻き起こった。びっくりして思わず手を離す。そして周りを見て実験台になるポケモンを見繕う。周囲には、彼等が倒したポケモンの群れ。少々視覚的にグロテスクだが、それでもしないとシアン達と同じ目に遭っていたのだと思えば仕方ない。「よし、コイツにするか……」

シアンは傍に倒れていたワンリキーに銃を突き付けた。その瞬間にワンリキーは目を覚ました。傷ついた体で動けないらしく、目だけをシアンの方にやると、彼が銃を突き付けているのに気付いた。その瞬間、顔を引き攣らせて慌てだした。

「げっ！？ ま、待て、それはやめてく」

だが、その言葉はシアンの耳には入らなかった。ワンリキーが言い終わらないうちにシアンはトリガーを、今度は勢いよく引き絞った。

「んぎゃあああああああー！」

「うーん……毒ガスじゃなかったみたいだから死なないっぽいけど……」

ワンリキーがどうにもなっていないければ、そこじゃねえんだよ！

というツツコミが帰ってきそうなシアンの言葉。因みに、足元から這い上がってくる断末魔は気にしない。銃の先端からあふれ出るオーラはワンリキーの頭の周囲で蠢いていた。シアンが手を離すとオーラは消えてワンリキーも再び目を瞑った。だが、どこか違う。再び眠りに就いたワンリキーは、顔を苦痛に歪め、息を切らせている。時たまうめき声をあげ、さながら悪夢を見ているようだった。

——なんなんだろう、これ。

シアンは銃らしき物体を調べまわしたが、それは中断せざるを得なかった。

「くそがああああ！」

「——！」

いきなり聞こえてくる咆哮。そちらを見やると、ダイノーズが奇立ちを瞳に燃やして咆えている様子が視界に飛び込んできた。目の前で、ハーブとレイナとチップが構えている。

——いけない、まだアイツが残っていたのか……！

シアンは銃を手を持ったままレイナの横に並んだ。さっき拾った銃……うまく使えばやつくらいは簡単に下せるかもしれない……！！

ダイノーズは、新たに増えた敵をもともしない様子だった。

「ふん……暗黒銃を持ち出したか……無駄なことを」

暗黒銃。断片的に聞こえてきたダイノーズの台詞。シアンが片手に握っている銃の名称だろうか。ダークネス・ナイトメア社はこれを製品化しているのか？ いや、まさか……。そう思っていたシアンだが、レイナも同様に考えていたらしい。横目でシアンが持つ暗黒銃を見て言った。

「……何処から出た代物かも分からないけど、コレを売り飛ばしてやるわけ？ その辺に五万と転がってそうだから、アンタをぶち倒した後でじっくり調べさせてもらうわね」

そして、何処からか書類を取り出して突き出した。いつの間に手に入れたのだろうか、それは検挙状だった。PPO総長の名を以つて、発行される命令文書。しかし、破られる、燃やされる、ないし

紛失してしまえばそれに効力はない。ダイノーズは、それは知っているらしい。

「戯けたことを、貴様を倒して奪って破りすててしまえば手立てはあるまい」

だが、その弱点を突かれた筈のレイナは頬を緩め、殊更嬉しそうに言った。

「あら、アタシを倒せるとでも思っているの？　今も襲撃されてるって言うのに」

その言葉を聞き終えたのか、聞き終えなかったのか、判断もつかないうちにダイノーズの後頭部に衝撃が走った。

「んが……っ!？」

揺らぐ視界の中で確認すると、先程大口を叩いていたイーブイの仲間らしきパチリスの姿がブレている。

「一応、とんぼ返りを使ってみたんだよ。効果はあったかな」

パチリスは、この場の緊張感にそぐわない笑顔で返す。だが、敵にわざわざ手の内を晒す程幼くもないようで、それ以上はただニコニコするだけで何も言わなかった。

因みに、チップの今の行動は、その場でとんぼ返りしてダイノーズの後頭部に回り、スパークを当てる。即座にとんぼ返りで元の位置に戻る、というものだ。中等技術だが、なかなか洗練されている。「とんぼ返りだか何だか知らぬが……甘いわ。いけ、チビノーズ」ダイノーズは、彼の周囲で公転しているチビノーズと呼ばれる小型のダイノーズを操り、それをシアンに突撃させた。

「おっと、危ないな……」

シアンが水平斬りで弾き返す。そして、直後に高速移動でダイノーズの眼前に接近した。

「瓦割りっ!」

「鉄壁!」

「マジカルリーフ!」

シアンが打ち付けた拳はしかし、ダイノーズの鋼鉄の体に阻まれ

る結果と終わった。ハーブが間髪すら入れずにマジカルリーフを飛ばす。

「ストーンエッジ！」

虹色の葉を阻むがごとく、地面から岩が幾つもせり上がった。

「チップ、ぶっ壊して！」

「うん、エレキボール！」

レイナの的確な指示を受けたチップが、岩を破壊する。

「いっけえええー!!」

ハーブが叫ぶ。瞬間に、マジカルリーフがダイノーズにヒットした。そう、ハーブが確信した瞬間だった。

「電磁浮遊」

バチバチ、とダイノーズが電気を帯びた直後、ブワツと浮き上がった。その後、三メートルほどの高さのところ上下に揺れながら浮遊している。マジカルリーフは、数枚掠りはしたようだが、それで致命傷を与えられるほど破壊力がある技でもない。彼女は、悔しそうに歯がみをすると、蔓の鞭を伸ばして叩きつけた。それは、今度こそストーンエッジで弾かれる。今度はチップがフォローする隙も無かった。

「甘いと言っただろう。小手先の技で勝てる相手でないと知っておくべきだな」

ダイノーズが嘲笑を見せる。電磁浮遊の影響でレイナ達より高い位置になるので、目も自然と見下す感じになる。それが嫌味感を更に強く見せている。

「ふん、嫌なやつ……」

そう言うレイナは、シアンの動向を気にしていなかった。彼が暗黒銃を手に、密かにダイノーズの背後に回り込んでいることに気付いたのは、彼が奇襲をかけようとしたまさにそのときだった。

「あ、シアン……」

「よっ……喰らえっ！」

シアンはジャンプしてダイノーズに飛び乗ると、ダイノーズに暗

黒銃を突き付け、勢いよくトリガーを引き絞った。

「ぐああああ!？」

ダイノーズの、苦しみ悶えるような声が響く。だが、ダイノーズはそれで倒されるほど弱い敵ではなかったようだ。

「ぐお……っ、チビノーズ!」

ダイノーズが操ったのか、シアンがトリガーを引いて数秒も経たぬ間に、チビノーズが凄まじいスピードで突進してきた。

「危なっ……」

シアンは、暗黒銃を撃つのを中断せざるをえなかった。敵に銃を突き付けながらその敵の攻撃を難なく防げるほど洗練された技は持っていない。ダイノーズの頭上から飛び退ると、暗黒銃でチビノーズを弾き飛ばし、ダイノーズの後方に着地した。飛ばした技の流れ弾がシアンの直撃することを懸念したのか、ダイノーズを挟んで向こう側にいるハーブ達は技を放ってこようとはしなかった。

「舐めるなよ。私にその銃は容易く通じぬぞ」

敵の見下げ果てた言い方が、癪に障る。シアンのこめかみには、いくつも青筋が浮いていた。勿論、相手はシアンが後方にいるのは把握しているだろう。この状態から真空波の嵐を巻き起こせば……ハーブ達を巻き込む結果にはなるが、あるいは……! だが、その思考が果てまでいかないとここで、ダイノーズが先制を仕掛けてきた。

「岩石封じ!」

「!？」

「しまった……」

かわす間もなく、シアン達の周囲に巨大な岩が聳え立ち、彼等を閉じ込めるように並んだ。岩と岩の間のスペースが極端に狭く、遠距離を駆使し、且つ小柄なチップでないと打ち破るのは難しいようだ。

「安心して、僕が打ち破るよ!」

チップがその由を伝え、放電を放とうと力を籠めた瞬間、ダイノ

ーズの第二波が襲ってきた。

「地震！」

「しまった……チップ、気をつける！」

シアンは忠告したが、時すでに遅し。チップの絶叫が聞こえてきた。

「くそ……チップ！」

スペースが狭く、腕を振りかぶって拳を打つのも困難な状況。更に、地震により立っているのも覚束ない。一瞬、倒錯しそうになったが、持ち前の特性である精神力を発揮した。

——落ち着け、この状況を打破する策がある筈だ……。なんだ、どうすればいい……

シアンは、揺れの中で定まらない視界の中、ふと暗黒銃を見る。すると、今まで気付かなかったが、銃身につまみが付いているのが見えた。それぞれ、『解除』『安静』『呻き』『意識消失』『破壊行動』とある。因みに、つまみは現在『呻き』を指している。

——これは……暗黒銃をかけたポケモンの状態を操作するのか？ だから、僕が銃を撃ったワンリキーは呻いているのか……これ、複数のポケモンの状態を操作するにはどうするんだろう……。

そう考えた所で気が付いた。その推測が正しければ、『破壊行動』につまみを合わせた時、ワンリキーは文字通り破壊行動に出る……この岩を打ち破ってくれる、よりよければ、あのダイノーズを打ち倒してくれるかもしれない。だが、そうすると自分達がワンリキーに攻撃される恐れがある。自由になったあと、つまみを『破壊行動』以外のどれかに合わせれば良いわけだが……。

——ええい、一か八か、賭けてみよう！

半ば投げやりな気持ちで、つまみを『破壊行動』に合わせた。途端に、岩の向こうから咆哮が飛んでくる。

「なっ、あの野郎、悪夢操作機能に気付きやがったのか！？」

それと共に飛んでくる悪態。どうやら、彼が使用したのは悪夢操作機能と呼ばれているようだ。そんなにペラペラと企業秘密染みた

ことを自分達に教えて大丈夫なのか？ と不安になるが、今は意識の片隅に置いておくことにした。気を引き締めて目の前の岩を見つめる。状況を理解していないハーブやチップ、レイナは襲撃を喰らったらず不意打ちでやられてしまっただろう。

「頼む、破壊するならまずこっちに……！」

祈りは届いたのか否か、分からないまま時間が過ぎる。唐突に、打突音が響くと、視界が開けた。その向こうに立っていたのは、理性を失った色の瞳を顔に湛えるワンリキーだった。

シアンは一瞬、ワンリキーの後方に、ハーブ達を拘束する岩がまだ俄然と立っている様子を確認する。だが、それもつかの間、ワンリキーが拳を振り上げる。咄嗟に、シアンはつまみを『安静』に合わせる。

「……」

そして、銃を盾にして身構える。数秒経って相手に攻撃する色を見受けられなくなると、岩の中から出た。ワンリキーは、地面に倒れて安らかに寝息をたてている。

「き……貴、様」

ダイノーズの、最大級の苛立ちを孕む視線がシアンに突きささる。シアンはそれに臆することなく拳を構える。

「甘いのは貴方だよ。僕は、否、僕達はこの程度のヤワなポケモンじゃない」

シアンがそう言っつて、ダイノーズが何かを言おうと口を開きかけた瞬間、ハーブ達を閉じ込めている岩がガラガラと崩壊した。

「何！？」

土埃が全身にまみれたハーブとレイナ、先の地震で相当体力を消耗したチップが姿を現す。レイナが、しめた、とばかりに唇の端をあげる。因みに、司令塔的な役割をしている彼女は戦闘に参加していない。

「くそ！ ならばもう一度閉じ込めるまで！ 岩石封——」

「甘いわ！」

ハーブは、マジカルリーフを仲間たちに向けて放った。しかし、虹色の軌跡はシアン達に掠りもしない。そのまま、せり上がった岩のみに切り裂く。

「うっ……じゅ、十万……ボルト！」

チップの放った技は、ダイノーズにかすりすらもなかったが、彼の周囲の大気を弱く帯電させることはできた。電磁浮遊で浮いていたダイノーズが地面に落ちる。さながら、羽を落とした墮天使のように。

「や、やった……まだまだ……」

チップは戦おうとこそしたが、手を床につき、動ける状態ではなくなっていた。

「形勢逆転だな。同じ手に、何回も引つ掛かりはしないってこと……さっ！」

シアンは、一瞬にして高速移動でダイノーズに肉薄すると、水平斬りで斬りつけた。直後に瓦割りを打ち込むとサツと距離をとって、ハーブの横に並ぶ。

「ふざけんなあ！ 岩雪崩！」

ダイノーズが叫ぶが、何も起こらない。何があったのか、と思うと、レイナが叫んだ。

「上よ！」

シアンは後方に二、三回バック転をしてかわし、ハーブは上方にリーフストームを繰り出すと、自分に襲い来る岩を全て切り刻んだ。そのまま、リーフストームをダイノーズの方へ飛ばす。

「あまいわ、ストーンエッジ！」

床からせり上がる岩で嵐を防ごうとしたダイノーズ。しかし、技が発動することはなく、ダイノーズは麻痺に捉われた。

———な、に！？

焦りが心を支配する。そのまま、リーフストームに包まれ、耐えがたい痛みが全身に走る。轟々と音をたてる嵐の中、リオルの少年の解説が途切れながら聞こえる。

「簡単なことだよ。縛り珠で奴の動きを止めただけさ」

——縛り……珠……。

自らの愚策を呪いながら、ダイノーズの意識は闇の中に滑り込んでいった。

24話 始動（前書き）

さて、更新です。因みに今回、あのチームが登場です。

シアン

「あのですね、あのチームと言われても分かるわけないと思うんですよね」

……えっと、あの二チームが登場です。

シアン

「数を言えば良いとか一言も言っていないませんが」

そして片方は初です。

シアン

「嗚呼、無視ですか」

24話 始動

「さて、邪魔者も倒したし……アンタ達、出てきなさい」
『はいっ！』

シアン達以外に人気がなくなった一階のロビー。レイナが誰とモつかぬ者達に指示を出す。すると、子供のものと思しき高い声で軽快な返事が幾つも飛んできた。

「レ、レイナ……彼等は、何？」

一瞬驚きを声に含めたシアンが尋ねる。駆け寄って来たのは六人のイーブイ達だった。

「アタシの部下よ。探検隊チーム『アダプター』を雇ったの。ハーブとチップ、あの時岩石封じが一人手に崩壊したの、おかしいと思わなかった？」

「えっ……」

言われて始めて思った。チップもハーブも、ダイノーズが放った岩石封じに特に攻撃を仕掛けたわけではない。ワンリキーの怒号に氣をとられて、そこまで意識がなかった。だが、何もしていないのに、確かに岩は崩れた。今思えば、不思議である。まさか――

――？

「そうよ。アンタ達の予想通り、この子達がぶっ壊したのよ」

「そ、そうだったの。有難う」

「うん、助かったよ」

ハーブとチップが礼を言って頭を下げると。一番先頭に立っているイーブイが、

「いえ、どういたしまして」

と言って頭を下げ返した。見た目年齢は十三。まだ声変わりしないところを見ると、実際の年齢もそれくらいのようなのだ。後ろに控えている五人のイーブイも男女様々でこそあれ、皆十二、三歳位とみえる。五人は、前に三人、後ろに二人と一応集団行動のように並ん

ではいるが、個々が辺りを見渡したりシアンの顔をジッと見つめていたりして、まとまりが無い。

「……レイナって、まさかショタコンじゃ……」

シアンが思いかけたことを言い終わらないうちに、レイナの制裁が飛んできた。

「ぶへほっ！？ 違うの！？ じゃあ、ロリコン？」

第二波発射。頬を紅潮させたイーブイの少女から二発のアイアンテールを喰らったシアンは暫く床に伸びていた。

「アダプター、アンタ達は一階の戦闘課の奴等を回収しておいて。アタシ達は上の階に行くてくる」

レイナが指示を出すと、アダプター達は四方にサッと飛び散り、自分達の仕事についた。レイナは、シアン達を促す。

「さ、行きましょう」

「待った」

それにシアンが制止をかける。レイナは予想外の行動に驚いたのか、苛立ったのか、眉根を寄せた。

「さつき、ちよつと覗いてみたんだけど……上の階からはダンジョンになつているみたいなんだ」

「だから何よ」

「いや、周到に準備する必要があるだろう。何せここは敵の本拠地。油断は最大の敵なん……無視！？」

シアンが御託を並べている間に、レイナ達はダンジョンに突入していた。シアンは、慌ててその後を追った。

同じ頃、ダークネス・ナイトメア社のビル内で一つの戦闘が終了した。

「ふん、雑魚が。数で圧せると思ったのか」

銀の針を片手に、頬をバチバチと帯電させている黄色をベースとしたポケモン。ギザギザの尻尾が生えている彼は、言わずもがなピカチュウ族だ。彼の名は、カグラ。隣にいるシャワーズはクレア。二人で結成されるチームの名は、グレイフェル。かつて二百年ほど前に、世界を救ったと言われる伝説の救助隊である。

「プクリンギルドの掲示版に貼られていたことは本当だったのか……」

「そう、みたいね。こんなに堂々と建っているのに闇企業だなんてボソリと呟くカグラに、クレアが尋ねる。彼等がいるのは、地上三十二階。入ってくるときに見たロビーの蛍光版では、ビルは百階建て。まだ半分もいつていない、ということだ。

「お好きな潰し方で潰して下さいと言っているようなものだ……ん？」

カグラは皮肉を言いながら、自分達が歩いている廊下に接する部屋のドアから何やら話し声が聞こえてくることに気付いた。

「何だ……？」

「何かしら」

カグラとクレアはドアに耳を付け、聞こえてくる会話に耳を澄ませる。

『おい、侵入者は今どうしている』

『現在三十二階で活動中の部隊を全滅した、とのことだ』

これはカグラ達グレイフェルのことだろう。自分達の動向なら自分達が一番よく知っている。

「聞くまでのことじゃなかったか……」

カグラがそう言う間にも、ドア越しの会話は聞こえてくる。

『更に、先程ロビーから別の侵入者の報告がありました』

『「何だと!？」』

しまった、とカグラが心の中で思ったときには既に遅かった。

『ん? 今外で誰か何か言わなかったか?』

「……しまった……」

「カグラの馬鹿」

クレアの罵倒以上に、ドア越しの敵を専ら気にするカグラ。

『ちよつと見て来い』

「行くぞ」

「え!？」

ドアの中の者が出て、侵入者撃退と敵を大勢呼ばれる前に、自分から部屋の中に入入していく。勿論クレアを連れて。

「見に来る必要はないさ。ここに姿を現してやった」

部屋の中にいたのはバンギラスと、上司と思しきボスゴドラ。両方とも、啞然としている。彼等に、クレアはいきなりハイドロポンプを放った。

「ぐおお!？」

水圧に圧されたボスゴドラはひっくり返って目を回した。

「なつ、テメエら、侵入者が……」

バンギラスが言い終えて何かをする前に、カグラは右手に構えた銀の針を投げつけた。あらかじめ帯電させて置いたそれは、電気の残滓を引いてバンギラスに向かっていく。

フレミングビルガン

「直線電磁砲!」

バンギラスは、かなりのスピードがあつたそれを叩き落とした。
のだが……。

「ぐああつ!」

直線電磁砲の中に溜まっていた電気は、一瞬にしてバンギラスの体内から床へと逃げて行つた。それにより、バンギラスの体内には電撃のダメージが走る。

「くそが、調子に乗るなあ!」

ボスゴドラはだいぶ怒り狂つた様子で咆えると、拳から一つの銀色の塊を放った。ラスターカノンである。

「喰らうかつての」

だが、カグラはそれを片手で造作も無く振り払った。電気タイプの彼には、鋼タイプの技のダメージは少ない。

「ちょっとだけ、大人しくしてもらおうね。カグラ、引っこんでいて。……波乗り！」

カグラの退避を確認したクレアが叫ぶと、彼女の周りに大量の水が発生した。それは瞬く間にバンギラスとボスゴドラを巻き込んだ。『ぐああああ！』

波は上に二メートル近く伸び、そのまま二人に叩きつけられる。水が全てクレアの体内に収まったとき、バンギラスとボスゴドラは地面に伸びていた。カグラは、二人に電磁波をかけると、その動きを止めた。

「敵を呼ばれたら何かと厄介だからな。大人しくしてもらおうぞ」麻痺状態になった彼等を見て、カグラは嘲りを含めた声で言った。だが、その声がボスゴドラの顔に笑みを貼り付ける。

「ふふふ……なら、敵を呼ばれたら俺達に勝ち目があるというのだな……」

「俺が今電磁波をかけておいた。敵など呼べぬだろう」

カグラは、ボスゴドラの言葉に戦慄を覚えながら、背中を向ける。その時、クレアが何かを察したらしい。何かに弾かれたようにあらぬ方向を向いた。

「どうした？」

「向こうから……ポケモンの気配がする」

「何！？」

カグラが険しい表情を浮かべる。いつの間に敵など呼ばれたのだ？ と疑問に思う。彼等二人は誰かを呼ぶ行動などとったのだろうか。ふん、馬鹿めが。これだけ派手に暴れれば俺達が望まずとも追手が来るに決まっているだろう」

ボスゴドラに続いてバンギラスが言った。

「……そうか、そういう……そういうこと、だったのか」

カグラは焦りを見せながらも、諦めの表情は決して表に出さない。

アダプターのリーダー、セレントは戦闘課の人員の回収、及びP
Oから直接派遣された業者に引き渡し、彼等を無事に帰還させた
ことを確認すると、所持しているトレジャーバッグから探検隊バッ
ジを取り出した。ブロンズランクの探検隊が使用するものとなつて
いる。会話を繋ぐと、数回のコールの後、レイナは応対した。

『ん、セレント？ 戦闘課の奴等はPPOに帰した？』

レイナはダンジョン内にいるのだろうか、電話の向こうからはレ
イナの声と共に何かの打撃音と、シアンというリオルの少年の嘲っ
たような声が耳に流れ込んでくる。

「はい。全員回収しました。後はどのように？」

『そうね……とりあえず、ダンジョンの中を探索していなさい。何
か情報を掴んだら連絡して。くれぐれも、途中でやられちゃだめよ
じゃあね』

そう言つて、通話は切れた。セレントはバッグに携帯電話をしま
うと、アダプターの隊員を集めた。彼を含めて総勢六人。探検隊の
公式の活動ではパーティーは四人までと制限がかかっており、それ
以上の人数では公式の活動とは認められていないが、彼がそれを気
にしたことは今日まで未だ無い。

「リーダー、レイナさんは何て言つてた？」

アダプターのメンバーの一人、ミクリアが尋ねると、セレントは
指示通りに答えた。その傍らで、ハクというメンバーの少女が、蛍
光版を見上げている。彼女はやがて口を開いた。

「……当ビル、百階建てのようです」

そう呟いた瞬間に、今度は少年のルカエトが弱音を吐く。

「ええ〜！？ それはキツイよ」

スタミナが少なく、持久戦に向いていない彼は、百階建てを登る
には少々厳しいだろう。だが、真面目な優等生フェイスの少女、フ
アーリンが注意する。

「キツイとか言わないの。貴方も探検隊員の端くれでしょう」

「はい……」

ふてくされた様子のルカエトを、カイティスがフォローした。

「まあまあ、俺だってキツイって言えるよこれは。だって百階建て、だもんなあ？」

だが、ルカエトがフアーリンがそれに答えないうちに、セレントが痺れを切らして言った。

「あのさ、早く行かないと僕達レイナさんに怒られると思うんだけど」

24話 始動（後書き）

さて、今回チーム：ヴレイフェルが登場です。さらに、チーム：アダプターが初登場です。

因みに、アダプターの隊員の名前……気付く人は気付きますw 実はあるキャラクターシリーズからとってるんですよw

ハクの名前が出て微笑したその貴方はお答えが分かるかとw

25話 二本の線は交わずに（前書き）

またもや意味不明なサブタイだね（蹴

シアン

「なんでしょうね？　うちの作者、ネーミングセンス破滅的な気がするんですよ」

お黙りなさい。アンパサーンド、今回はまさかの五千字越え。これをボリユームたっぷりと思うのかグダグダと書きつつっているだけだと思ふのかは貴方次第でしょう。

25話 二本の線は交わらずに

チーム：アダプターの最大の武器は“チームワーク”である。探検隊であればそんなものは基本中の基本だ、と疎かにする者も多々いるが、それ故に失敗する探検隊も多い。

「ミクリア、補佐お願い！」

「はいよっ！ 手助け！」

六人のイーブイと、一人のウィンディが対峙している。セレントの声に対し、ミクリアが反応。彼女の両前足が光り、その光が燈った両手をミクリアが叩き合わせる。すると、セレントの体から光が弾ける。

彼女が使役した技は、セレントだけでなく、他のチームメンバーの技の威力をも強める。

「有難う。電光石火！」

セレントは俊敏にウィンディにぶつかって、即座に元の位置に戻った。ファーリンが補助するように、彼の横を彼より速く突き抜け、ウィンディの目の前で真上に跳躍した。ウィンディは視界を攪乱される。

だが、ファーリンは今空中にいる。ウィンディにしてみればかつこうの位置だ。更に、彼女は上下逆さまでウィンディの方に後頭部を向けている。

「ふん、ちよつと攪乱したからって良い気になるなよ？」

即座に火炎放射を放ってまずは彼女から屠ろう、そう思って技を放った。

「ファーリン、危ないですよ」

だが、ハクが咄嗟にバトンタッチで彼女と場所を入れ替える。何が起こるか分からなかったファーリンと彼女の危機を察知し、事前に頭の中で何をするか決めていたハクとでは対処の方法が全く違う。「守る」

ビカア！ と緑色の壁が出現し、ハクを灼炎から庇護する。炎が消えると、ハクは迅速な動きでとんぼ返りをして後方に下がる。

「ちっ、炎の渦……っ!?」

ウィンディが技名を言い終え、炎の渦を発動させようとしたまさにその時、カイティスとルカエトがいきなり眼前に飛んできた。アイアンテールを仕掛けるか、と思ったが、予想は外れた。

『影分身!』

その瞬間、二人のイーブイの少年の分身体が沢山現れる。

「くそ、オーバーヒート!」

ウィンディは、影分身達を全て洗いだし、同時に少年二人を焼却しようと体から爆発を出す。だがしかし、爆発が晴れた時にはカイティスとルカエトは平然と立っていた。鼻先数センチのところかわされたのか。

「エコーボイス!」

「エコーボイス!」

カイティスとルカエトが、一瞬だけ時をずらして攻撃する。エコーボイス、すなわち使い続けることによって反響し続け威力をあげていく技。それを放った二人は咄嗟に両脇に飛びのく。そして、両前足を光らせる。

「何だ……?」

エコーボイスを、衝撃の余波を受けつつ蹴散らして見ると、中央の可愛らしい顔立ちのイーブイ以外は全て両前足が光っている。それをウィンディが確認した瞬間、五匹のイーブイ達は皆両前足を叩き合わせた。同時に、件のイーブイの体から光が弾け飛ぶ。

「目覚めるパワー!」

手助けだな。ウィンディはそう直感した。そして、今も自分に迫る目覚めるパワーを打ち消そうと炎の準備をした。

「ハク、お願い」

「了解しました」

目覚めるパワーを放ったセレントは、ハクに向かって目配せをし

た。すると、事前に打ち合わせしたかのような整ったタイミングでハクは返事をして、バトンタッチを発動した。

「あ？　どうということだ？」

炎を放とうとしていたウィンディは、自分の視界にいきなり、幼げながらも軽薄そうな顔立ちのイーブイが現れたことに辟易した。因みに、そのイーブイとはカイティスのことである。

「まあいい。お前からぶっ殺」

ハクは、バトンタッチで元々ウィンディがいたところにいた。勿論のこと、セレントの目覚めるパワーが当たる場所である。だが、チームメンバーの誰も危ない、と思いはしなかった。それは、彼等が薄情なのではなく、彼等がハクの思惑を理解していたからである。目覚めるパワーが彼女にヒットしようかという瞬間、ハクはもう一度バトンタッチを使った。

「してや——　なっ！？」

そして、ハクとウィンディの立ち位置が再度入れ替わる。ウィンディは考えなかった。何故、あの少女がバトンタッチを使って自分を攻撃するのに丁度良い場所にわざわざ誘い込んだのか。何故、軽薄そうなイーブイがやられそうになってまだ余裕そうな表情をしていたのか。それで分かった。自分を惑わして、目覚めるパワーを確実に当てるため。だが、そう分かってても時既に遅し。

目覚めるパワーという技は、使うポケモンによってタイプが変化する。セレントが覚えている目覚めるパワーはエスパータイプである。炎タイプのウィンディには威力は平凡なものだが、イーブイ五人分の手助けで助力されたものだったらどうだろう？　致命傷は負わせられる。

ウィンディは一応の抵抗は試みたらしい。だが、ハクのバトンタッチにより翻弄させられて十分な準備もできず、また先程オーバーヒートを放ち、その反動により攻撃の威力が低下していた。それらの理由も重なって、彼が放った炎はあっけなく吹き飛ばされ、ウイ

ンディは倒された、というわけだ。

「よし、行こう！」

倒れたウィンディの傍らをセレントは号令をかけながら走り抜けた。その後に、五人も続く。

「リーダー、あつちに階段あるみたいよ」

「うん、そこまで全力でいくよ」

そう言つて、セレントは更にスピードをあげる。チーム：アダプターの誰一人として漏れることなくセレントについて行つた。

「次は七階か……ん？ セレント、何かいるよ！」

階段を上がつた直後、ポケモンの気配を感じ取つたルカエトがセレントに呼びかけた。

「敵？ そいつ、こつちに来そう？」

「うーん、どうだろ」

セレントの間に、ルカエトは首をかしげるだけだ。ファースリンが見通し眼鏡をかけ、ルカエトが指した方を見つめる。刹那の感覚をおいて、口を開いた。

「ピカチュウとシャワーズがダンジョンのポケモンと交戦状態に入っているみたい。どうする？ 加勢に行つた方がいいかしらね？」

ファースリンは固い表情のまま言つた。その言葉はセレントを大いに迷わすには十分なものだ。

チームメイトは皆、彼に判断を委ね、セレントを見つめている。

加勢に行つても良いが、ピカチュウ達からすれば足手まといになるかもしれない。いや、その前にピカチュウとシャワーズがダンジョンに配置されたポケモンだという可能性も否むことはできない。百聞不如一見。これは一度見通し眼鏡をファースリンから借りて自分で見た方が良さだろうか。

「ファースリン、それ貸して」

「はい」

セレントは見通し眼鏡を受け取ると、それを頭にかけた。そして、壁越しに映る戦いに目を凝らす

——成る程、ピカチュウとシャワーズがバッジをつけてる。彼等がダンジョンのポケモンという筋はなさそうだな……ん？ バッジ？ あれは……。

そして、彼は気付く。探検隊らしきポケモン達が所持しているバッジが、通常ではありえないことに。

現在探検隊連盟が公式で発行する探検隊バッジは、金属製で両横から羽が生えている。だが、彼等が所持しているバッジは羽が付いていない。百年ほど前にデザインが廃止された旧型のものだ。それも、

「救助隊？」

「えっ？ 何言ってるのよ？」

セレントが推測を述べた瞬間にミクリアが訝しげに声をあげた。

「救助隊だよ、あのポケモン達」

だが、その声も構わずセレントは続ける。バッジから判断しただけのことだが、その予測がどうしても頭にこびりついて離れない。

「……救助隊という呼び方は、百年前に廃止されたでしょう」

「そ、それはそうだけとさ……」

矛盾点を突かれ、セレントは答に窮する。だが、ルカエトが思いがけないフォローを入れた。

「あのさ、前に星の停止騒動があつて、ヨノワールってポケモンがいたでしょ？」

「え？」

彼は、トレジャーバッグから新聞らしい分厚い紙の束を取り出し、何やら検索している。よくトレジャーバッグの紐が切れないと言いたくなるほど重そうだ。

「うん、ジュプトルとチーム：ブライトっていう探検隊を壊滅させる為にさ。その時、刺客を雇ったんだってさ」

ルカエトはある一面を開くと、表示された記事をセレント達に示した。

「タイムスリップの疑い有り……？」

カイティスが紙面を覗き込んで呟いた。それに、ルカエトは頷いて返す。

「二百年前にこの星を救って、神話では英雄と語り継がれている救助隊チーム：ヴレイフェルがタイムスリップでこの時代に来たんだって。で、ヴレイフェルは……」

ピカチュウとシャワーズで構成されている。ルカエトは言外にそう告げた。周囲に気まずい沈黙が降りるか、ルカエトが再び話し始めるかどちらが早かっただろうか。

「それから、彼等はヨノワールに頼まれたんだって」
「頼まれた？」

ミクリアが彼の言葉を反芻する。

「ジュプトルとブライトの星の停止防止行動を、抑制して欲しいって言われたらしいんだよ。そして、彼等はその要求をのんだ」

「……何故？ 世界を救おうという意思があつたなら、星の停止も防ぐのが正論じゃないの？」

英雄と呼ばれるが故に浮かび上がる矛盾点をセレントが突く。ルカエトはその問に対する答までは用意していなかったらしく、辟易した表情を作る。

「そこまでは分からない……」

「そっか……で、ルカエトはあのポケモン達がチーム：ヴレイフェルだって言いたいのか？」

ここで、徐々に軸から離れていた話題をセレントが半ば強制的に軸に添える。

「多分ね。セレント、見通し眼鏡を貸して」

件のチームがヴレイフェルであることを確認するためなのだろうか。ルカエトは右前脚を、肉球を上に向けてセレントに差し出した。セレントは一抹すらも躊躇を見せずに見通し眼鏡を肉球の上に置く。
「ありがと。えっと……」

ルカエトは渡された眼鏡をかけると、戦場を鑑みた。チームメイトはその唇の動きや眉の動き方から彼が何を考えているのか、は分

からない。

「……うん、グレイフェルで間違いないみたいだ」

「本当？」

フアーリンが真偽を問うと、彼はその証拠すらも提示できる、と言いたげな程に自信にあふれた動きで頷いた。そして、次にその証拠を提示していく。

「グレイフェルのリーダーのピカチュウ——木下神楽、っていうんだけど、銀の針に自分の十万ボルトの電流を介して、銀の針に電気タイプの性能を持たせる技術を持ってたんだ。それと酷似した技術を、あのピカチュウが使ってたんだよ」

「マジで？ そんならさ、アイツら世界救う程の探検隊ってことだろ？ 手助けなんていらんじゃん」

カイティスの言葉に、セレントとミクリアが賛成の意を示した。

「うーん、迷うけど、僕もそうした方がいいと思うよ」

「アタシも」

「でも、セレント……一応、恩を売っておいても悪くはないのでは……」

ハクが反対しかけたが、セレントがその言葉を塞ぐ。

「恩を売って言うってもね……僕達の実力でできることなんて、高が知れてるじゃない」

「むー……」

自論を却下されて癪に障ったのか、はたまたセレントの発言が的を得たのか、それとも別の理由があるのだろうか。ハクは頬を膨らませて唇を尖らせた。この年代の少年少女にはよくあることだ。

「で、いいかな？ チーム：グレイフェルは放置ってことで」

「僕は構わないな」

「私もそれでいいと思うわ」

ハクはいまいち釈然としない様子だったが、不承不承という体で首を縦に振った。セレントはちよつと苦笑いを浮かべながらも、進み出す。歩きながら、探検隊バッジを取り出してレイナを呼びだし

た。数回のコールの後、ピツという音がして、耳に聞き慣れない声が流れ込んでくる。

『もしもし?』

「……え? あれ? ま、間違い電話……?」

セレントは思いがけず立ち止まった。チームメイトが振り返って彼を見る。いや、確かにレイナに発信した。それだけは覚えがあるから、間違いないだろう。しかし、返答を預けたのは聞いたことのあるようなないような声だった。

『ああ、驚かせてごめんね。君、レイナに用があるのかな? セレント君、だったっけ?』

聞き慣れないが、聞き覚えはある。確か、レイナに同行していたリオル……シアンといっただろうか。彼の声だ。彼がレイナのバツジを使って自分と話しているのか。

『ごめん、レイナなら別件で忙しいんだ。僕が聞いていいのなら言伝しておくけど』

ああ、そういうことか。呆氣にとられていたセレントはようやく思考回路を取り戻す。特に知られていても良い。というより、レイナに知らせれば後々彼女に同行している面子にも行き渡る情報だ。

「あ、お願い……します。えっと、『救助隊チーム：ヴレイフェルがビルの中に乗り込んできてる』って伝えて貰えますか」

『救助隊……?』

バツジの越しにも関わらず透き通っている声が戸惑いの色を帯びる。

「はい。繰り返しましょうか……?」

『いや、大丈夫さ。言伝有難う』

そう言って、会話は相手側から切られた。

25話 二本の線は交わずに（後書き）

うん、シアン達の出番無かったんだよねw
↑

ハーブ

「シアンは声だけ出てたからマシよ……」

チップ

「レイナだって名前出てたじゃん……」

……君達、低レベルな比較は止めようよ；

因みに、アダプターのメンバーの名前の由来のヒントですが……

セレント

「いや、いつの間にクイズ形式になったし（汗）」

ヒントは「歌」と「機械」です。名前を聞いたことがあるという人もいるのではw

セレント

「言っちゃった!? この人今結構大きいヒント言ったよ!」

26話 葛藤。衝動（前書き）

最後の方は暗い……というより、悶々としています。そして、最初の方はg d g d……。お気に入り登録して読んで下さっている方に申し訳ない……；

26話 葛藤。衝動

「グレイフェル？ 何ソレ？ 巷の名物？」

「ああ、僕もそうじゃないかって思ったんだけど、違うみたいだ」
ハーブとチップを戸惑わせるシアンとレイナの発言がその二つだった。ダークネス・ナイトメア社のビルの中に造られたダンジョンの数ある中間地点のような広間。金属色の壁天井の無機質な空間に彼等の声が響き渡る。

「え、えつとね、グレイフェルっていうのは救助隊のチーム名で」
チップが苦笑い混じりに説明した。それにハーブが便乗を加える。
「私達と同じ、世界を救ったってことで有名なのよ」
「そう。で、実力も凄まじいから、伝説の救助隊なんて呼ばれてるんだ」

「凄いのはそれだけじゃないのよ。グレイフェルのチームリーダーがシアンと同じ元人間で」

「……」

ほぼ同時に全く違う内容を喋る二人の説明が終了したとき、シアンも、レイナも、顔いっぱい疑問を貼り付けていた。

「ごめん、要領を掻い摘んで説明してくれると助かるんだけど」

「……二百年前に活躍していた救助隊の名前？」

「ええと、そういうことになります」

そのとき、レイナが眉根に皺を寄せ、意味が分からない、と言いたげな表情を作った。

「じゃあ、二百年も前にいた奴らがどうして今もいるのよ？ タイムスリップでもしたの？」

彼女の視線に巻きつかれ、チップはさながらジャローダに睨まれたニョロトノのように身をすくませた。そんな様子のチップを溜息混じりに見ながら正論を射たのはシアンだった。

「いや、そうとしか考えられないだろう。現に、タイムスリップして現代にいるポケモンがここに二人いるんだから」

「それもそうよね。あはは」

「……ところで、チップ。ピカチュウとシャワーズの二人組って言ったよね？」

「あ、はい。ピカチュウの方はカグラ。シャワーズの方はクレアっていう名前らしいですよ」

それを皮切りに、彼等の会話は一瞬だけ途切れた。しかし、話題が本軸に戻ることで、会話がリスタートする。

「で、そのグレイフェルをどうするかってことだけど……」

「ほつといていいと思うわよ。だって世界を救った探検隊でしょ。私達がいなくても大丈夫だって！」

世界を救った。言葉で表すとたった数文字の根拠で、ハーブの意見はなかなか冷たいものになった。

「僕もそれで良いと思いますよ」

「アタシも……」

それで彼等の意見は一つにまとめられたような気がした。だが、ことは簡単に運ばないものである。

「いや、彼等のところに行ってみたい……と、いうより、彼等に会ってみたい」

「はあ？」

今更何を言いだすんだこのバカリオル、という心中表現を含ませた視線を、レイナはシアンに向かって放つ。

「何よ。異論があるなら言ってみなさい」

「異論、というわけじゃないけど……グレイフェルのカグラっていうポケモンも元は人間だったんだろう？ 同じ立場の者として、会ってみたいと思うよ」

シアンの意見は、的を射ていた。しかし、同じく元人間であるはずのレイナはその意見をばつさり斬り捨てる。

「そんなの、後日に回してもいいでしょうが。今は、目の前の敵を

ぶつ倒すことだけを考えなさい」

「え……」

彼は、反論しようとしたが、彼女の台詞を頭の中で反芻して思い直した。

——そんなの、後日に回してもいいでしょうが。今は、目の前の敵をぶつ倒すことだけを考えなさい

言外に、彼等が無事に帰還すると語っている。敵と戦うことではなく、敵を倒すことを考えろと命じている。それが、レイナの自信である。

生還できるから、今は我慢している。彼女は、そう告げているのだ。

「仕方ないな……じゃあ、後に回すよ」

シアンはそう言っただけで早くも腰をあげた。だが、立ち上がったところでふと静止して、あらぬ方向に視線を投げる。

「……」

「シアン？　どうかしたの？」

ハープが不審に思っただけで訊ねると、彼はえも言わずに右手を口の前に持ってきた。分かりにくい指を一本立てている。静かにしろ、という合図だろう。

数秒、沈黙を保った直後に、彼は言葉を発した。

「敵が来ている。数人くらいかな」

「え！？　何処です！？　すぐ近くですかっ！？」

チップが早口に喋りながら電撃を放つ用意をする。シアンは、これから彼等が進もうとしていた通路を見据えて、そこを指さして言った。

「あの通路……おそらく、死角となる場所が数か所用意されているんだ。その死角に、敵は潜んでいる」

「……見えないのに、どうして分かるのよ」

成程、レイナの指摘は的を射ている。だが、的を射ている意見に、シアンは平然と反論を返した。

「簡単なことさ、波動を使えばいい」

ルカリオ・リオル族に備わっている独自の能力・波動^{チカラ}。その単語は、三人の承知を得るには十分だった。

「それで、敵はどこに何人どんな風に配置されてるのよ」

「えつとね、その曲がり角に六人くらい……イーブイかな？」

「え？」

レイナは、呆けた声をあげた。

「わわっ」

先頭を歩いていたセレントは、目の前に四つの影を見つけて立ち止まった。

「どうしたの……って、敵かしら」

すぐ後ろを歩いていたミクリアが、その影を見とめる。他の四人もそれに気付いた。

「か、隠れよう」

セレントが指示を出すと、アダプターの六人は、向かい側から見
て死角となる影に逃げ込んだ。だが、向こう側から聞こえた声は――

『敵が来ている。数人くらいかな』

『え！？ 何処です！？ すぐ近くですかっ！？』

『あの通路……おそらく、死角となる場所が数か所用意されている
んだ。その死角に、敵は潜んでいる』

彼等の行動が無駄だ、ということを示していた。

「うわわ……ど、どうしよう？ このままじゃ見つかったちゃうよ……」

「……しっかりして下さい。貴方はチームリーダーでしょう」

怯えて冷や汗を流すセレントを、ハクが平淡ながらも激励する。

「そっ、そんなこと言ったって……ん？」

その時、セレントは振るえるのを止めて耳をピンとたてた。という
のも、向こうから聞こえてきた声四つの内二つが、妙に聞き覚え

のある声だったからだ。

『それで、敵はどこに何人どんな風に配置されてるのよ』

『えっとね、その曲がり角に六人くらい……イーブイかな？』

片方は、さつきレイナに電話をかけてそれに応答した声。そして、もう片方は雇い主の声……という感じがする。感じた通りであってほしいが……。

「ねえ、この声ってさ、レイナさんじゃない？」

ルカエトが核心部分を突くと、セレントは曖昧な返事をせざるをえなかった。

「くそ、なんて強さだ……！」

ビルの中のとある一室。青い巨大な鉄の塊にクロスの鋼を貼り付けた四足歩行のポケモン、メタグロスはチーム：ヴレイフェルを相手に、佇んでいた。他に二十人程仲間がいた筈なのだが、彼等は全て殲滅されてしまった。敵の強大な力の前に。

「お前が最後か。捻り潰させてもらおうか」

カグラは右手を前につきだすと、そこから電気の塊を発砲した。
フレミングレールガン
直線電磁砲ではない。単純な、電撃による攻撃。

「電磁浮遊！」

メタグロスは電磁浮遊で浮き上がった。電撃は、彼を掠ることもなくその下を潜り抜けて行く。

「サイコシヨック！」

そして、メタグロスは念動波の実体化である球体を幾つも飛ばす。それはさながら隙間無き弾幕のように思えたが、クレアがその直撃を許さなかった。

「ハイドロポンプ！」

クレアの尻尾から放たれる長大な水の一閃が、色の無い風を一掃する。そして、メタグロスはハイドロポンプに包まれそうになった。しかし、光の壁で急を凌いだ。

「十万ボルト」

その隙にカグラは電気を放った。しかし、メタグロスではなく、頭上を駆け抜ける水の柱に向かって。

―― 何処を狙っている。

メタグロスはそう心の中で嘲笑した。電気が流れて、敵のシャワーズが感電することはないようだが、全く意味のない行為でもある。ハイドロポンプは消え。後には少しの疲労を見せるクレアと、電撃を放つ構えの神楽、光の壁でハイドロポンプを防いでもしかし、完全ではなかったが故にびしょ濡れとなっているメタグロスがまた戦場に剥き出しになった。

「これで終わりかな」

神楽は不敵な笑みを見せて、右手から電気を放つ。メタグロスは光の壁を出そうとして、しかし電気は彼に当たらず、彼の直下を通ることに気付いたためにそれをしなかった。

それが、命取りだった。

バン！ という爆発音がして、メタグロスは爆風に包まれた。

「ぐふあ！？」

大ダメージを受け、電磁浮遊も解除されたために地面に落ちるメタグロス。明滅する視界に、敵の二人が映る。

「カグラの電気を見て安心していたら、それは科学の勉強が足りてないっていう証拠よ。水素は酸素と化合して水になるときに爆発を起こすって習わなかったのかしら？」

シャワーズが嘲りの表情を浮かべる。それを見て、何があったのか理解する間もなくピカチュウがボルテッカーで向かってきた。

「止めだ……っ！」

だが、彼の流れはメタグロスの一歩手前で止まる。その顔には、驚愕さえ葛藤さえあった。

「……」

「カグラ！？」

目を見開いたまま、止めを一向に刺そうとしないカグラ。メタグ

ロスがサイコショックを放つても微動だにしない。

「ぐはあっ……」

弾幕に押し返されて、カグラは地面に倒れ込む。体を鑑みる限り、ダメージはさほど多くないが痛みは鋭いようだ。

「……ユキ」

カグラが何かを呟いた。それは、二文字の言葉だった。だが、それを理解する暇も無くクレアが代わりにアクアジェットで飛び出した。

ドパン、と水が飛び散る音がして、メタグロスは倒された。神楽は、それを悲しげな表情で見つめていた。

「……俺は、どうすればいいんだ」

「何なのよ、いきなり」

メタグロスの下から戻ってきたクレアが神楽を責めるように見つめる。この所、今のような状況に陥ることが多い。気丈に振舞っていたかと思えば、今のように問い詰められ責め立てられ急かされていて困惑仕切ったような表情を浮かべる。こんな風が変わったきっかけと言えば、彼女しかない。

「……何でも、ない」

そう言って塞ぎ込む神楽の脳内では、ある言葉がループして流れていた。

『お主は、記憶を失っておるんじゃない？』

何故だろう。由祈という少女には、隠しておいた筈。そして、もう一つ。神楽の胸を締め付ける言葉。

『何故、お主はそこまでして力を求めるのじゃ？』

「うつつ五月蠅いっ？」

息も荒く、目も血走っている神楽。そんな彼、クレアは励ますように、慰めるように寄り添った。

「大丈夫だよ。由祈ちゃんは、転生する前の貴方を思っているんだ……彼女に悪気は無い……」

「違う、今の俺を否定しているのは由祈じゃない。由祈の傍にいた

頃の俺なんだ……」

彼女が不安げな顔で神楽を見つめているのは、カグラに神楽を投影しているから。由祈の記憶では、彼は今の彼ではないのだろう。やがて、すっと立ち上がるとカグラは部屋の外へ歩き出した。

「行こう……さっさと、このビルの持ち主……——を討つぞ」

26話 葛藤。衝動（後書き）

ダークネス・ナイトメア社は人口ダンジョンですんで、他のダンジョンとの線引きを少し変えています。

しかし……気付かぬうちに逸脱していないか怖いな；

27話 それぞれ、物語は進みゆく（前書き）

シアン

「放置乙ですよ何やってんだこのクソ野郎」

あ、シアンがダークモードだ。やめたげてよお
↑

ハーブ

「焦る気ゼロでしょ（汗）」

だってしょうがないもん。私も忙しいんだもん。

シアン

「そして言い訳乙です」

はいはい（受流） さて、今回シアンの裏人格がちょっと深化します。進化じゃないんだなこれがw

27話 それぞれ、物語は進みゆく

「レイナさんですか……？」

目の前にひよつこりと顔を出したセレントを見て、レイナは振りかざしかけたアイアンテールをひっこめた。そして、シアンの方に向き直った。

「ん？ どうしたの、レイナ」

批難めいた視線を送られて、シアンはちょっと動揺したような表情を浮かべる。

「アンタが敵とか言ってたコイツら、アタシの可愛い部下なんだけど」

「え？」

シアンは目を見開く。そして、レイナの空気の気まずさにちよつとした苦笑いを浮かべた。

「ええと……そっか、それはよかった」

「よかったじゃないわよこの阿呆！ 仲間に攻撃するところだったじゃない！」

「あの……」

シアンに叫びつけるレイナに、セレントが何か言おうとしたが、シアンが何か言うのが少々だが早かった。

「ああ、ごめんごめん。君達もね」

「気をつけなさいよねこのクソ馬鹿。つたく……」

レイナに阿呆だのクソ馬鹿だの罵られているのに、痛みを一切顔に表さない。実はマゾで快感でも得ているのかと思いきや、楽しそうな表情でもない。因みに、後ろのパチリスとチコリータは啞然とした表情でつつ立っている。

「あの、レイナさん、ちょっといいですか？」

セレントは半ばの辟易を覚えながらレイナに話しかけた。不機嫌そうに顔を歪めていた彼女は、途端に優しそうな表情になった。よ

り年下の自分達に優遇するような態度をとっていなければ、彼女がシヨタコンやロリコンの類であるとそのリオルの少年に認識されなかったのではあるまいか。

「何かしら？」

「あのですね。いや、ルカエトに説明させていいですか。それと、通路じゃなくて部屋だと助かります」

「何で僕に話を振るのさ！？」

急な役回りに、ルカエトは素っ頓狂な声をあげる。彼としては、先程手に入れた情報を説明するのはどうということはない。しかし、そこはリーダーであるセレントが説明しても良いだろうと思っていた。

「ん、まあいいや。それじゃ、説明させて貰いますね」

ルカエトがそう言うと、一同はシアン達が元いた部屋へ戻った。

「ちよつと待ちなさい。アンタ達、何を言いたいの？ それとここはPPOの面子以外にも人員がいるのよ。そいつらが聞いても大丈夫なことなのよね？」

レイナはルカエトを制止して、チーム：ブライトの方を鑑みた。シアンとチップが視線で合図を送り合い、ハープが必要なら一旦離れておくと表情で語っていた。レイナはルカエトに視線を戻し、答を仰いだ。

「大丈夫だと思います……っていうより、この会社のことに關してなので、ブライトさんの方も聞いてくれるかな？……アハハ」

チップが、一瞬呆けた顔をして訊ねた。

「僕達のことを知ってるの？」

「その辺じゃあ有名な探検隊ですよ。僕達も探検隊の端くれですから、知ってて当然です」

「ふうん……まあいいか。続けてくれ」

折れそうになった話の腰を、シアンが接着して続くように促す。すると、ルカエトは慌てて手帳を取り出した。そして、幾多の付箋を貼ったページの内から一つを開けて、そこに書いてある文字を読

み上げた。

「まず、このダークネス・ナイトメア社の会長の名前についてPPOから通達があったんです」

正体。その二字熟語を頭に思い浮かべ、レイナ達四人は深刻な顔を作り、一人は喉を上下させた。

「“悪夢の調”^{しんぐ}。そう名乗っているそうです」

「悪夢？」

不意に出た単語に一番早く反応したのはハーブだった。知っているわけではないが、聞き覚えはある。

八年前になるだろうか。図書館の神話の本を捲っていた時に見た。「悪夢を見せるポケモン」

「はい、悪夢です。聞き覚えがあるんですか？」

ルカエトが、若干食いつくように前のめりになった。ハクがさり気なく、その尻尾を後ろから引く張る。

「（自重して下さい……）」

その声は、彼の耳に吸い込まれただろうか。そんなことをハクが気にするか気にしないかのところで、ハーブが答えた。

「小さい頃、図書館で読んだ本に載ってた気がするの。悪夢を見せる伝説のポケモンって」

「種族名は？」

「んーとね……グークリア、じゃなかったかな。ゲールク……でもないや……うーんうーん……」

眉根を寄せて呻き続けるハーブを見ること数十秒。埒が明かぬと思ったのか、シアンはルカエトに向き直って続けるよう求めようとした。だがその瞬間、

「あっ、あれよ！」

ハーブが閃き、シアンの言葉は霧散する。口を開きかけた状態でシアンはハーブの方を鑑みた。種族名を思い出したのか。それなら自分の言葉を邪魔されたのも無駄ではないだろう。

「確か、『ダー』から始まる感じの名前だったわ！」

一瞬、ハーブを果てまで殴って泣いて謝らせたいという、サディスティックな感情が込み上げてきた。だが、大人の精神力でそれを抑えつけて、顔には笑み一杯、こめかみには青筋一杯のフィーバーな表情で訊ねた。勿論、ハーブにその青筋は見えている。よって、彼女が後退りするの無理はないのだった。

「ハーブ、思い出したのはそれだけ？」

「えっ……」

「思い出したのはそれだけ？」

「い、いやええとそんな……」

「思い出したのはそれだけかって聞いてるだろうがとつとと答えろよクソ」

一瞬、裏の人格を曝け出したシアンを見て、ハーブは完全に怯えきってしまった。全力で後ずさって、シエイクされたペットボトルのように全力で首を縦に振る。小さい子供が見ているでしょうというのはシアンの知ることではない。

「話を戻そうか。その悪夢の調というのがどうかしたかい？」

「悪タイプのポケモンで、誰も見たことがない技を使うって言われました」

シアンの人格の豹変に驚かなかったのだろうか。ルカエトは、何も見ていないかのように淡々と喋った。

「ええと……黒い珠をこう、バーンって打ちだす技だそうです」

ルカエトは、効果音を口で言うとともに体でそれを表現しようとした。だが、悪夢の調なるポケモンとイーブイの骨格は違うらしく、シアン達からすればルカエトが地上にいながらに溺れているかのようになしか見えなかった。

「そっか……そいつが何処にいるか……分かる筈ないよね」

シアンが苦笑と共に言った。それで場の空気が緩んだかのように、皆も笑いを浮かべた。だが、丁度まさにそのときだった。

『分かる筈もなく、探しだせる筈も無い』

「え？」

胸の奥深くに響くように、低いコントラバスのような声が聞こえた。

『お前達はここで眠るのだ』

途端、先程までセレント達アダプターが隠れていた通路に、黒煙のような物体が現れた。

「悪夢の調かつ……」

シアンは、銀の針を取り出すと一寸おかずに暗黒星雲として発射した。だが、暗黒星雲が通過する折に黒煙——ダイクネビュラ悪夢の調は一瞬霧散してその攻撃を避けた。そして、また元あった一点に集合する。

『喰らえ……』

悪夢の調から、一本の腕が伸びた。そこから十個の黒球が放たれる。

黒球を受けたシアン達は、傷つくことすらなかったものの、倒れてしまっていて、起き上るのは当分後になりそうだった。

『よろしい。このまま始末する』

傍にいるイーブイの集合から血の色に染め上げようと、悪夢の調は腕から漆黒に燃える爪、所謂シャドークローを伸ばす。

『哀れだな。ここで非業とは』

だが、腕を振り下ろしたとき、それは誰も手にかけることなく止められた。

『何、だ……？』

誰だ、自分の邪魔をするやつは。丁度良い。お前から始末してやる。そう思った悪夢の調に、聞きなれた、しかし背筋の温度を下げる声が響いた。

「やらせるかよ、ダークライ」

そこにいたのは、紛れもなくイーブイの集合の近くで寝ていたりオルだった。顔立ちは眠らせる前と一切変わっていない。しかし、悪意に満ちた気迫と殺気が充満しており、とても同一人物とは思えなかった。それに、今まで気付かなかった。あの顔には見覚えがある。

『……貴様、トーワ＝ベルテローセか』

「御名答。シアンの野郎、俺を丁度いい体にしたてあげてくれたじやねえか。ここで存分お前をぶっ殺せるぜ」

『その前に、貴様は私に殺されている。返り打ちに遭うのが関の山だ』

ダークライと呼ばれたポケモンは、苛立ちに煙の中の目を細めながらもトーワというらしい少年を殺戮に導こうとした。

「言ってくれるじゃねえか。なら見せてもらおうか。俺が怖くて消そうとしたチキン野郎の腕前をよお！」

途端に、トーワの瞳が殺気だった。拳を一振りして、ダークライを壁に打ち付ける。壁はひびを入れられてひしゃげている。ダークライも、黒煙の中で咳き込んだ。

「ほらよお！ 大企業の社長さんはもうお陀仏かあ！？」

トーワはそう言つて、両掌を向かい合わせた。そこに宿る橙色の輝き。かつて、それを使用した少年は神とも呼ばれたポケモンを打ち倒し、世界を平和に導いた。

「くっ……」

ダークライは敗走することにした。どす黒い黒煙が、壁の中に浸透していく。トーワが逃がすまいと気合い珠を放った時には遅かった。

「逃がしたか……しょうがねえな。シアンよ、後は頼んだぜ」

そう言つと、トーワ＝ベルテローセ……否、シアン＝ロビンソンは床に倒れ込んだ。

「めんどくせーやつらだな」

フレミングレールガン

カグラは直線電磁砲でメガヤンマを打ち倒した。加速してどんどん狙いを外しやすくなる敵なので、早めに倒せて良かったと思った。

「それでも、コイツらを倒せないとダークネス・ナイトメアは叩けないし」

隣では、クレアがハイドロポンプでオタチやコラツタ等を一掃していた。

「やるしかないってか？ ああ、奴を倒すのみだ。それこそ俺達がこの時代に来た本当の目的だからな」

ヨノワールに誘われたなんて、ただの口実だ。本当は彼の頼みも一蹴するどころか、話を持ちかけられたその瞬間に抹殺しようと思っていた。

「だから……っ、こんな奴らに苦戦させられちゃあたまらねえよな」
そう言っ、カグラは右手を突きだした。そこから十万ボルトが炸裂する。そして、高速移動で敵のフシギバナの目の前に移動した。雷パンチを打ち込んで、電撃で吹き飛ばす。効果が薄い筈の電気技が大ダメージを与えたように見えた。

「やるわね……」

クレアが薄く笑いながら力を入れる。周囲に発生したアクアリングが相手のハッサムが繰り出したバレットパンチを凌いだ。瞬間に、ハイドロポンプでハッサムを吹き飛ばす。

前方から、ポケモンは怒濤の勢いで迫ってくる。しかし、カグラとクレアのコンビは息を切らさず、勢いの衰えを一切見せつけない。隠しているのではなく、衰えそのものが現れていないのだ。

「はっ！」

目の前から、小型のポケモン達は消えてカグラ達の数倍の大きさを誇るポケモン達が幾多も現れた。しかし、彼等は怯みもしなかった。

「クレア、ハイドロテッカー」

「オッケーよ。いつでもいいわ」

カグラが前方に進み出た。敵のポケモン達は彼の攻撃に対しての構えを見せている。だが、その終わり方を一言で表すなら無駄であった。

「はあぁっ？」

さながら弾かれた種のように、カグラはロケットスタートを切っ

た。一瞬だけ帯電した後、青白いプラズマが包み込み、彼はボルテッカーとなる。その後ろから負けず劣らずの勢いでクレアが尾からハイドロポンプを発射していた。

「まずい……っ」

危険を察知したらしいボーマンダが流星群でいくつも大打撃を与えたが、電気タイプと水タイプの最大級の技組み合わせた威力では到底の底から敵わない。

豪勢な悲鳴と轟音がクレアの耳に轟いた。

「あーあ、またカグラと落ち合うのが大変だなあ」

通路の果てまで行っただろう。このまま歩いていればいつかは合流できるだろうが、そこまで歩くのもまた面倒だ。

「ま、しょうがないわね」

クレアはいやいやながら歩き出した。途中で寄り道してカグラを困らせようと画策し、傍にあった通路に入り込んだ。その先に待っていたのは――

「え？」

倒れている、十人程のポケモン達、イーブイ数人、パチリス、チコリータ、リオル……。

「クレアの奴、遅いな……」

カグラは貧乏ゆすりをしながらとある大扉の前に立っていた。

ハイドロテッカーにより飛んでいった先には、大きな門があった。

ここは人工とはいえダンジョン。門など存在しても、意味が無い。

つまり……。

「ダンジョンの出口、と言ったほうが良いかな」

そう言っただけカグラは後ろを顧みた。待っている少女は未だに来る気配がない。カグラは救助隊バッジを手に、クレアと連絡を取ろうとした。相手は数秒経って応答した。耳に流れ込んでくる声には、幾らか焦りという感情が刻まれていた。

27話 それぞれ、物語は進みゆく（後書き）

五千文字も書いたのはいつ以来かな。マジで文字数表示の四桁目に五が出た時は驚いた。

シアン

「いつもは二千文字止まりですからねえ」

さて、次の更新はいつになることやら。

シアン

「今週中にやらないと気合い珠一発撃ちます。来週も更新できなかつたらハーブにリーフストームを頼みます。次はゼアンさんのフルボッコ……」

何その処刑メニュー；

さて、今回は文章の中に鏡花水月法というものをぶち込んでみました。勿論、私のことではありませんよ？w 鏡花〳法というのはですね、直接その物事を説明せずに、はつきりその姿を感じ取らせる表現法的一种です。元々漢文で使われるそうなのですがね。

さて、件の鏡花〳法を使ってある文章を当ててみて下s（止められえ、お時間がある方で結k（処刑 はい、それではこの辺で。

シアン

「コイツ、処刑されたのに生きてるよ。すげー」

28話 加速する果ては終焉（前書き）

おっし、7000字越したぜ。しかし反動で話はかなりカオス状態になってしまいました。後で時間を見て編集しておくかもです；

28話 加速する果ては終焉

「鍵をかけている？ 俺にそんな小細工以下のままごとが通用すると思っただのか」

カグラは目の前の扉を押した。しかし、その分厚い鉄板は動くことを拒否した。その意味するところは、カグラも言った通りこの扉に鍵がかかっていること。だが、それで引き下がる伝説の救助隊のリーダーではない。彼は右手を前に突き出した。そこに電撃が蓄積される。

「ハアアッ！」

空を揺るがすような爆音が響いた。カグラの目の前には壁に開いた穴がぽっかりと口を開けていた。爆撃の余韻のように、扉だった鉄板はひしゃげカラカラと乾いた音をたてて、儚い容姿で転がっていた。穴の向こうに広がる部屋に足を踏み入れたカグラ。部屋の中は殺風景で、文字通り何も無い。

「……ダークライ、姿を現せ。この部屋を吹っ飛ばすぞ」

カグラは常よりいくらかも声色を低くして脅しかけた。数秒の沈黙の後、部屋の壁や床や天上が若干薄黒くなる。カグラの知る範疇ではないが、シアンの所に現れた黒煙が壁から這い出るように姿を現した。

カグラは手を握り、雷パンチの用意をする。その耳に、自分の名を呼ぶ声が染み込んできた。

「これは……どういうことだ？」

シアンは戸惑っていた。あの黒い煙が放つ黒球を受けた。そう思ったのだが、気がつくと自分は知らない場所にいる。周囲には、ハーブやチップ、レイナと彼女が率いる探検隊もいる。そして、目の前には大きな門。ここはダンジョンである故、こういったイレギュ

ラーなものがあるということは、この扉はダンジョンの出口でつまりダークネス・ナイトメア社の長の居場所に繋がっている可能性が高いということだ。

「開けてみるか……」

そう言つて、扉に近づいたシアンはしかし、何か思う前に脳内を思考の空白の一色に埋めるまでに拡大された。

「シアン、あつちから何か来るわよ！」

ハープが、幾分切羽詰まった様子で通路の闇の奥を指している。シアンの耳には、そこから濁流のような轟音が雪崩れ込んできた。

「な、何だ？」

「危ないですつ、向こうに逃げましょうよ」

セレントが、濁流音が聞こえるのとは逆の方向を指していた。チーム：アダプターの他のメンバーは既にそちらの方へ走っている。

「そうするのが賢明かしらね」

レイナが、アダプターに続いた。ぴよこんぴよこんと揺れながら走っていく。

「逃げ場は向こうしかないなら、そうするしかないけど……」

ハープもチップも走りだしたのを見て、シアンはその選択が本当に賢明なのかどうか考えた。しかし、刻一刻と濁流が近づいているのを耳で感じ取ると、彼も同じ行動をとらざるを得なかった。

「何処まで逃げればいいんだろう……」

とはいえ、不幸にも濁流はすぐそこまで迫っていた。ちらと後ろを振り返り、彼は自分の判断能力の無さを一瞬だけ後悔した。誰が仕掛けたかもわからぬ濁流に飲み込まれて失敗などとは……。

そう思ったときだった。後から思い返せば、彼はあのとき運に味方されたと思つたやも知れない。後ろで風船が破裂するような高い音が響き水が飛び散った。そして、大型ポケモンらしきシルエットが後方に流れていくのが見えた。

「な、何ですか……？」

チップが後ろから走ってきた。幾分驚いているようにも見えるが、濁流に巻き込まれなかったことに対する安堵も垣間見える。

「分からない。ただ、束の間のところでは助かったみたいだ」

時がゆっくり変化するにつれて、ハーブ、レイナも戻ってきた。アダプターが最後に戻って来たとき、シアンは初めて動きを見せた。ゆっくりと手をあげ、眼前の一点を指さす。そこには、一人のピカチュウが立っていた。さっきまでシアン達が観察していた扉を観察している。

——あれ？

ハーブは、そのピカチュウに見覚えがあると思った。かつて星の停止を防ぐとして、磯の洞窟に繰り出さんとしたまさにその時に邪魔されたことがある。ピカチュウとシャワーズの二人組に。

「あっ」

それを見たチーム：アダプターの、誰ともんと見当つかぬ者が声をあげた。彼かも彼女かも分からぬ者に、計九対の瞳が向けられる。

「どうしたの、何か思い出したのかしら？」

レイナが一寸後に口を開く。すると、ファースリンが答えた。さっきの声の主は彼女であった。

「……件のチーム、グレイフェルのピカチュウです。でも、何で一人なの……」

ファースリンは訝しく思うことを表情に表した。だが、それに対する答が示されるまでもなく事態は運ばれていく。ピカチュウは扉を開けようとしたが、それは錆びた金属音を奏でる以外の反応を示さなかった。それが何を意味するのか理解したらしく、ピカチュウはこう言って右手を掲げた。

『鍵をかけている？ 俺にそんな小細工以下のままことが通用すると思ったのか』

刹那、雷撃が放たれた。耳どころか、脳をも割きそうな号令が轟いた。ピカチュウとは思えない力の技を受け、扉はひしゃげて力無

く横たわった。

「な……」

彼等は、絶句した。しかし、次の瞬間に闇に包まれた。

「大丈夫！？ 早く起きて！」

一種の揺れを感じ、チップは夢と現の狭間を漂っていた。

「ん……」

しかし、意識が漂っていたのは儚い間隙。現に引き戻され、意識も明瞭になった。そして、揺れもはつきりと感覚に掴めるものとなり、今こそ自分の腹に手らしきものが添えられているのが感じ取れる。今度こそ、目を見開く。視界を覆い尽くしていたのは青い顔を持つ少女。シャワーズという種族だった。

「うわぁ！？」

チップは寝ころんだままに呆けた声をあげた。それにより、シャワーズの少女はチップの意識の有無を正確に認識したらしい。

「よかった。君達、どうしたの？ ここで皆倒れ込んで……」

そう言われて、チップは周りを見渡した。そして、背筋に氷柱が入り込んだのはシアン達が倒れているのを確認した後のことだった。

「う、嘘！？ シアンさん、大丈夫！？」

「焦らないで。君が大丈夫だったから、大事に至っている可能性は低いわよ」

シャワーズは若干心臓の鼓動を速めながら、しかし表面上は冷静を作り上げてチップを制した。そして、彼の反論を待たずしてシアンのもとまで歩いていった。そして、チップにしたのと同じように腹に手を置いて揺らし始めた。

「ちよつと君、起きて」

「う……ん？」

チップから見た時の彼女の起こし方は、若干粗雑だった。すなわち、乱暴と呼んだ方が正しいかもしれぬ。呻き声をあげて、シアン

はよろよると起き上った。下を向いて、右手は頭を掻いている。そして、頭を上げてシャワーズと目を合わせた。一瞬目を見開いたが、すぐに元に戻った。数秒後、口元に笑みを浮かべて言った。

「君が起こしてくれたのか？ 有難い。助かった」

慌てもせず、端折りもせず、整った物腰の態度。シャワーズは若干戸惑ったようだが、ただ「どういたしまして」と言っただけだった。

そのようにして、全員が起き上った。レイナやセレントなどは起き上りざまにシャワーズに礼を言うのだが、ハーブやアダプターの面々などは目を覚ました瞬間にまず周囲を見渡すのみで、御礼など二の次だった。

「もう一度言わせてもらうよ、有難う。それで、君は誰だい……？」

シアンの上に、シャワーズの少女は何も答えなかった。ハーブとレイナ以外が、その沈黙に不可解を感じていた。レイナが、シアンの鈍さに痺れを切らして注意した。

「相手から名前を聞く時は先に自分から名乗るのが常識でしょうが。考えなさい馬鹿」

「あー……えっと、僕はシアン。シアン＝ロビンソンだ。君は誰かな？ あ、因みにこの二人はハーブとチップ」

「ちよつとシアン！ 因みにって言い方ないでしょ！」

「僕達がおまけみたいな言い方じゃないですか！」

瞬間、ついでのように紹介された二人の抗弁がシアンに殺到した。だが、当然の結果というか、分かりきったことというか、シアンはそれに頓着はしなかった。

「で、君の名前は？」

「……私はクレア。君達、救助隊チーム：ヴレイフェルって聞いたことはないかな？」

相手とのテンションの間に断層を感じ、少し戸惑っていたクレアだが、何事も無かったと思い、名乗った。それに対し、セレントというイーブイが応答を見せた。

「伝説の救助隊ですよ」

「御名答よ。君達は探検隊よね？ 何か事情があつてここに来たの？」

クレアが語りかけながら、シアン達十人の顔を一つ一つ見ていった。智的な表情のリオル、凜々しげな雰囲気を纏ったチコリータ、のほほんとしているパチリス、幼げなイーブイの少年少女に、彼等の上司のように前に立っているむっつりとした顔のイーブイ。こんな大人数で、彼等は何か目的があつてここに来たのだろうか。そう考えていると、シアンと名乗ったりオルが言った。

「このビルの主に会うためだよ。実質はこの会社を潰す為だけだね」
さらに、現実を言ったシアンを見て、クレアは言った。

「そう。なら君の言うところの主の正体を教えてあげる」

少し、今まで名前も知らなかった相手に対して無警戒ではないだろうか？ そう思われるだろう。しかし、クレアは本来ポケモンを無闇やたらと疑う性格ではない。寧ろ、相手に心を開くことで相手との疎通を図っていた。それが自分に牙を剥いたこともあったのだが。

「ダークライ。闇を好む者にして、悪夢を司るポケモン。聞いたことないかしら？」

「あつ、そうだ。ダークライだよ！」

途端、ハーブが謎が解けた時の晴れやかな表情で言った。

「ハーブ、君が喋るとほだけかけていた紐がより複雑に絡まるから今は黙っていてく」

「なんでも、当たった敵を必ず眠らせるっていう技を持つてて、それでそのポケモンの傍で眠っているポケモンに悪夢を見せるんだつて！」

シアンが、話の渦中から徐々に外れつつある。しかし、少女二人は気にしない。

「よく知ってるわね。でも、より知っておくべきはその容姿よ。頭から伸びる煙のような白い房に肩周りの赤い襷、そして真黒な体と

碧眼……」

「え？」

シアンは、クレアの言葉、『真黒な体と碧眼』に反応を示した。さつき自分達の目の前に現れた黒煙。奥に見えた体らしき部分は黒。そして、時折光っていた瞳は青い。まさか――

「レイナ」

「うん、アタシもそう思う……」

シアンとレイナは言葉数少なく、疎通をとり合った。二人とも同じことを考えていたとそれで分かった。レイナは、それが何となく嬉しく感じられたが。そのとき、ミクリアが何か言った。

「ねーセレント、言った方が良いんじゃない？」

「そうだね……。あの、レイナさん。そう思う、じゃなくてそうみたいですよ。さつき僕達が喰らったあの技、ダークライの技です」

そこに、セレントが口を挟んだ。シアンとレイナは、彼の顔を見て、言外に説明を仰いだ。

「ええとですね、ダークボールって言って、ハーブさんの説明にあった通り当たった相手を眠らせるもので……」

「ちよつと、セレント、あのポケモンさん話してる」

ルカエトに言われて、セレントは口をつぐんだ。

「あれ君知ってるの？　っていうか、ダークライに会ったみたいない言い方ね」

「ああ、さつき……」

それからシアン達はクレアに、彼女に揺すり起こされるまでの経緯を話した。謎の黒煙に出くわしたこと、それがダークライであるうということ、そして不思議な夢を見たこと――

夢のことについて聞いたとき、クレアから口を開いた。リアルタイム

「時々だけだね、ダークライに眠らされた時に現実で起こったことを見せられることがあるの。彼の悪夢の一種かもしれないわね。で、貴方達……ピカチュウが壁を突き破ったって言ってたわね？　ひよっとして……」

クレアは一息でそこまで言い終えると、目を伏せて思考の輪廻を展開し始めた。シアンが何事かと思っただけで、考えは終焉に達して、やがて踵を返して走りだした。

「えっ？」

「君達、ダークライに会いたいなら私に着いてきて」

前方から跳ね返ってきた答えはそれ一つ。何が起こったか分からず、シアンは茫然とつつ立っていた。それはレイナもセレント達もチップも同じ。ただ一人、ハーブが走りだしながら叫んだ。

「早く行こうよ。ダークライに会えるんでしょ！」

一瞬迷いから放たれ、シアン達は走りだした。

「木下神楽、待ってたぞ。フフフ」

目の前のどす黒い物体は、カグラの姿をとらえると、歓喜を表すかのように黒煙から浮かび上がる碧眼を細めた。相手は自分を打ち倒すかもしれない天敵であるのに、まるでその天敵の来襲を待っていたかのように。ダークライ、と思いきポケモンを包んで、闇色の煙が蠢く。周囲は、殺風景な石畳の部屋。吹き抜けの天井から数多なる灯りが降ってくる。それは、何故かダークライの不気味さを誇張していた。

「待っていたとは随分と暇なやつなんだな。俺を打ち倒す為の対策をしていなかったのか？ ふん、御前の雑魚の手先で充分だなんて思うなよ」

カグラは、口の端を吊り上げた。悪鬼羅刹がこの世に降臨していれば、ダークライは同じような表情を見ただろう。可愛らしいというピカチュウ族のアイデンティティを、彼は崩しかけていた。

「宣告しよう。俺はお前の会社を潰す。同時に、御前の野望も潰してやる……出来ないと思っただけなら、証拠を見せてやる」

カグラは、ダラリと下げられたままだった右手を、真横に上げた。そこに一筋の光が燈ったかと思うと、光の矢のように、電撃がそこから飛び出した。その先にあった壁の一部が崩れ、それを構成して

いた岩が、空を飛翔する。崩れた壁から見えた碧空を舞うものもあった。

だが、それを見てもダークライは煙に覆われた表情を露とも変えないとした。否、変えるに値しない。その程度の威力で自分に勝てると妄信する時点で、既に木下神楽は自分より劣っているのだ。

「ふう、甘いな。私からすれば石ころを投げた程度だ。その程度で私に挑もうと思ったか」

だが、顔に冷笑を貼り付けたのはダークライとカグラの両者であった。カグラとしても、あれは石ころを投げた以上に弱い。もっと工夫をすれば、意表を突いた攻撃などいくらでもできる。

だが、それとてダークライの予想済みの事象内に入っているのだらう。

相手の手の内の読み合いと、騙し合いは無言で継続される。ダークライは気付いているだらう。カグラの右手には、銀の針が握られていた。勿論、電気が蓄積されている。

「かかってくるが良い。どうせ敗北という結果に終わるだらう」

ダークライの挑発の言葉は、カグラからは稚拙に映った。だからこそ自分はそんな言葉をかけるつもりはない。その代わり、彼の言葉に対する返事を投げかけた。

「なら、そうさせて貰おうか！」

迅速に振り下ろした右手伸びるのは、フレミング・グレルガン 黄金色の軌跡。直線電磁砲というのは、電気の力で何処までも何処までも伸びていく銀の針のことである。さながら永遠のように。

「甘いっ！」

だが、ダークライが右手を横に薙ぐことでそれは銀色の棒も同然となる。銀の針は上に舞い上がり、重力に従って地面に落ちるとキンという透き通った金属音をたてた。

「これで分かっただらう、私には勝てぬと。では、こちらからいかせて貰うぞ」

ダークライが、右手からシャドーボールを放つ。カグラは十万ボ

ルトで迎え撃った。漆黒と黄金が混ざり合い、衝撃波が部屋に蹂躪する。その時、とある少女の聞きなれた声が複数の足音を携えて耳に入ってきた。

「カグラ！」

「あれが、ダークライか……」

肩越しに見えたのは、クレア。そして数人の見知らぬポケモン達だった。その内の一人であるリオルは、ダークライがいるであろう辺りに視線を投げかけて、深刻な表情で表している。

「クレア、そいつらは……？」

「後ろ向いてる暇はないわよ」

無表情のまま淡々と喋るクレアの注意され、カグラは渋々前を向いた。黒煙を解き放ったダークライは、両手を下にダラリと下げ、ゆっくり上下している。だが、細めていた碧眼を、さらに糸に近いサイズにした。

「チーム：ヴレイフルに加え、ブライトまで参上するとは、私はついているようだな。邪魔な探検隊を二組も屠ることができるわ」
シアンの背筋に、衝動が走る。ハープが、緊張した面持ちを見せる。

「出て来い」

ダークライはそう言って右手をあげた。辺りは暗闇に包まれた。

「うわ、何だよこれ!？」

「リーダー、危険です……」

アダプターのカイティスとハクがそれぞれ言った。

「カグラ、君の電気で照らせない？」

「朝飯前だ。……っ!？」

カグラはクレアに言われるまでも無く周囲を照らすうとして、留まった。いや、照らす行為を邪魔されたのだ。なぜなら、すぐに電気はついたから。

「しまった、奴の工作か……」

「工作とは、稚拙に言ってくれるな」

シアンとダークライの台詞が飛び交った。シアンの顔は苦渋に、ダークライの顔は愉悦に満ちている。

他の面々は、周囲を見るなりにシアンと同じ表情をせざるを得なかった。

ブーバーン、ボスゴドラ、ムウマージ、マグマッグ、ドサイドン、アーボック。彼等を取り囲んでいたポケモン達の種族名はそれらだった。

「工作以外に巧みな表現はないと思いますけどね」

シアンは無理に不敵な笑みを作りながら、カグラの横に並んだ。丁度、ダークライと対峙する形になった。カグラと共闘した方が有利であるという無言の表示だろうか。クレアはボスゴドラに尻尾を構え、ハープはドサイドンを睨めつけた。チップはムウマージを見た。レイナとアダプターも、マグマッグとアーボックを野放しにした。ようとはしなかった。

「悪夢の調、ここで打ちとって見せましょう」

「ああ。お前、俺に遅れをとるんじゃねーぞ」

「分かりました」

シアンは内心で苦笑いを浮かべながら、構えをとった。

28話 加速する果ては終焉（後書き）

「分かりにくい」「文章が中途半端に文学的」「無駄に長い」

などなど、色々批評はあるかもしれませんが；

シアン

「遂に悪夢の調が現れましたね。どうなるんだろう」

ハーブ

「心配ねえ……作者の実力も考えると終わらない気がするわ」

あーあー聞こえない聞こえない↑

さて、次の次辺りでダークネス・ナイトメア編は終了させたいと考えております。それでは、この辺で。

29話 紆余曲折（前書き）

時間はかかったけどなんとか出来あがりました。

シアン

「遅っ。絶対サボってただろ」

ち、違うんだ！ 書きだしが思い浮かばなかったんだ！ おらは悪くっ）

シアン

「なんか色々ありましたがこの章もそろそろ終わります。では、29話どうぞ」

29話 紆余曲折

戦いは始まった。

ハーブが対峙するドサイドンにマジカルリーフを放つ。虹の七色に輝く若葉達がドサイドンに突き刺さった。ドサイドンはかわせなかった。マジカルリーフが必中であつたからだ。

草タイプのその技は、岩タイプと地面タイプにはダメージは多大である。しかしながら、それを喰らったドサイドンはマジカルリーフが雨粒であるかのごとく無傷である。ハーブは苦い表情を作った。しかしながら、諦めることはない。首の付け根から二本の蔓の鞭を伸ばした。それを叩きつける。ドサイドンにはではない。床にだ。正確には、ドサイドンの足元の床に。

ガボン！

元々建物が岩できていて、更に重量級ポケモンのドサイドンが上に乗っているの、後少し衝撃を加えれば崩れるだろう。ハーブはそう踏んでいた。そして蔓の鞭を叩きつけたところ、床は崩壊を起こしすらしなかったもののひびが入り、ドサイドンはよろけた。

——チャンスッ！

ハーブが勝機を見出し更にマジカルリーフを振るおうと頭の葉を振り翳したところ、床ではなく彼女の勝機こそが崩れた。ドサイドンは拳を床に打ち付けた。叩きつけた所の地面が割れ、その余韻のように大きな割れが彼女の方に走って来た。

「っ……」

ハーブは突然のことに戸惑いながら辛うじて横に跳躍した。地割れによる衝撃が右足に伝わり、痛覚が脳を蹂躪する。ハーブは痛みを抑えながらその蹂躪を打ち払い、再びドサイドンを睨めつける。そして、足に鞭打ってドサイドンに向かって跳躍した。蔓の鞭が、伸びる。ドサイドンは拳でその蔓の鞭を抑えた。

体格差からも分かるように、ドサイドンとチコリータが押し合っ

た場合、ドサイドンの方が圧倒的に有利である。故にハーブはじりじりと押されていく。後ろではアダプターが戦っている。あの闘争に巻き込まれるのはごめんだ。今使すべきだろうか。ソーラービームをも凌駕するあの技を。ドサイドンはどうなるだろうか。倒れてくれればいい。迷う時間は永くなかった。力が集束していく。頭の葉っぱが瑞々しい艶を放つ。うち出でた力による効果だろうか。淡い翡翠色の光を放ち始めた。いや、光の片鱗が葉っぱの周りを公転していると表した方が正しいだろう。それは、さながら小さな嵐のようだった。くるくると、輪廻のように回転する。光の粒の公転はその円周を段々と広めていく。よく見れば、その光はマジカルリーフのような葉っぱだった。だが、先の通り嵐のように回っていた。ハーブとドサイドンの回りに緑色の風が吹き荒れる。彼女の表情は、意外にも平静だった。

> i 3 3 8 6 0 — 1 8 3 7 <

鮮やかな若葉の嵐。綺麗に殺伐とした轟音は狂おしく舞い、ドサイドンの硬い皮膚を肉を裂いていく。葉がドサイドンの体の表面や内部を走る度に彼は痛み顔に顔をしかめた。その顔は茶色がかった褐色なのだが、徐々に血の気が引いてきているのが分かる。

「グ、オオオオーツ!!」

ドサイドンの周囲から砂嵐が吹き出した。それは激しく渦を巻き、リーフストームを跳ね返す。そんな勢いを見せていた。

だが、ハーブの力が拮抗に勝利を見せた。リーフストームは砂嵐をも吹き返した。ドサイドンの断末魔は遂に響き、巨体が床に倒れ伏した。

セレントを始めとするアダプター六人。彼等はアーボックと戦っていた。勿論、武器はチームワークである。電光石火で飛んでいっ

たセレントをハクがバトンタッチで入れ替え、思いもよらぬ方向からの攻撃に切り替える。不意を突かれたアーボックを、電光石火が直撃し、カイティスの目覚めるパワーが炸裂する。

「ルカエト、後ろ！」

「分かってる！」

ファアリンの叫びにルカエトが反応し、アイアンテールを打ち付けた。アーボックはそれを受け、ルカエトの存在を確認するとポイズンテールを振るった。しかし、それはミクリアのシンクロノイズとぶつかって、ルカエトを打ちとることはできなかった。

「くそが！」

アーボックはやけを起こしたのか、辺りにヘドロ爆弾を撒き散らそうとした。すると、ハクがチップとアーボックの立ち位置をバトンタッチで入れ替えた。

「え？」

突然の事態についていけないチップが周囲を見て呆けた声を上げる。セレントがチップに説明しようとした時、隣から叫び声が轟いてきた。

「きゃあああーっ！」

「す、すまん……」

そちらを見ると、ムウマージの女性が蹲っていた。茶色の固体と液体の中間の形状の物体が彼女についているのを見ると、どうやらアーボックのヘドロ爆弾に被弾したらしい。アーボックはすまなそうに頭を下げている。ハクが、楽しそうに顔を歪めた。どうやら同士討ちを狙いとしていたようだ。そこに、チップの十万ボルトとファアリンの目覚めるパワーがヒットした。

レイナは身動きがとれなかった。マグカルゴの岩石封じが、その体を拘束して動くことを許さなかった。

「ぐっ……」

「お嬢さん、もうお終いかなあ？」

マグカルゴの嘲笑が耳に刺さる。普段勝気な心情でいる彼女にとつては耐えがたい屈辱だった。脱出しようともがこうとしても、四肢の一つも動かせなかった。

「ハッハッハ。つまらん女の子だったねえ。可愛いだけが取り柄かい？」

レイナは顔を真っ赤にして力み、岩から脱出しようとする。しかし、疲労がたまっていていだけで。岩に変化はない。

「これで終わりかな」

周囲からまったく喋り声は聞こえないのに、目の前のマグカルゴだけは御託を並べる余裕さえある——それが、レイナにコンプレックスを抱かせた。自分は、弱いくせに何故頂点に君臨する神のように振舞っているのだろう。天井から幾多の岩が落ちてきた。彼女の突き崩された自信の破片が落ちて来たようだった。

「きやあああ！」

彼女の叫喚は、次第に降り積もる岩に吸い込まれていった。岩石封じが割れ砕け、岩雪崩の砲丸がレイナの体を穿つ。やがて彼女がいた所には、一つの岩山ができていた。レイナは巨大ないくつもの岩の塊に

押し潰されそうになりながら、なんとか脱出を試みた。だが、彼女の動かすエネルギー量より、岩石が床に引き寄せられるエネルギー量の方が大きかった。

「う……ぐ……」

呻くレイナの耳に、炎が燃え盛るような音が滑り込んできた。マグカルゴにとどめを刺されるのだろうか。だが、熱を感じるより早く断裂音が鳴り響いた。沈黙のみを耳は感じ取る。岩の向こうから聞き覚えのある声による会話が聞こえる。チップとアダプターのリーダーか。役に立たない自分をすくってくれたのだろうか。頭の上を蹂躪する岩が、退けられたのはそれから少し後のことだった。

「……レイナさん、大丈夫ですか」

ハクが左前脚で岩をどかしていた。ファースリンがレイナの前足を

掴んで引つ張り出す。

「あ、ありがと……」

レイナは尻尾や前足で自分の体をはたきながら礼を言っていた。恥ずかしさが先行し、ちよつとだけ口調が曖昧になる。件のマグカルゴは白目で横たわっていた。体は若干石化し、所々にひびが入っている。

「……倒れてる……わよね？」

「うん」

レイナの間に、チップが答えた。レイナは少し嬉しそうな、しかし哀しそうな笑みを浮かべる。

ハイドロポンプがクレアの尻尾から放たれる。ボスゴドラはジャイロボールでそれを跳ね返す。ジャイロボールは水色の直線、所謂ハイドロポンプと激突し、消失した。

「小娘、タイプ相性で勝るからって俺に勝てると思うなよ？」

ボスゴドラは言いざまに鉄の棘を投げつけた。クレアは尻尾を一振りしてアクアリングを展開した。アクアリングが、鉄の棘の壁となる。

> i 3 4 4 2 5 — 1 8 3 7 <

「そうね。相性の良し悪しで勝敗は決まらないわ」

嘲笑と苦笑いの中間の表情がクレアの顔に現れる。彼女は眼を瞑った後、片目だけ開けて、上目遣いにボスゴドラを見つめて言った。「でもね、相性が良いと言われるからにはそれなりの力量差があつて当然なのよ」

そう言つて、クレアは濁流を引き起こした。濁った水の洪水が、ボスゴドラの立ち位置を侵寇する。ボスゴドラはそれに対して破壊光線を繰り出した。だが、それを見たクレアは歡喜に震えあがつた。

——これは嬉しい誤算ね！

クレアは濁流の勢いを最大限まであげた。破壊光線と濁流の激突が、水しぶきを起こす。その中をクレアは、ボスゴドラに向かって走った。水の飛沫が顔に当たるが、遺伝子の構造が水分子に近い彼女にとつてはなんら差障りも無い。ボスゴドラは、クレアが走ってくるのを見て恐れだけは抱いたが、破壊光線の反動故に動けなかった。クレアが尻尾を構え、その先端からハイドロポンプを発射する。水は、拳のようにボスゴドラを討ち飛ばした。

その数秒後、カグラとシアンとダークライ以外のポケモンは皆倒れていた。

「……テメエ、手下のポケモン共に起爆剤を仕込んでおいたな？」

「倒した瞬間に、貴方のダークボールが発動した倒したポケモンを眠りに誘い込む、という魂胆ですか」

カグラは銀の針を、シアンは水平斬りを構えて、背後の光景を視線だけで確認した。ダークライは二人の間に無言で肯定した。今まで膠着状態と戦闘状態が数回も繰り返されてきた。シアンとカグラのコンビは多少なりとも息を合わせてきた。

フレミング・レールガン

カグラが直線電磁砲を放つ。ダークライはそれをシャドークローで弾いたが、シアンが水平斬りを伴ってダークライの眼前に迫っていた。ダークライは直線電磁砲の対処をした後なので、ロクな抵抗もできない。閃光は横に振るわれて、しかしながらダークライの首が落ちることはなかった。彼の頭から伸びる白い房が、頭を守るように渦巻いた。水平斬りは弾かれてダークライの体の中を通ることはなかった。その状態のままに、ダークライはシャドークローを振るった。シアンは同じくシャドークローで対抗し、技がぶつかり合った瞬間にダークライの腹の部分を蹴り飛ばしてダークライと距離をとった。

「シアン、遅れをとるなよ。アイツをぶち殺す」

「了解です」

カグラは高速移動で肉薄し、雷パンチを打ち込んだ。それはさながらいつまでも降り注ぐ無限の流星だった。シアンはカグラに加勢すべく、彼の横まで走っていくと拳をいくつも繰り出した。それはダークライの手に止められた。しかし、それ以上にシアンを焦らせる出来事があった。

「うつつ……」

「？ カグラさん……ぐあっ！」

シアンはダークライの手で発生した黒い爆発に飛ばされた。床を二、三回ゴロゴロと転がってなんとか立ち上がると、ダークライが蹲っているカグラにシャドークローを振りおろそうとしていた。

「やめろっ！」

シアンは弾丸のように飛び出して、振り下ろされるその腕を横から蹴りつけた。シャドークローはカグラの傍の床に突き刺さった。その隙に、シアンはカグラをダークライから突き放した。カグラはまだ蹲ったままだった。

29話 紆余曲折（後書き）

何この微妙な終わり方——という声も無きにしもあらずでしょう。しかしこれ以上文字を書くのは最早苦痛なのです↑↑

予定では次話がダークネス・ナイトメア編の最後でした……が、それがどうなるかも分かりません。唯一言えるのは次話が最後じゃなくなつて（ry

と、いうわけでそれではっ。

30話 伝説と伝説の交叉（前書き）

更新遅れましたホントすみませんんんんんが。

そして今回はえらく長い。そして似たような表現をいくつも重ねてしまったため非常にグダグダ。ホント、この小説をお気に入り登録して下さった人たちの期待に沿える作品を書かねばならぬと思います（汗）

30話 伝説と伝説の交叉

走馬灯。それは、自分が物心づいたときから現在までの記憶を辿っていく、いわば記憶の道のりであると言われる。だとすれば、カグラが見ているものは走馬灯だろうか。

カグラの瞳には、彼が今ここにいる瞬間を基点として、記憶がずっと過去へ手繰り寄せられ、クレアと出会ったところで最初へ戻る輪廻が映っていた。

「うつ……うぐあぁっ！」

カグラはあげたこともなさそうな絶叫を口からぶちまけた。その瞬間、澄んだ声による問いかけが頭の中で木霊した。

『お主、本当はワシのことを覚えておらんのかな？　ワシを傷つけまいと、覚えているフリをしておるんじゃない？』

それは山彦のように何回も共鳴し、その度にカグラの精神はガリゴリと削られる。違う、違うんだ。お前がどうのこうのじゃない。

俺は、俺は——！

「……ぐら……さん、カグラさん！」

途中から聞こえてきた声は、カグラを苦境の深淵から引き戻した。どう、した……？

カグラが頭をあげると、シアンが水平斬りでシャドーボールを斬り飛ばしながら自分に呼びかける体勢をとっていたのが目に映った。自分が呆けている間に、彼は戦い続けていたのか。だとしたら、申し訳ないだけでなく伝説の救助隊の顔が立たない。

「……すまん」

「謝る必要はないです。しっかり立って下さい」

シアンは若干呼吸が踊っていたものの、それも準備体操の一環であるとはかりに順調な口調を閃かせていた。恐らく、互いに間合いを見計らいながら機会あらば攻撃というスタンスを両者ともとっていたのだろ。カグラは一瞬目眩を覚えながらも、両足でしっかり

と床を踏みしめた。立ちざまに、右手をダークライに突き付けて電撃を放つ。

「うわっ!？」

青白い束がシアンの耳の房を掠めた。バチっという音が聞こえ、耳の房が熱を発す。

「あ、危ないな……」

シアンが流し目でカグラの方を見ていたが、すぐにダークライに向き直った。ダークライは横にずれることでカグラの電撃をかわしていた。電気の通った後の軌跡が、その残響のようにバチバチと電気を帯びている。電撃がぶつかった壁は日々が縦横斜に走って所々外が見えている。

——まだ、火力は充分じゃねえな。ちつきしょう……。

ピカチュウという種族柄、仕方ないことだが特殊攻撃力はあまり高くない。どんなに力んでも、ダークライにはまだ一歩、及ばない。そう自分では思っている。

カグラの鞆の中には、電気のジュエルという宝石が入っている。電気タイプの技を強化する特殊な道具だ。これを使えば、ダークライを凌駕できる。だが……。

——使えねえっ! 使いたくねえっ! 使ったら、由祈は……

電気のジュエルは、クレアからプレゼントされたもの。それも、彼女にとって、それを渡すのはカグラに“告白”をする意を示すものだったらしい。それを使うということは、即ち、由祈——自分の過去を切り捨てる、ということだ。カグラは葛藤の最中にあつた。

「……昔の悪夢を見せてやったつもりだが、無駄だったのか」

ダークライは残念そうに言い放ちながら、シャドーボールを放った。シアンは右手を横に薙いでそれを跳ね返す。右手が痛みを訴えたが、それを半ば無視してダークライに肉薄した。ダークライの目の前に来て、回し蹴りを繰り出すもダークライはそれを上方に移動することで回避した。シアンはそれに反応して飛び上がると、ダー

クライの頭から伸びている房を後ろから左手で掴んだ。

「何？」

その左手を下の方に引くと、ダーククライの頭は後ろに沿った。急なことだったのでダーククライは反応できず、両腕も動くことを止めた。その間に、シアンは膝蹴りを叩き込んだ。

「ぐあつ……」

ダーククライはようやく手を動かして、シャドークローでシアンを斬り裂こうとした。シアンは受け流すようにそれを足で払うと、受け身をとらずに足で着地した。左手を、離さずに。

「！」

ぐいつ、とダーククライの頭は引つ張られる。カグラがその隙に、エレキボールを放つ。

「ぐおおおおおお！」

エレキボールはさながら、電磁砲のように周囲の空気を唸らせながらダーククライに向かっていく。シアンが寸前で手を離し、巨大な発光体がダーククライに直撃した瞬間、ダーククライの断末魔が轟いた。「なんだ、もう終わりなのか？ 情けない。今のは俺の全力の十分の一にも満たないぞ」

苦しそうに喘ぐダーククライを見降ろすかのように、カグラは唇の端を持ち上げた。

「ふ……さけるなあ！」

一体分の高さで構え、ダーククライは右手を宙に翳す。その瞬間、シアンは彼が何かをするのを阻止しようと、側面からある機械を突き付けた。青く塗られた鉄の塊。飾り気が無い四角錐に、側面の一つに取っ手とトリガーが付いている。見た目は銃のよう。だが、弾丸が飛び出すところは球体の機械がついている。

その機械は、暗黒銃と呼ばれる。対象の生物に悪夢を見せることで悶絶を誘い、更にはその生物を操作することもまなる機械。シアンはトリガーを引き絞った。ダーククライが、黒い煙に包まれる。これでダーククライは悶絶し、戦いは終わる——。

それは、彼の幻想だった。

「えっ!？」

「少年よ、良い様だな」

ダークライがそのまま床に落ちるかと思いきや、シアンの膝蹴りとカグラのエレキボールによってつけられた彼の傷がみるみる塞がっていった。

「私の力から作られたものを製作者である私自身に突き付けるとは、愚かなものだ」

シアンの背中に、衝動が走った。カグラは一瞬彼を睨めつけたが、すぐにダークライに対する憤慨を表した。

「そうか、悪夢を見せるものだからこそ、こんな銃を作れたんだな。力を注入してただけか」

舌打ち混じりに、シアンはその意味を理解した。暗黒銃を徐に投げ捨てると、ダークライの腹の高さで足を振りまわした。だが、ダークライは足を掴むと、シアンを投げ飛ばした。

「うわあっ!」

直線のような弧を描いて、シアンの体が壁にぶち当たった。受け身が不充分であったため、全身に痛みが走る。床に落ちた後、シアンは体に遅まきながら立ち上がるのに必要なだけの力を籠めた。それでも立つことに、彼は一秒の時を要した。シアンの姿勢が真っ直ぐになったときには、カグラとダークライの技がそれぞれ激音をたてながらぶつかり合っていた。ダークボールらしき黒球と黄金色に瞬く銀の針が交錯し、それぞれの色を混ぜあつて消滅し、爆発する。鮮やかな色彩の中を、煌めく閃光が再び駆け抜ける。

「……」

バリバリッ! と音がして、ダークライに十万ボルトが突き刺さる。ダークライは直撃の寸前に両手を前に出して十万ボルトを防いでいた。あたかも銅像の如くその姿勢を保ったまま、ダークライは両手の内に力を籠めた。シャドーボールが生成され、流星のような早さでカグラに迫る。カグラは、それを振り払うべく、アイアンテ

ールを構えようとした。そのときだった。シアンが横槍を入れたのは。暗黒星雲ダークネビュラが、紫の尾を引きながらシャドーボールを突き破った。シャドーボールは風船のように容易く割れた。

「ありがとよ。無駄な浪費が消えた。……っと！」

シアンに礼を言う暇虚しく、カグラの体はダーククライに向かつて矢のように飛んでいった。そして、十万ボルトを遥かに凌駕する電圧が彼の体を覆う。見た目も音も凄まじく、傍らで聞いていたシアンはカグラの体が耐えきれないのではないかと心配になった。

ボルテッカー。電気タイプの技の中で、最強クラスを誇る技。単純な威力としては、遠い大陸に住む黒い龍の伝説ポケモンが覚えるクロスサンダーにも太刀打ちが叶う。勿論、使役者はカグラである、黒い龍とは程遠い。——だが、目の前の光景に対してシアンはそのようなことを言えただろうか。サメハダ岩程の大きさの電気がカグラを包んでいる。地上に届く太陽光をどれだけ集めればあの光と同等になるだろう。シアンは畏れを抱いた。カグラの力量に。そして、それを受け止めるダーククライに。先程までの余裕を見せていたあの顔はどこへ言ったのだろうか。ダーククライの碧眼は見開かれ、カグラのボルテッカーを受け止めることに全力を注いでいると傍目でも分かった。

雷奔と黒雲。両者の鏖迫り合いは、その衝動だけで部屋の壁天井一面に無数の亀裂を入れた。床とて無事だったわけではない。シアンは床に立っているのが心配になった。後ろで倒れている仲間達の安否を確認したくなって、思わず後ろを振り向く。彼等に危険は及ばないと判断して、また鏖迫り合いの光景に視線を投げる。力と力が互いを淘汰せんといきり立つのを見て、彼は一瞬だが猛烈な劣等感に襲われた。自分がいるのは場違いなように思えてきた。だが、カグラがダーククライに淘汰されたことによってその不快感もすぐに消え去った。

「カグラさん！」

「うぐっ……」

床を二、三回ゴロゴロと転がって、カグラは四肢を投げだして床に仰向けになった。それを見たダークライは、とどめを刺さんと右手を振り翳した。紫色の光の粒子が爪に集束し、一つの刃を作り出す。それは、亜空切断と呼ばれる技だ。ダークライは、亜空切断をカグラに放った。何かが断裂していく音が輪唱する。

「危ないですよっ」

亜空切断が、カグラを引き裂こうとした瞬間に、シアンはその手をとってカグラを引っ張った。カグラは、どこも切られず五体満足無事だった。

「有難い。……くそ、少し気を抜いたな」

カグラはシアンの手を離すと、自分の足で立った。シアンが後方に目をやると、後方の床が亜空切断の衝撃だけで崩れハープ達が下の階へ落ちていくのが見えた。その時、また断裂音が聞こえた。そこらを見ると、紫色の閃光がまたせまってきた。彼我の距離は十メートルほど。

「避ける！」

「よっと……」

シアンは、足をもつれさせながらもなんとか体勢を保った。揺れる視界の端で起こっていたできごとに、彼は何も反応ができなかった。それこそが、彼の劣等感をかきたてた。

「もう一回、ぶちかましてやるよ」

息の切れ間から宣言し、カグラは横にステップして亜空切断を回避すると、体中の電気を一気に放出し、電気の球体を体に纏った。莫大なエネルギーが彼の周囲で蠢き渦巻く。首に巻かれていたオレンジ色のバンダナがほどけて宙を舞う。

彼はまたボルテッカーで跳躍した。先と変わらぬ規模の威力が、ダークライに向かっていく。

「無駄だ」

ダークライは、またそれを受け止めた。そして力が互いを押し合った。

「う、おおおおおお！」

カグラのボルテッカーは、最初よりも威力が高かった。それは傍目から見ているシアンでも、いや、彼だからこそ分かった。悔しさに飲み込まれてしまいそうだが、認めざるを得ない。自分には手の届かない戦いであると。

下を見ると、ボロボロの床にカグラが着けていたオレンジ色のバングナが落ちていたのを見つけた。煤で汚れて、所々は黒くなっている。それを拾い上げようと、腰をかがめた。そして、手がそれに触れる……まさに、その瞬間だった。

——
ヴウン

——こ、これはっ！？

目眩を覚え、場所も忘れてへたり込みそうになった。固く瞑った瞼に、光が横一直線に走る映像が映る。そのまま、視界は暗闇に閉ざされたままだった。だが、神からのお告げのように、脳内にある声が響いてきた。

『——自分が弱いから、だって？ ふざけるな。それは、何もしないことに対する言い訳だ。自分が非力でも、正しいと思ったことを口で述べて実行するんだ』

声は、そこで途切れた。

「時空の叫び……」

今のは、カグラの声だった。彼自身の言葉だった。シアンに備わっていた能力が、彼にカグラのメッセージを伝えたのだろうか。シアンの脳内は、純白に埋め尽くされた。それは、カグラの断末魔によって閉ざされる。

「うわああああっ！」

シアンはハッと顔を上げ、黄色の塊が宙を飛んでいるのを見た。黄色の物体、文字通りカグラはシアンの足元に落ちた。

「カグラさん、大丈夫で……」

言いかけて、シアンは彼が悲鳴を上げる体に鞭打ち、自分の足で立とうとしていることに気がついた。それと同時に、ダークライが

次の攻撃に入った。

左手を突き出す。その掌に、青白いエネルギーが集まって球体になる。シアンは、それに見覚えがあった。かつて時源の塔というダンジョンでディアルガと戦ったときだ。時空を操る神とも呼ばれたポケモンが、最後に自分に止めを刺すために使った技。

時の咆哮。

ダークライが構える球体を見て、シアンは即座に考えを巡らせた。そこから一步も逡巡することはなかった。彼の紅蓮の瞳が、意志を持つ。

「やらせるか、ボルテッ……」

「待つて下さい」

四本足で立ち、ボルテッカーを仕掛けようとしたカグラに、シアンは制止を促した。電気が蓄積されることはなく、カグラが四本足のまま後ろを振り向いた。

「何だ」

シアンは彼の問には答えず、手を突き出しながらカグラの前へと先行した。

「待つて……」

突き出した手に、自分の中の力が渦巻くのが分かる。ダメージで疲弊していたシアンは、時空の叫びのものとは違った目眩すらも覚えた。しかし、ここでくずおれるわけにはいかない。負けてはダメだ。

——自分が弱いとか、そういうことじゃないんだ。正しいと思ったことは実行する。そして、最後まで突き通す！ そうすれば、彼我の差なんていくらでも埋められる筈なんだ！

そう言い聞かせて、シアンは床に足を着けるのを止めなかった。

「喰らってみろ、シアン。時の、咆哮」

「気合い珠アアアッ！」

ダークライの手から、青白い光線が放たれる。同時に、シアンの手からは流星のような光が噴き出る。二つの激突の衝動は、部屋に

新たな亀裂を入れた。天井がそのまま崩壊するのではなからうか。戦いの最中にいなければ、三人共そう感じただろう。力の渦がシアンの周囲に吹き荒れる。

時の咆哮と気合い珠のぶつかり合いは決着がつかず、双方が小規模爆発を起こして消失する結果に終わった。時の咆哮の副作用として、使役者は一定時間全ての行動を起こせないというものがある。ぶつかり合いが終わった今の時間はダークライに攻撃を仕掛ける最高の空白である。だが、シアンの足は彼の脳の命令を拒んだ。それどころか、機能さえも失って膝が床に着きそうになっていた。

「くそ……動……け……？」

時間は、虚しく過ぎていく。

カグラは、腹を床に着けてその様子を傍観していた。ここは、自分の出番であるうか。そうも悟った。今なら、やつに止めを刺せるだろう。平凡な電気技でなく、宝石の力を携えた技を使えば。

——使う、のかよ？

由祈とクレアとの板挟み。今ほど困難な状況に、しかも戦闘中に出くわすなんて。

心は半ば決まっていた。迷いだけがあった。その迷いさえ断ち切れれば——！カグラの頬の電気袋が、バチバチと唸る。両手が地面から離れ、彼は二本足となる。その時、頭の中で由祈の声が木霊した。

『お主は、昔の神楽のふりをしておるだけじゃろう？』

視界が、頭が動いていないというのに揺さぶられる。迷いは断ち切られつつある。そして、二言目が飛んだ。

『過去は過去。今は今なのじゃ。昔を振り返っても、生きているのは今なのじゃ。だから、前を向くのじゃ、神楽』

それは、聞いたことが無い台詞だった。恐らくカグラが由祈と一緒ににいたところに言われた言葉なのだろう。だからこそ未練を残すかと思われたその台詞は、逆にその未練を吹き飛ばした。

——ああ、そうだ！過去の思い出に纏われて、自由に動けな

いんだとしたら、俺はその過去を叩き潰してやる！ もう、記憶には捉われねえ！ 過去が俺を縛るなら、俺はその鎖を……。

「ぶった切ってやる？」

雷パンチ程の勢いで、カグラは右拳を突き出した。そこから力が溢れ出で、彼の全身の鳥肌が沸騰する。トレジャーバッグの中の電気のジュエルが、木星のように煌めく。その煌めきはトレジャーバッグから飛び出した。カグラは右拳でそれを握る。同時に、十萬ボルトが放たれる。

「やああーっ！」

電撃による爆発が生じ、塔の最上階は爆破されて空が剥き出しとなった。隣でシアンが口を開けて彼の顔を穴が空くほど見つめている。

「く、そ……貴様らアアア！」

ダーククライは最後の力を振り絞ったのだろうか。元々の黒と、カグラに受けた電撃の影響で黒く焦げている部分によって、彼は漆黒に見える。怒りで大きく見開かれた碧眼がぎらぎらと光沢を発した。彼は両手を重ね、ダークボールを生成している。今まで見た中では最も大きい。

だが、シアンとカグラはそれに立ち向かった。

「いくぞ！」

「はい！」

ダーククライの手から、暴発するようにダークボールが飛ばされた。フレミングレールガンカグラの手から直線電磁砲が、シアンの手から暗黒星雲が、ダイクネビュラそれぞれ伸びていく。二本の銀の針はダークボールを打ち破って、ダーククライを淘汰した。

30話 伝説と伝説の交叉（後書き）

おつ、次回で終わらせられそうだったあと思う反面、暗黒銃の下りがなんか自然消滅していないかと不安になったりも。あの物騒な銃は今後の伏線ということで自分の中では納得しております（ry

そして聞くところによるとTPPでポケモンに限らず全ての二次創作が書けなくなるらしいですね。おいおいどうしてくれるんだよ総理。ポケモン小説こそ生きていく醍醐味なのに。と、今ここでとかく騒いでも進展こそないわけで。今はまったりポケモン小説を更新している鏡花でした。

ではっ。

31話 悪夢の調・終章曲（前書き）

シアン

「遅い遅い遅い遅い」

m（――）m さて、本編に入りましょうか（殴）

シアン

「顔文字で謝ってんじゃねーよ。一度痛い目に遭ってみろ」

君が殴った時点で遭ってるんだけど。痛あ……（擦）

ああそうだ。もうすぐテストなもんですから更新スピードは下がります。イエーイ↑

シアン

「よし、今度は瓦割りを」

やめれ（汗）

31話 悪夢の調・終章曲

「やったか……？」

カグラが直線電磁砲の余韻として息を切らせながら訊ねた。ダークライだったものは、黒い麻布のようにずたずたになって床に落ちている。シアンの暗黒星雲とカグラの直線電磁砲が直撃するまではかろうじて白や赤い部分が見えていたのだが、今ではそこも焦げてしまった。天井が無くなり、壁も殆ど破壊された、最早部屋とは言えない部屋の中に吹いてくる風がダークライの体の一部を揺らす。

「……念の為、もう一発撃ちますか」

シアンはそう言つて、銀の針を構えた。それを、カグラが制した。「やめろ、仮に殺してしまつたら俺達が捕まるぞ」

彼が言い終えるか言い終えないかの内に、辺りが漆黒に染まつた。カグラは驚きを顔に携えて辺りを見渡した。だが、シアンは無表情を貫いて直立不動のまま言つた。

「ダークライ、貴方は自身の意識体を作りだし、僕達に戦わせていたでしょう。このダークライは偽物である、と波動が告げていました」

「何？」

カグラは、シアンの言つた言葉をそのままの通りに理解した。俺達が今まで戦っていたのは偽物なのか？ シアンは、それに回答するかのように言葉を繋げた。

「僕達が戦っているものとは別に、本物の悪夢の調がいたわけです。勿論、彼は倒されてなんかいない」

その声はいたく平淡だった。苛立ちを募らせているのか、恐怖が心に押し寄せてきているのか分からない。それをより誇張するかのように、暗雲は一匹のポケモンの形をとった。

黒いボディに、頭から伸びる白い房。首を覆う赤い起伏に囲われた碧眼。まさに彼等が今まで戦っていたダークライそのものだった。

「御名答だ、シアン」ロビンソン。流石は過去に波動使いとして名をとどろかせたルカリオ族の端くれであるだけのことはある」

「……意識体だけを飛ばす、ね。^{ナイトメア}悪夢を応用したんだろう」

カグラは眼光に苛立ちと焦燥を混ぜながら、ダークライを見据えてそう言った。口調は表情とは反対に、諧謔的でダークライを皮肉るような色が含まれている。ダークライは、その碧眼が細くなるように瞼を操作してからこう答えた。

「木下神楽、またもや御名答だ。二人揃って切れ者かだな。私が勝てる見込みはなさそうなので、ここらでお暇しよう」

「待て、お前は一体何をしに来たんだ」

シアンの声は、若干熱を帯び始めた。ダークライの動きが止まる。そして、含み笑いから声が抽出された。

「何と言うことはない。元々お前たちに会うつもりもなかった。ただ操っていたポケモン達のデータ採集に来ただけのことだ」

「データ、採集……？」

「う、ううん……」

クレアは目を前足で擦りながら起き上って辺りを見渡していた。周囲には共闘していたハープ達や撃破したポケモン達が横たわっている。知らぬ間に眠ってしまったのだろうか。天井ははがれおちて、何故かカグラ達は上の階層で戦っていた。自分達が下の階層に落ちた、とは気付けなかった。

「クレア……」

その時、ハープがのろのろと起き上った。眠気がまだ持続しているのだろうか、幼さを表す丸い目が半分閉じられている。クレアが大丈夫か、と声をかけようとしたとき、その目は大きく見開かれた。それによって、ハープの表情は驚愕の色に染まる。

「あ、あれ見て！」

ハープの前足の延長線上を、クレアは撫でるように視線を動かした。そして、行き着いた先は一つの光景だった。しかし、普通に見

られるものではない。何故なら、先程倒した敵達が黒い炎に包まれているのだから。

彼等の体には視覚的な変化が見られないので、燃えているだけで熱はないのかもしれない。だが、それはどう見ても異常だった。

「なんなのよ、あれ……」

「分かんない……」

ポケモン達に纏わりついていた黒い炎は、時間が経つとポケモンから離れ、天井の割れ目から外へと出ていった。

「……なんだか、嫌な予感がするわね」

クレアはそこを見ながら、顔の筋肉を鉄以上と表記されてもおかしくないほどに硬直させた。目がつり上がって、心の中の不安は表れていない。

「先程お前たちの仲間が戦ったポケモンのデータをコピーした。これを加工して原物より遥かに強いポケモン達を生成する。私はその為のデータ採集に来たただけだ」

ダークライは、床の穴から這いずるように出てきた黒い煙を手にして答えた。それに対し、カグラは野性味全開の顔つきでダークライを見据える。言葉によつての答はなかった。

「成る程、戦闘要員の確保にでもきたというわけですか。会社が壊滅させられてしまった為にそこからリスタートしなくてはならなくなつたんですね」

シアンは持ち得る皮肉という単語を全て頭の中で混ぜ合わせて、ダークライの平静を少しでも揺さぶろうとした。だが、それは無駄である。彼自身が一番分かりきっていた。今まで偽物と戦っていたということは、このダークネス・ナイトメアという会社も資金集めの為の建物に過ぎないだろう。シアンは苦笑い気味にカグラを見た。カグラは、問答無用と言わぬばかりに、両手から電撃を打ち放った。先程似非ダークライと戦って体力を消耗したとは思えない威力だった。だが、ダークライはそれを軽々と避けた。シアンはダークライ

の反撃を予想し、手刀の準備をしておいた。しかし、ダークライは一抹の笑みを浮かべたあと、黒い煙となって去っていった。

「しまった！」

カグラはダークライを取り逃がしたことに對して齒噛みし、舌打ちを一つ鳴らした。そのあと、床に開いた穴から下の階層へ飛び降りた。ダークライのことは一旦諦めたのだろうか。下にはハーブ達がいる。シアンも彼に続き、穴から飛び降りた。

「シアン！ 大丈夫！？」

「あ、ああ。別状はないよ」

「ホント、無茶するやつね。そういうのを馬鹿っていうのよ」

飛び降りた瞬間、シアンはハーブとレイナから駆けよられた、二人の言葉を曖昧な返事ではぐらかそうと思ったが、チップやセレント達が割り込むための隙間もない程マシンガンクエスチョンを浴びせられることとなった。

「カグラ、大丈夫？」

「ああ、全く問題ねえ。で、何でお前は俺の額に前足をかざすんだ。病人じゃねーぞ？」

クレアは自らの天然からでた行為を指摘されると無言のまま前足を離れた。妙にとぼけたような表情を見ていると、何を考えてるのが解せない。そうカグラは思いながら何ということも無く、クレアの下に落ちた視線を追ってみた。そこにあったのは、自分のトレジャーバッグ。脳内に疑問符を掲げながらクレアの意図の理解に苦しむカグラそんな彼を尻目に、クレアは徐に前足を伸ばしてトレジャーバッグのある一点を触った。その仕草は、彼女がイーブイだった頃と全く変わらない。可愛いといえば可愛いのだが、いきなり前足を伸ばしてくると少し驚く。そんなカグラは、彼女が触っている部分に何が収められていたかを思い出し、更に驚いた。

丁度、電気のジュエルをしまっていた場所だったのだ。勿論、そこに件のジュエルは入っていない。

「カグラ、私がプレゼントした電気のジュエル、使ってくれたんだ

ね」

「……ああ」

カグラはまた葛藤の最中に引き戻されるのではないかと思った。本当に自分の決断は正しかったのだろうか。

——ダメだ！

迷いが生じてしまったらもう収めることはできない。彼自身でも自覚している悪癖である。視線をそらすと、その先にはチコリータとイーブイの少女に土下座しているリオルの少年の姿があった。あの少年も迷っているのだろうか。断ち切るって決めた筈だろうが。心を決めた時の自分が、今の自分を責めている。それに返事はできない。

「人間も、ポケモンも、皆弱いんだな……あのダークライだってそうだ」

「な、何？ どうしたのカグラ」

クレアは、カグラの哀愁漂う声に少しなりとも恐怖の片鱗を覚えた。答はない。否、カグラは無言を答案としているのだ。

「とりあえず、ぶっ壊しちゃった建物の賠償金はPPOから支払われるわ。そして、アタシはコレを総長に突き付ける」

レイナがダークネス・ナイトメア社についての調査を終え、チーム：ヴレイフェルは帰り、アダプターは事件の後始末をレイナから命ぜられ、各方向に散っていった。そして、チーム：ブライトとレイナもまたPPOへの帰路に着いていた。その途中でレイナが書いたのは、一枚の書類だった。小さな足形文字が多く羅列され、ハーブはすぐに読むことを断念して、チップとの会話に集中した。シアンは、タイトルの「報告書」という文字にだけ注目していた。

「ダークネス・ナイトメア社の悪戯を書き連ねたのか」

「悪戯なんて、可愛い表現ね。間違っではないないけど。大体そんなところよ」

レイナはトレジャーバッグにその紙をしまいながら答えた。

「これを総長に突き付けると、ダークネス・ナイトメア社に正式に捜査が入るわ」

シアンは適当に首を縦にふることで相槌を打ちながら、徒然と今の言葉を考えていた。その言葉の中に、引つかかるものがあつた。

「……正式に？ レイナ、もしかして僕達……」

「あ、今までののはダークネス・ナイトメア社が本当に怪しいかどうか調べる為の余興よ。アタシが調査して何もなかったらこんな紙も要らなかつたんだけどね」

「ちよつと待て！ それって僕達賠償金請求されるんじゃないか！？」

シアンは上ずつた声で、裏返すことなく何とか終わりまで言い切つた。今までそんなことを知らずに自分達は暴れていたのか。いつも無茶を要求してくるレイナだが、ここまでさせられるとは思わなかつた。

「もう請求されてるわよ。だからPPOが代わりに払うって言ってるでしょ」

レイナは厳然たる態度で言い返した。シアンは力の抜けた表情で笑うしか手立てがなかつた。

「……なんか納得いかない」

「シアンー！ レイナー！ 早くしないと置いていくわよー！」

前方からハーブが叫びかける。その横にはチップも控えていた。

「分かつてるわよ。まったく、子供なんだから」

君もまだまだ子供さ。シアンはハーブ達の元へ走っていくレイナの後ろ姿に、心の中だけでそう呼びかけた。

それから数日後のことだつた。トレジャータウンでの買い物を終えたシアンが、パッチールのカフェでオレンの実が入ったスープを飲んでみると、レイナが呼びかけた。

「シアン」

「ん、レイナ？ どうしたの？」

シアンはスーパをテーブルの上に置いて、彼女の方に向き直って背筋を衝動が走り抜ける感覚を覚えた。レイナが不機嫌極まりないという表情でそこにいたからだ。

「……レイナ？　ちよつと、人相悪いよ。ほら、いつもみたいに可愛い表情で」

“可愛い”という単語に反応して頬を紅に染めるレイナだが、表情は一ミリたりとも変わらない。シアンは逃げ出したくなった。

「……レイナ？　ちよつと、何があっ」

「アンのせいねーっ！」

「うぎゃあちよつと、いきなりアイアンテールを振るわないでひいっ！」

旋風が鼻の前を走り抜けた。これを機に、彼女をたしなめようとしても無駄だということが分かった。だが、レイナは何故ここまで怒っているのだろう。そう質問する理由を訊ねる前に、彼女は言った。

「最近バタフリーにアタシがシヨタコンっていう霰もない噂を流し込んだのはアンタでしょうが！」

「いや、それってただの言いがかりでしょ！？　それにレイナがシヨタコンだなんてあづっ」

言いかけて、シアンは顔の横にアイアンテールを喰らって倒れた。叛乱する脳内で何があったのかと考える。

——ああ、そう言えばこの前レイナとチーム：アダプターとでどこぞの某企業を潰しに行ったっけな。

よく考えれば、その時のメンバーはレイナより年下であった。どころか、チップなどは今年十四歳。シヨタと言われてもおかしくない年齢で、何より彼女のお気に入りチーム：アダプターは十二、三歳のイーブイが構成メンバーとなっている。

「レイナ、それはただの八つ当たりだよ……」

ボソツと漏らしたその声は、彼女の耳には届いていなかった。

31話 悪夢の調・終章曲（後書き）

レイナシヨタコン説という名のフラグが立ちましたーw よく考えれば設定ではレイナ十八歳、シアン十六歳です。

レイナの本命は勿論s（ry）なのでこれをシヨタコンというのは不明ですがおっと誰か来たようだ。

次話は数話前にもやったパロディ回を入れようかななどと書き始める前から笑っていたり。ただとあるラノベの話をパクっただけにならないか、というのが目下の不安です； とりあえず原作のSEに出てきたたあの御方も出す予定……あくまで予定っすよ？ 誰が出るのかはお楽しみですw
それでは。

32話 拳で（前書き）

ウィッス。もう更新遅れたのは気にしねーぜ（処刑

今回から新章突入なのです。今回も悪役……的なキャラクター↑
が出るという。まあ一発屋で終わるけど（黙らないか

因みに某映画を意識して書いている、と言えば正しい気がします。

32話 拳で

この世界にはとかく神秘的なものが偏在している。過去へ遡って世界を救ったという伝説を持つリオルや、幻の大地という迷宮へ行く許しを得ているチコリータ。もつと昔には、忽然とこの世界に現れた元人間を名乗るピカチュウ。そして、北の山脈地帯の真底を超えてポケモン達の文明の中へ身を投げた人間。彼はその屈強な肉体であらゆるポケモン達を淘汰してきた。その人間の名はゼアン。口ビンソン。前述の、過去へ遡って世界を救ったという伝説を持つリオルの先祖である。彼が通った後の道に潜んでいたポケモン達は、恐れに身をすくませるか無様にやられるかの二つに一つしか選択肢を与えられなかった。

“天空の階段”というダンジョンは、レックウザという伝説のポケモンの住処としても有名で、そこに埋蔵された空のハーモニカという秘宝の存在や、かつて百年ほど前までは“天空の塔”と呼ばれていたことにおいても知られている。件の人間は、そのダンジョンに潜っていた。

「ヒヤッハハハハハハハ！ ぶちっ殺してやるぜえ！」

若干巻き舌になりつつ、アメモースに全体重をかけた拳を打ちこんだ。ローブを被ったその巨体は、堰き止められることを知らずに悠々と登っていく。雲の塊で構成されたダンジョンの床は、見た目とは裏腹に固い。ゼアンの足は床に入り込むことなくしかとそこを踏みつける。前へ前へと一歩ずつ進んでいく足は、途中の時点でふと動くことを止めた。

「……何だこいつあ？」

目の前にはポケモンが一人、君臨するがごとくそこに在った。大きさは二メートルほどであろうか。白い肢体に紫色の尻尾。流麗ではなくも線の細い体躯でありながら、そこからは剛健たる覇気が滲みでている。ゼアンの眼に止まったのは、このただ広い通路の真中

に立っていたからではなく、そういう理由もあったのであろう。

通常の探検隊、若しくは探検家であればこの見るからに強豪と分かるポケモンを倒したいと願うのが常であろうが、ゼアンはそうではない。彼は出来る限り戦いを避け、敵が挑んできた場合にのみその力を振るうことをよしとする。迫力こそは凄まじいものの、自分に興味が無ければ敵ではない。そう思い、ポケモンの横を通り抜けた。その時であった。

「待て、貴様」

低い静かな声がゼアンの耳をえぐるように突き刺さった。微塵でも恐れを感じたのは、生まれて初めてだと思った。無論のこと、負けなどという単語を思い浮かべなどせず、ゆっくりと振り向いた。相手は振り向くことなく、紫色の尻尾を垂らしたままに背中を向けていた。

「私は最強のポケモン、ミュウツーだ。私と勝負せずにここは通さぬ」

「はあ？」

最強のポケモンと、自分で名乗るものであろうか。ミュウツーと名乗るポケモンの言葉遣いに少しほど呆れというものを覚えた。相手が挑んでくるのであればこちらとて応戦はしようと考えつつも、こんな妙ちきりんな相手に戦うのは少し気が引ける。

「悪いがよ、断らせて貰っていいか？ 俺は変な相手に戦う趣味はねーんだが」

そのまま自分に帰ってもおかしくもない台詞をミュウツーに向ける。それに対してかミュウツーは、挑発的な台詞を反駁とした。

「私と戦いたくないというか。ならばそれは逃げと受け取ってよいのか？ 最強と名乗る相手に逃げても恥ではないがな」

苛立ちが募ることはなかった。自分に敵わないと分かれば相手も戦いを挑むことはないのではないか、そう思っ、ゼアンはこう言った。

「うっせーよ。俺だって最強の人間と謳われているんだが？ 確証

もなく最強名乗るなんざあ百年はえーよ。ヒッヒ」

答は、帰らなかった。

「ああ？ どうしたよミュウツーさん、急に黙りこみやがって。最強の人間相手に怖気づいたかあ？ ホレよ、かかってみるや。ヒヤッハハハハハ！」

背中だけしか見せることのないミュウツーに、ゼアンは嗤いかける。その背中が小刻みに震えていると気付いたのは、その直後であった。ようやく振り向いた彼は、怒りの仮面で顔を覆っていた。

「貴様、人間か？」

「ヒヤッハ、ごめーとー？ だからつつてポケモン相手に負けるつもりはさらさらねえよ。はっ、どうしますか？」

ゼアンは、この言葉でミュウツーを抑制することはできないのだと悟った。しかし、時すでに遅し。ミュウツーが行動で怒りを露わにし、始めて気付いた。

——アイツ、人間に恨みでもあんのか？ それとも、俺が人間であることが不満か？

勿論、後者はないだろう。そう推論付けた。ミュウツーの拳が迫る。思ったより速く、ゼアンの心の中で一筋の陰惨が頭角を表した。
「っっ？」

反射的に腕を掴み、敵の襲来を阻止する。腹部に膝蹴りを入れようとしたところ、ミュウツーは至近距離からスピードスターを放った。放たれた技が何であるかも分からぬゼアンに、スピードスターが炸裂。咄嗟のところで腕をクロスさせて防いだ為、ゼアンが受けたダメージは少なかった。

「やってくれんじゃねえか……ヒッハ！ 血が滾るぜえっ！」

ゼアンはミュウツーの足元近くに踏み込んで、懷の中に入る。ゼアンの方がミュウツーよりも頭一つ分背が高いにも拘わらずにだ。そして、右手でほぼ真横となる角度からフックを繰り出した。

「っ……」

ミュウツーは舌打ちと共に声にならない声を出す。しかしながら

も、そのフックは片手で受け止めた。するとゼアンは、右足を軸として回転しながら左足による膝蹴りを振った。ミュウツーはフックを止めている手を離し、地面を蹴って後ろへ飛ぶことでそれを回避する。それでゼアンから離れられなかったため、ゼアンの拳はすぐにミュウツーの顔面に飛んできた。

このようにして、ゼアンのインファイト攻撃は続いた。ゼアンが攻撃しては、ミュウツーはそれをいなし、また攻撃してはかわし、そして攻撃してはそれを最小ダメージにて受け止める。

「ヒヤッハハハハ！ おめーさん、最強のポケモンなんて大層なモン名乗ってた割にはよえーなあ！？ 人間一人にもまともに攻撃できてねーだろーが！」

「……」

ゼアンの嘲りに対し、ミュウツーは返答を作らなかった。作らなかったのではなく、作らなかったのだ。仮にその戦いを傍観する者がいれば、彼にはローブを羽織った巨体な者が拳の弾幕によって白い華奢なポケモンをいたぶっているように見えたであろう。そして、白いポケモンは決して圧されているように見えなかったであろう。何故なら、白いポケモンは今も変わらず厳全としたオーラを放っているのだから。

そして、いたぶられているように見えていても且つそのようなオーラを放つということは、それなりの理由があるということである。ゼアンは違和感を覚えた。それを振り払って続けて殴り続けたのだが、その違和感の正体はすぐに判明した。ここまで追い詰められていながら、ミュウツーの顔には苦痛も焦燥も表れていない。襲いかかる拳に対し、難なく対処しているように見える。まるで義務を忠実をこなしているように。ゼアンの心の中に、いつのまにか苛立ちが生じた。戦いに従事する上で、あつてはならないものでもあるそれを、こともあるうに彼は抱いてしまった。体と共に振って繰り出した拳が繰り出され、ミュウツーの手に阻まれ、且つ彼は次にとる動きを想定していなかった。

時が、一瞬の空白を見せた。

ゼアンの思考は、一文字たりとて生み出すことを行わなかった。負けるとさえ思う由も有ろう筈がなかった。目の前に、黒く染まった手さえ突き出されなければ。

「っ!？」

「はあっ!」

シャドーパンチか、ゼアンは凍りついた意識の僅かに起動する片端でそう悟った。悟っても、どうにもならないということも判明した。

否、どうにかはなる。彼は己が両手をシャドーパンチの前に持ってきた。腕まで流れる迸る痛み of 奔流が、迎撃成功を伝える。鍛えた筈の肩や腕が折れるやもしれぬとその時には感じた。そして、次に感じたのは浮遊感とローブをはためかせる心地の悪い風の当たり心地であった。見えたのは、形変わらずして厳然たる様子を保ちながらこちらに飛んでくる黒い珠。恐らくはシャドーボールであろうが、ゼアンの脳はそれがシャドーボールであるという処理が出来なかったのである。

天空の階段の壁際で、小爆発が発生した。

——殺したか？

ミュウツールの心の中に、紅い感情が沸き上がってきた。殺せていたら良い。あの、憎たらしくてたまらない人間を——殺せていたら——。

壁に穴が開いていて、人間の姿はなかった。恐らくダンジョンから落ちたのだろう。シャドーボールによる生死は確認できないが、ここから落ちたらまず助かりはしないだろう。

より強くなるために籠っていたダンジョンで、怨敵たる人間に出会え、よもや始末までできようとは、今日は運が良い日だ。ミュウツールは、口の端を持ち上げた。

シアンとハーブは、今日も探検に勤しんでいた。空は本来の色である青と雲の色である白によって斑になっており、それが情緒をより感じさせる。彼等二人が歩いているのは、森の中を横切る一本道。二人は、並んであるいていた。

「……そういえばさ、ハーブ」

「何？」

ふと、シアンが会話を切り出した。妙なことにあまり機嫌が良さそうとは言い難い。声色が低く、寧ろ不機嫌であることは火を見るより明らかというものであった。

「この前銀行に行つたみたんだけどさ、残高が無くなってたんだよね。この一カ月何してた？」

「ちよつ、何！？　まるで私がお金全部使つたつて決めつけるような言い方しないでよ！」

「チップにもそう訊いたら、銀行のお金には手をつけてないつて言われたんだ。当然、僕も使つた記憶はない。で、ハーブ。この一カ月何してた？」

言訳無用。シアンは先の台詞に目力だけでそう付け加えた。

「わ、私は何もしてないよ！　いやでもそう言えば良い技マシンを見つけたからゴニョゴニョ……」

語尾をテキトーに言うことで、ハーブは誤魔化そうとした。勿論のこと、シアンはそれを許す筈がない。

「最後の方、聞こえないんだけど。何？　それと技マシンがどうしたの？」

「ええつと……。い、いや何でもないの。ただ最近お金になるような仕事してないから貯金が尽きちゃったんじゃないかなってアハハハハ」

ゴメンナサイ。ハーブは小声で謝つた。その意志を、シアンは汲み取つた筈だ。筈なのだ、が。その許容は得られなかった。

「そつかそつか。それじゃ仕方ないね。……クタバレバカヤロウ」

「いやあああーっ？」

シアンの最後の捨て台詞を神経で感じ取った瞬間、彼の顔を見ることも忘れて一直線に走りだした。その遙か先にあったのは、ズタになった布を一際大きな枝に引っ掛けた一本の巨木であったが、それは森の深緑極まる木々に阻まれ、シアンとハーブにはまだ見えない。

32話 拳で（後書き）

32話を書き終えて読みなおしてみての感想。

何だこれ……無駄に文章堅いエ……。

まあいい。シリアスだからそう見えるんだ。うん、そうなんだ↑
ともあれ前半のシリアス場面と後半のほのぼの場面のギャップは仕方ないかなあなんて考えてます。だってシリアスだけだったら四千文字もいかねえんだヨ（

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5673s/>

ポケモン不思議のダンジョン 新伝説 闇の司

2011年12月5日19時12分発行